大在家遺跡

第1次・2次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第153集

2006

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

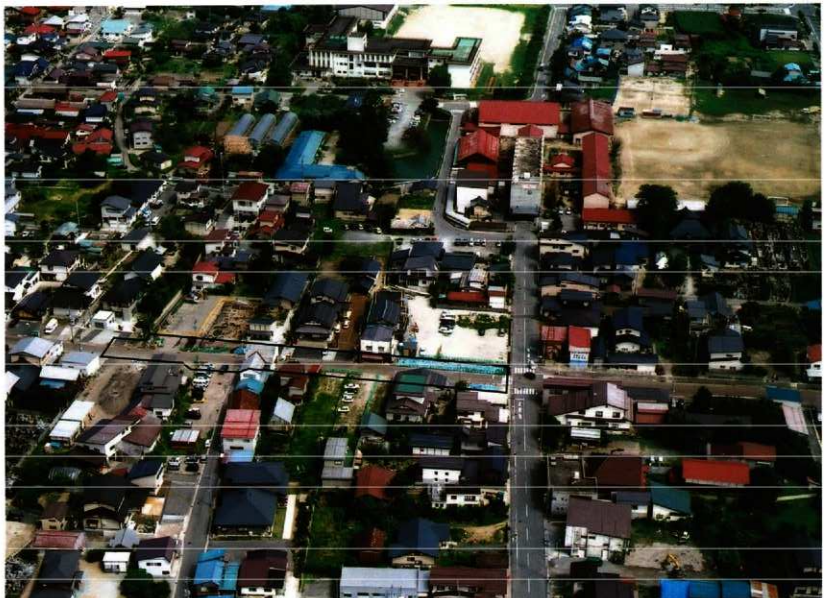
大在家遺跡

第1次・2次発掘調査報告書

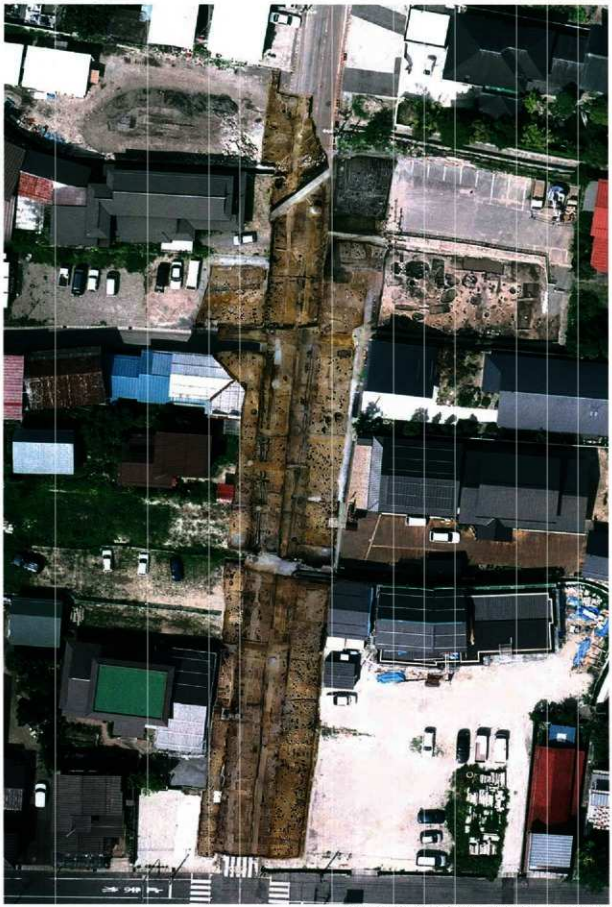
山形県埋蔵文化財センター調査報告書第153集

平成18年

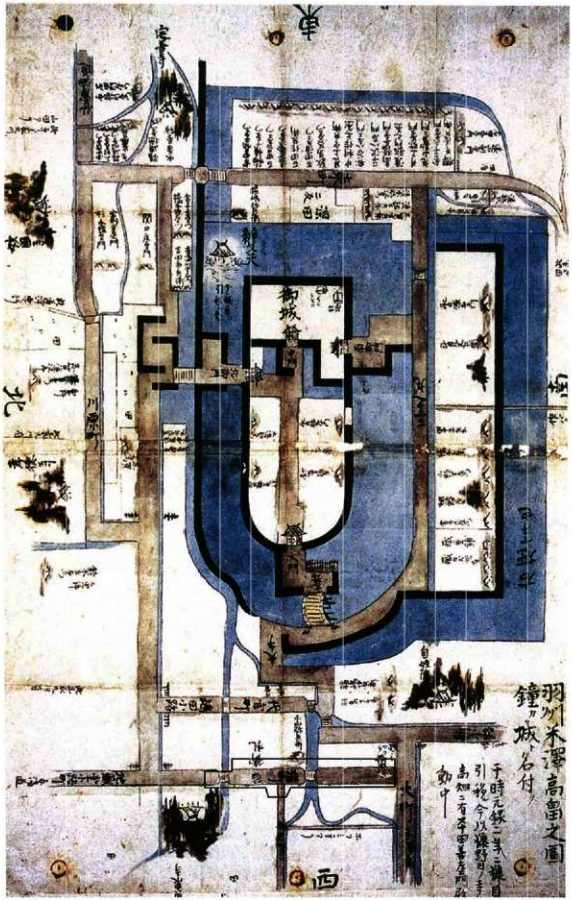
財団法人　山形県埋蔵文化財センター



遺跡近景（↑W）：実線が調査区を表す。



近世（上層）の調査区全景（上空から：合成写真）



近世の高畠城絵図（貞泉寺所蔵）：実線が調査区を表す。

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した大在家遺跡の調査成果をまとめたものです。

大在家遺跡は、「まほろばの里」つくりを進めている高畠町市街地中心部にあります。付近は商店街や宅地で、入り組んだ道路や古い白壁の土蔵などからは、室町時代～江戸時代に伊達氏の居城や幕府の代官所が置かれた高畠城の城下町としての面影をうかがうことができます。本遺跡の北側には、屋代川が流れ、周辺には高畠町尻や日照遺跡、高安窯跡などの県内では希少な飛鳥時代の土器が出土する遺跡が数多くあり、古くからこの地で人々が生活を営んでいたことがわかります。

この度、山形県置賜総合支庁建設部の主要地方道米沢高畠線（高畠都市計画道路中央通り線）街路整備事業に伴い、工事に先立って大在家遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、飛鳥・奈良～平安時代の古代の河川跡や、室町～江戸時代の高畠城の城下町に係る道路の区画溝や建物跡の柱穴などの遺構が検出されました。

遺物では、飛鳥時代の須恵器や土師器などのほか、愛知県瀬戸・美濃や北九州産の古伊万里や唐津焼などの中～近世陶磁器、東北地方で焼かれた在地の近世陶器も出土しました。

今回の調査では、特に木樋（もくひ）と呼ばれる、江戸時代の上水施設が発見され、県内では出土例が少ない当時の生活の一端を知る貴重な発見となりました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な国民的財産といえます。

この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及・学術研究、教育活動などの一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成18年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

理事長　　佐　藤　敏　彦

本書は、地方特定道路整備事業に係る大在家遺跡の発掘調査報告書である。
既刊の年報、調査説明資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
調査は山形県の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
出土遺物、記録類は、報告書作成終了後、山形県教育委員会に移管する。

調査要項

遺跡名	大在家(だいざいけ)遺跡
遺跡番号	平成３年度新規登録　町遺跡番号A―17
所在地	山形県高畠町大字高畠字大在家
調査委託者	山形県
調査受託者	財団法人山形県埋蔵文化財センター
第１次調査	
受託期間	平成16年４月１日～平成17年３月31日
現地調査	平成16年６月７日～平成16年10月22日
調査担当者	調査第二課長　尾形　與典
	主任調査研究員　伊藤　邦弘
	調査研究員　植松　暁彦（調査主任）
	調査研究員　樽　　綾
第２次調査	
受託期間	平成17年４月１日～平成18年３月31日
現地調査	平成17年５月16日～平成17年10月21日
調査担当者	調査研究部長　佐藤　庄一
	主任調査研究員　伊藤　邦弘
	調査研究員　植松　暁彦（調査主任）
	主任調査研究員　渡辺　淳一
調査指導	山形県教育庁社会教育課文化財保護室
調査協力	山形県置賜総合支庁建設部道路計画課
	置賜教育事務所
	高畠町教育委員会

凡　例

1　本書の作成は植松暁彦・櫛　綾・渡辺淳一があたり、本書の執筆は植松暁彦が担当した。

2　遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第X系（日本測地系）により、高さは海抜高で表す。また、方位は座標北を表す。

3　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記の通りである。

ＳＢ掘立柱建物跡	ＥＰ建物柱穴	ＳＰ柱穴・ピット	
ＳＤ溝跡	ＳＥ井戸跡	ＳＫ土坑	ＳＸ性格不明遺構
ＲＰ登録土器・陶磁器	ＲＱ登録石器・石製品	Ｐ土器片	Ｓ石　Ｆ覆土　Ｙ床面

4　遺構番号は、現地調査段階での番号を、そのまま報告書での番号として踏襲した。なお、同一の遺構は、最初に調査した遺構番号を代表させ、他は註に括弧で示した。

5　遺構実測図は１／30～１／100の縮図で採録し、各々スケールを付した。

6　土層観察においては、基本層序をローマ数字で、上層の近世遺構覆土を算用数字で表している。下層の古代河川覆土は、算用数字の頭にＦを付した。

7　遺構実測図中に焼土・炭化層（▨）を付している。

8　遺構実測図中のグリッド「○―×」は「X軸―Y軸」を表す。

9　遺物実測図・拓本図は１／３～１／12で採録し、各挿図にスケールを付した。

10　遺物実測図中の土器は、古代の土師器：断面白抜き、赤焼土器：白抜きドット、須恵器：黒ドット、漆：（▨）、黒色処理：（▩）を実測図中に付している。中～近世の陶磁器の胎土目・砂目：（▨）、漆器の赤色漆（▨）、黒色漆（▩）を実測図中に付している。中～近世の磁器は白抜きドット、陶器は断面白抜きとした。

11　遺物実測図中の釉薬は、釉の厚いものや割れ口から明瞭に判断できるものを付した。

12　遺物観察表中において、（　）内の数値は図上復元による推定値（器高は残存値）を示す。

13　基本層序及び遺構覆土の色調記載は1999年版農林水産技術会事務局監修「新版基準土色帖」に拠った。

14　遺物実測図中の拓本について、断面左側を内面、右側を外面とした。ただし、古代はその逆とした。

15　木製品の木目方向は同心円と直線で模式的に図示した。

16　発掘調査及び本書を作成するに当たり、下記の方々からご協力、ご助言頂いた。ここに記して感謝申し上げる。（順不同・敬称略）

貞泉寺・井上芳雄、山崎　正（高畠郷土資料館長）、大橋康二（唐津・伊万里）、藤沢良祐（瀬戸・美濃）、堀江　格（岸）、近藤真佐夫、吉田博行（会津本郷）、渡辺啓一、山田秀安、志賀隆次（大堀相馬）、手塚孝、菊池政信（戸長里）、水野　哲（成島・戸長里）、三上喜孝（墨書土器）、加藤和徳（板碑）

17　委託業務は下記の通りである。

基準点測量業務	株式会社三協エンジニアリング
遺構写真撮影	株式会社シン技術コンサル
遺物保存処理	株式会社吉田生物研究所
自然科学分析	パリノ・サーヴェイ株式会社

目　次

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経緯……1

2　調査の方法と経過……1

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境……6

2　歴史的環境……6

Ⅲ　遺跡の概観

1　調査区と層序……11

2　遺構と遺物の分布……11

Ⅳ　検出遺構

1　掘立柱建物跡……26

2　道路関連遺構……29

3　水路跡・溝跡……35

4　木樋跡……39

5　井戸跡……42

6　土坑・性格不明遺構・木組遺構……42

7　古代河川跡……54

Ⅴ　出土遺物

1　中～近世の陶磁器……58

2　中～近世の木製品……73

3　中～近世の金属製品……77

4　中～近世の石製品……79

5　縄文時代・古代の出土遺物……82

Ⅵ　まとめ……97

付編

「大在家遺跡の自然科学分析」

報告書抄録……巻末

表

表1　大在家遺跡第1・2次発掘調査工程表……2
表2　中～近世の高島城周辺（横町）の年表……8
表3　調査各区の遺構・遺物番号の登録表……9
表4　各区の主な柱穴（柱根・根固め石・礎盤）一覧表……48
表5　中～近世陶磁器観察表……88
表6　中～近世漆器・木製品観察表……94
表7　中～近世金属製品・古銭観察表……94
表8　中～近世石製品・板碑……95
表9　縄文時代・古代の遺物観察表……96

図版

第1図　遺跡位置図……3
第2図　遺跡概要図……3
第3図　明治10～20年代の高島町図……4
第4図　周辺調査区周辺図……4
第5図　高畑城略測図……5
第6図　遺構配置図……7
第7図　調査区細分図……7
第8図　遺構平面図（1）……12
第9図　遺構平面図（2）……13
第10図　遺構平面図（3）……14
第11図　遺構平面図（4）……15
第12図　遺構平面図（5）……16
第13図　遺構平面図（6）……17
第14図　遺構平面図（7）……18
第15図　遺構平面図（8）……19
第16図　遺構平面図（9）……20
第17図　遺構平面図（10）……21
第18図　遺構平面図（11）……22
第19図　基本層序……23
第20図　SB362建物跡・SA363柱列……27
第21図　SB833建物跡……28
第22図　近世道路土層断面……31
第23図　SD1201・1570南北側溝……32
第24図　SD205・234東西側溝……33
第25図　SD31中央水路……37
第26図　SD1702北端石積水路……38
第27図　SD1531木樋……40
第28図　SD470・538・528東西溝……41
第29図　SE136・1110・2910井戸跡……43
第30図　SK412・418・313土坑・
　SX2205性格不明遺構……45
第31図　SK605・1436・1103・218土坑・
　SX410性格不明遺構……46
第32図　SK1711・491・482土坑・SX802・
　801性格不明遺構・SK1723木組遺構……47
第33図　SG1773古代河川跡……57
第34図　SG1773古代河川跡土層断面図……55
第35図　近世陶磁器（1）……60
第36図　近世陶磁器（2）……61
第37図　近世陶磁器（3）……62
第38図　近世陶磁器（4）……63
第39図　近世陶磁器（5）……64
第40図　近世陶磁器（6）……65
第41図　近世陶磁器（7）……66
第42図　近世陶磁器（8）……67
第43図　近世陶磁器（9）……68
第44図　近世陶磁器（10）……69
第45図　近世陶磁器（11）……70
第46図　近世陶磁器（12）……71
第47図　近世陶磁器（13）……72
第48図　木製品（1）……74
第49図　木製品（2）……75
第50図　木製品（3）……76
第51図　金属製品……78
第52図　石製品……80
第53図　板碑……81
第54図　古代土器（1）……83
第55図　古代土器（2）……84
第56図　古代土器（3）……85
第57図　古代土器（4）……86
第58図　古代土器（5）……87
附　図　大在家遺跡1・2次調査遺構図

写真図版

巻頭写真１　遺跡近景
巻頭写真２　近世（上層）の調査区全景
巻頭写真３　近世の高島城絵図
写真図版１　遺跡近景他
写真図版２　調査区南半部　完掘状況他
写真図版３　17区中央部　完掘状況他
写真図版４　調査区南半部　上層完掘状況他
写真図版５　１区　検出状況他
写真図版６　５区　検出状況他
写真図版７　９区　検出状況他
写真図版８　11区北半　検出状況他
写真図版９　13区南　検出状況他
写真図版10　15区北端　検出状況他
写真図版11　５区　ＳＢ362完掘状況他
写真図版12　10区　ＳＢ286・287完掘状況他
写真図版13　17区南壁　旧道路路盤土層断面他
写真図版14　１区　ＳＤ497完掘状況他
写真図版15　17区　ＳＤ1744・1753完掘状況他
写真図版16　９区　ＳＤ510完掘状況他
写真図版17　９区　ＳＤ510遺物出土状況他
写真図版18　17区　ＳＤ1702完掘状況他
写真図版19　17区　ＳＤ1702石積み外し土層断面他
写真図版20　15区北　ＳＥ1577極・ＳＤ1531木樋完掘状況他
写真図版21　15区北　ＳＥ1577極の導水部木樋出土状況他
写真図版22　９区　ＳＤ523・ＳＤ538溝完掘状況他
写真図版23　４区　ＳＥ136土層断面他
写真図版24　新５区　ＳＸ801遺物出土状況他
写真図版25　17区南下層　ＳＧ1773トレンチ完掘状況他
写真図版26　17区南・北下層　ＳＧ1773西壁土層断面他
写真図版27　17区北下層　西側拡張ＳＧ1773Ｆ６遺物出土状況他
写真図版28　中～近世遺物（１）
写真図版29　中～近世遺物（２）
写真図版30　中～近世遺物（３）
写真図版31　中～近世遺物（４）
写真図版32　中～近世遺物（５）
写真図版33　中～近世遺物（６）
写真図版34　中～近世遺物（７）
写真図版35　中～近世遺物（８）
写真図版36　中～近世遺物（９）
写真図版37　中～近世遺物（10）
写真図版38　古代遺物（１）
写真図版39　古代遺物（２）

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経緯

大在家遺跡は、高畠町中心部の高畠地区に位置し町内を流れる屋代川左岸の自然堤防上の住宅街に立地する。今回の大在家遺跡の調査は、山形県置賜総合支庁建設部の主要地方道米沢高畠線（高畠都市計画道路中央通り線）街路整備事業に伴って行われたものである。

本遺跡は、以前より遺跡範囲内にある旧県立高畠高等学校敷地内から須恵器などが出土し、遺跡の所在が知られていた。平成３年には、高畠町教育委員会により県内では稀な飛鳥時代の遺物を含む古代の遺跡として町内で新規登録（町遺跡番号Ａ－17）された。

平成16年度の本事業予定地のうち、事業計画と遺跡保護の調整に資するため、平成15年10月28日に県教育委員会による事業工事区内の試掘調査が行われた。試掘調査では、古代の遺構や遺物と共に、地元の文献に残る近世末（幕末）頃の焼土層や柱穴、近世陶磁器などが確認された。これにより今調査区は、大在家遺跡の東側に隣接する中～近世の高畠城跡との関連が推測され、古代と中近世の各時期がある複合遺跡である事が分かった。　複合遺跡

調査結果を基に関係機関による遺跡の取り扱いについて協議を行い、工事施工方法などを含めた調整が行われた。その結果、事業区内について平成16・17年度に１・２次調査として緊急発掘調査を実施し、記録保存を図ることになり、財団法人山形県埋蔵文化財センターが県の委託を受けて発掘調査を実施する事になったものである。

2　調査の方法と経過

調査区は現在の道路部分とその両側の拡張（側道）部分で、現地調査は、周辺商店街や宅地の交通路や出入口の確保などから平成16・17年度の１・２次調査に分けて行われた。

全体的な調査計画では、平成16年度に先行して現道の同脇にあたる東西の拡張（側道）部分、平成17年度に前年調査部分に仮設道を付替え、現道部分を調査した（第２図）。

また、調査区は、周辺商店街などとの調整から、調査区を細かく小地区（１～17区）に分割し、調査後は直ぐに埋め戻し（平成17年度は調査終了後に道路本工事）を行い、順次調査を繰り返した。更に一部調査区では、商店街などの要望や本工事の進捗（道路付け替え）から、調査区を更に細分割し、各区の南・北と称した（２・３・６・７・14・15・17区）。

具体的な調査工程の進捗状況は、表１に示した。平成16年度は、同年６月７日～10月22日まで調査を実施した。調査区は、主に宅地が撤去された現道両側の拡張（側道）部分の東側（１・３～５区）と西側（６～９区）である。調査は、商店街の意向に配慮したが、基本的に南東の調査区から順次を行い、効率化を図るため一部調査区は同時並行で進めた。　第１次調査

発掘調査は、各区で基本的に重機により地山直上の遺構検出面まで表土を除去し、続いて面整理作業により遺構の検出に努めた。一部調査区（３・５・10・17区）では、遺構検出を近世末（幕末）頃の焼土層直下の整地層中で試みた。しかし、全体では、焼土や炭を含む整地層の

鞍部と、整地層と同様の遺構覆土の差異が不明瞭で、遺構の判別が困難であり、重機や人力で慎重に掘下げ、遺物の採集などに留めた。遺構・遺物番号は各区で付した。

その後遺構精査と共に、遺構の埋土の観察や遺物の出土状況などの記録・写真撮影を実施した。最後に各区で安全性を考慮しリフティング・ケーブルの空中写真測量を実施した。同年9月12日には現地説明会を行い、約100名の参加者を得た。

なお、調査の最終時には、調査区の最も北に位置する5区北端部の下層で古代の河川跡の一部が確認された。県教育委員会などとの協議で、5区の範囲を20mほど北側に延ばし、下層はトレンチ調査で河川幅や河床を追求する事になった（5区追加）。しかし、小範囲の調査区のため深掘りのトレンチには限界があり、散見的な遺物や周辺の状況から、次年度に現道調査の調査区を一部北に延長し、古代の河川幅を把握する事になった。

この他に同年11月に調査区北端部の現水路の付替えで立会調査を行った。

第2次調査　平成17年度は、5月16日～10月21日まで調査を実施した。先ず一部未買地であった本道拡張（備道）部分（2・9区の一部）、その後今調査の主体である現道部分を調査した。

現道部分は道路の付け替えや調査の内容から大きく3つに分けた。現道南半～中央部を現道センターライン上で東（11～13区）・西（14～16区）に2分割し、北半部（17区）は前年の下層の古代河川跡の深さも考慮し調査区を現道幅に取り、上層（近世）と下層（古代）の調査を行った。但し、調査は、本工事の進捗上、現道下の上水・下水管などの地下埋設物を残していった。調査には慎重を要し埋設物の崩壊を防ぐため一部未完掘の遺構がある。

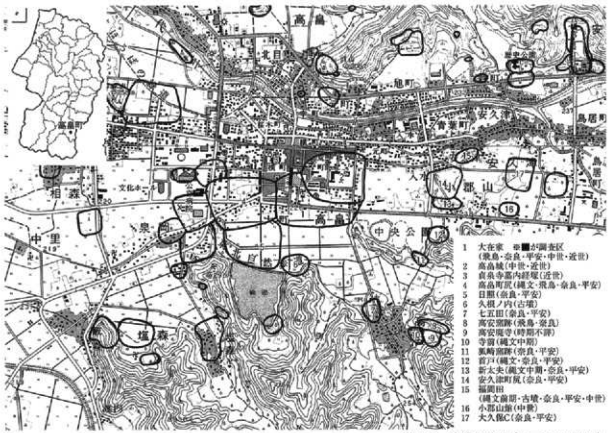
調査方法は、前年度と同様で、現地説明会を10月9日に実施し、約86名の参加を得た。

なお、調査区全体の事項として、調査区を区画するグリッドは、5×5mで設定し、X軸は西から東へA～K、Y軸は北から南へ0～24とし、「A－0」等と位置を示した。また、グリッドは北を表す。高さは海抜標高で表している。

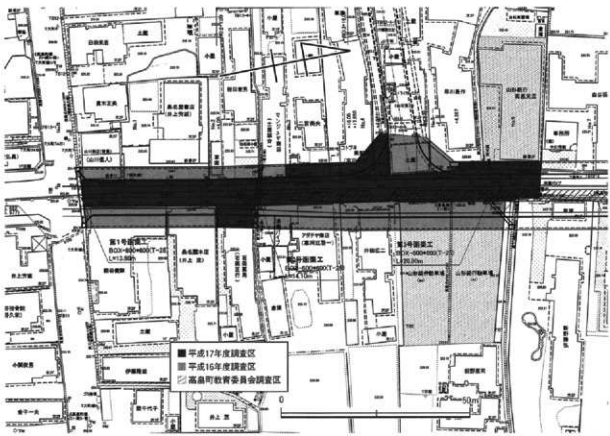
表1　大在家遺跡第1・2次発掘調査工程表

		5月	6月	7月	8月	9月	10月	備考
第1次調査	1区				8 19		10 7.8	
	3区		6 7 — 6 25					
	4区		6 26 — 7 8					南北に分割
	5区		6 5	8 5	8 20	9 1		
	5区新						10 4~10 14~10 22	上層・下層の二面調査
	6区					9 21~9 29		
	7区					9 21~9 29		
	8区					9 8~9 15		南北に分割
	9区					9 3 — 9 29		
	10区		6 16	8 6				
第2次調査	2区	5 16—5 27						南北に分割
	2次9区		6 6—6 16					
	11区		6 6— 6 23					
	12区			7 4—7 15				南北に分割
	13区		6 28—7 7					南北に分割
	14区			7 28—8 5				
	15区				8 18	9 30		南北に分割
	16区			8 2~8 9				
	17区					9 7 — 9 30	10 21	上層・下層の二面調査

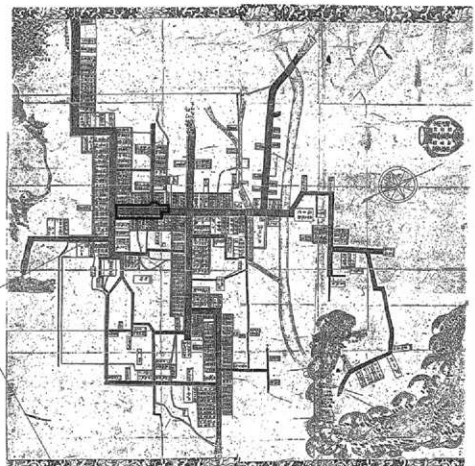
青竹提灯祭体業



第１図　遺跡位置図（Ｓ＝１：25,000）

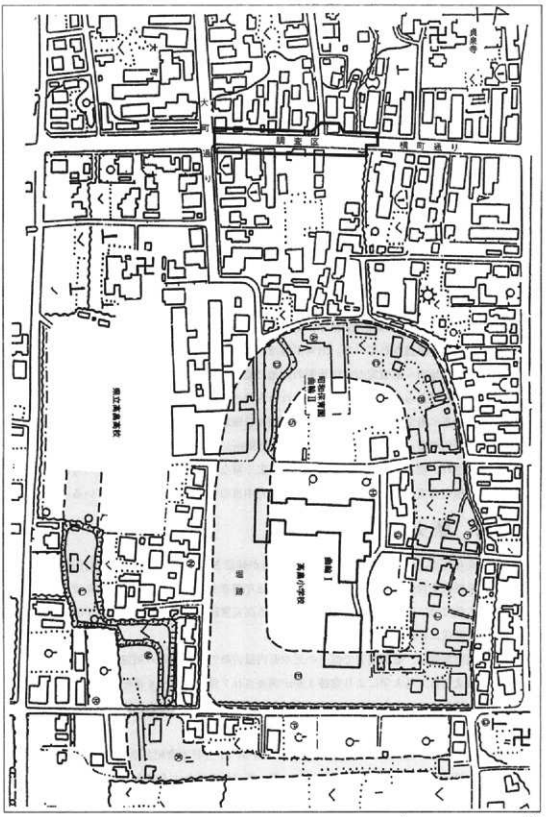


第２図　遺跡概要図（Ｓ＝１：1,000）



第３図　明治10～20年代（明治14年以降）の高畠町図（井上芳雄氏所蔵）

第４図　同上調査区周辺図



第５図　高畑城略測図（山形県中世城館遺跡調査報告書第１集　1995. 山崎正他）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

高畠町は、山形県の南部、米沢盆地の東端にある。東に脊梁山脈である奥羽山脈を境界とし、旭峰峠で福島県、二井宿峠で宮城県に隣接し、北と南は丘陵地帯で上山・南陽両市と米沢市に接し、西は北流する最上川に限られ、平地では肥沃な水田地帯が広がる。

大在家遺跡は、ＪＲ高畠駅から東へ約５kmの高畠町市街地のやや南にあり、中世に整備された高畠城跡地にある旧県立高畠高等学校付近の高畠町字高畠に所在する。本遺跡は、町内を西流する屋代川左岸の自然堤防上及び後背湿地に立地し、標高は約226mを測る。

屋　代　川

大在家遺跡の範囲は、東側に隣接する高畠城とほぼ重複し、古代の集落遺跡（高畠町尻・日照遺跡）などとも隣接し、各々の遺跡範囲を明確にする事は困難な状況にある。遺跡規模は概ね東西約550m×南北約350mで、同町教育委員会の調査（第４・６次）によって、度々古代の旧河川跡が確認されている。旧河川跡は、概ね遺跡範囲の南辺と南東辺で検出され、これは現在の市街地南～南東端が水田地帯の低地に変わるラインに相当する。これらは、旧屋代川やその支流と考えられ、今調査で確認された古代の河川跡もその一つであろう。

町の東の奥羽山脈から西に延びる山麓や丘陵地帯の基盤は、新第三紀初期頃に噴出した火山岩や凝灰岩などで、現在も凝灰岩の露頭が随所に見られる。この凝灰岩は地元では「高畠石」と称され、加工が容易な事から昨今まで広く塀などに用いられた。当地の考古資料でも古墳時代の横穴石室の石材や、今調査で出土した中世の板碑などに用いられている。

高　畠　石

2　歴史的環境

高畠町は、現在まで120ヶ所以上の遺跡が確認されている。その中で大在家遺跡と同時期の飛鳥時代を含む古代と、中近世の遺跡で近年調査された特徴的なものをあげる。

古代
（飛鳥・奈良・平安時代）

古代では、本遺跡から南東約１kmにある高安窯跡や金原古墳、北東約１kmの安久津古墳群が飛鳥時代にかかる遺跡として著名である。

高　安　窯　跡

高安窯跡は、置賜地方で唯一の瓦や県内最古級の飛鳥様式の須恵器が生産される窯跡で、近年東北芸術工科大学により窯跡３基が調査され７世紀後葉～８世紀前葉の所産とされる。

古墳群では、少なくとも７世紀半ばに造墓を開始とされる安久津古墳群、７世紀末頃には直径約20mの切石積横穴石室をもつ金原古墳が存在する。

金原古墳付近には、「小郡山」の小字名があり、『日本書紀』持統三年（689年）の記事の「陸奥国優嗜曇（置賜）郡」の城柵や評（郡）衙の所在地とする考え方もある。

他に集落遺跡では、本遺跡が町教育委員会によって小規模ながら現在まで12次の調査が実施された。第３・５次調査では竪穴住居跡が検出され、７世紀末～９世紀頃の土器群と共に当該期の椀、鉢、箸、田舟、建築部材などの木製品も多数出土した。西接する高畠町尻・日照遺跡なども部分的に調査が行われ、本遺跡と同時期の遺物が出土している。

中　世

一方、中近世では本遺跡東側に隣接する高畠城があげられる。現在は、町立高畠小学校や旧県立高畠高等学校、宅地などに改変されているが、一部堀跡が旧県立高畠高校の北側に残り、西側半円形の堀跡も宅地や道路に変わったが地割は現況でも良好に確認できる。

これらから高畠城は東西約300m、南北約200mの西側が半円形をなす不整長方形を呈し、本丸堀跡の形が梵鐘に似る事から「鐘ヶ城」、「屋代城」とも呼ばれる。本格的な城館跡調査は行われていないが、創建は平安時代末期とされ、築城者は奥州藤原氏一族の伝承がある。藤原氏滅亡後の鎌倉時代には在地領主の長井氏領になったとされる。

伊達氏の入部と高畠城の整備

中世の天授３年（1380）伊達氏の出羽侵攻に伴い８代宗遠、９代政宗が置賜地方の本拠地として高畠城を現在の規模に整備し、天文18年（1549）に15代晴宗が居城を米沢城に移すまで、伊達氏の出羽側の拠点とした。以後一族の小梁川氏が入部する（『晴宗公采地下賜録』）。

近　世

近世には、主に上杉氏領（米沢藩領1601年）、幕府直轄領（米沢藩預地1664年）、幕府直轄領（1689年）、織田氏領（高畠・天童藩1767年）、幕府領（米沢藩預地1848年）などの変遷を辿り、居城や居館、陣屋などが設置され、明治に至っている。

幕府直轄地と高畠城絵図

さて、近世の高畠城を知るものとしては、本遺跡北側に近接し室町時代創建（1459年）で現在も古刹として著名な良泉寺所蔵の江戸時代前葉の『高畠城絵図』（巻頭図版２）がある。

元高畠町郷土資料館長の山崎　正氏は『この絵図には「羽州米澤高畠之図鐘ヶ城と名付ク」他の書き入れから、幕府直轄領だった元禄二年（1689年）以降に、その直前の貞享年間（幕領［米沢藩］預地時代）の陣屋の様子を描いたもの』とされ、「二重の堀に囲まれ（中略）預地時代の家臣の名、屋敷の配置、道筋、寺院、町並みなどが彩色によって分別でき、寺院の位置は現在と合致する」（山崎1995）と評価する。

この高畠城絵図では、今調査区にあたる道路（横町通り）も記載される。横町通りは、当時の高畠城の大手門から屈曲して東西に延びる「大（手）町」道（現在は大町通り）に直交する南北の道として描かれる。同絵図には、山崎氏も指摘する現存する貞泉寺や自姓院もあり、広義的に概ね今調査区の範囲も絵図に照らし合わせる事ができる（巻頭図版２）。

今調査区にあたる部分を絵図で概観すれば、南北の横町通りに高畠城堀跡から西流する現在も農業用水などで利用される東西の２条の水路が青色で描かれ、両水路には橋も架かる。また、横町通り西側には現在もＴ字路として利用される細道も描かれる。同じ部分の横町通り東側には「御札」（高札）、「小山弥兵衛」の記載があり、横町通りと大町通りの交差する道路中央には「火ノミヤグラ」の記載とその建物が描かれる。

これらからは、17世紀中頃の城下の様子や、当地区の行政的施設の一端が窺い知れ、現在までほぼ位置を変えない横町通りに接する東西水路や西側の細道がある事も分かった。

近　代

明治初頭の高畠町絵図

一方、絵図では空白地帯になっている「横町」の状況を知るものとしては、横町通り在住の井上芳雄氏所蔵の『明治10～20年代の高畠町図』がある（第３・４図）。これは、明治時代初頭の町並みを記した絵図で、通り沿いの宅地の形状やその名前、番地などが記載される。横町通り沿いには、現在も在住される地元住民の苗字もあり、明治以前の少なくとも近世の後半頃までは同様な町並みが形成されていたと考えられる。なお、これを傍証するものは、貞泉寺由来の過去帳がある。現住職によれば「江戸時代中頃の火事でそれ以前の過去帳は消失したが、残存する過去帳には、一部移転もあるが近年までの通り沿いの住民の名前が大半あり、住民の

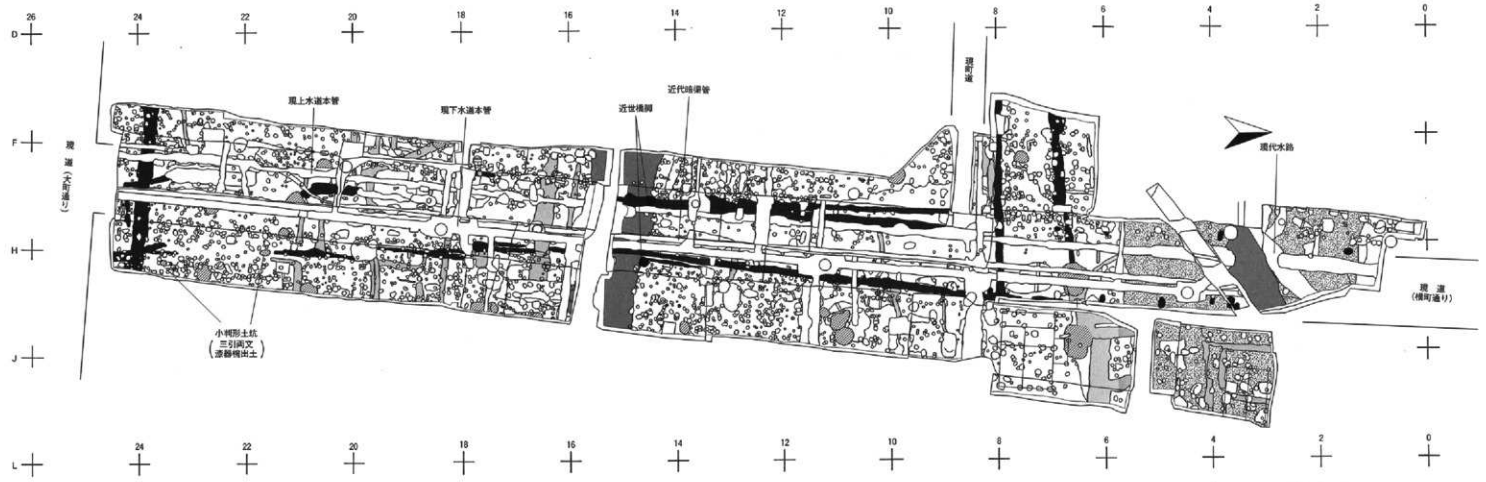
所在は少なくとも過去帳消失まで遡る事ができる」との事であった。

幕末の大火　また、文献史学の面からは、上記岡絵図の間の時期である江戸時代末葉～明治初頭の幕末期に当地区で度々起きた火災の様子も知ることができる。『高畠町史』などでは、江戸時代末端の文化７年（1810年）・文政６年（1827年）に高畠城火災で陣屋御殿の焼失があり、明治時代初頭の明治３年（1871年）・６年（1875年）の高畠村大火などが上げられている。これは、今調査区全体で確認される焼土層もこれら火災に関連したものと考えられる。

表２　中～近世の高畠城周辺（横町）の年表

時代	年号		文献などからの事項	在地領主など	県内・全国の歴史
平安時代	仁平３年	1153	左大臣藤原頼長の日記に「屋代庄」初見。「屋代庄」は摂関家藤原氏領。奥州平泉の藤原２代基衡が在地領主	藤原氏領	
	保元１年	1156	保元の乱後、「屋代庄」皇室領へ		
	承安年間	1171	藤原基衡の娘、比丘五郎季衡が屋代（高畠）城を築城の伝承		
鎌倉時代	建久３年	1192	奥州藤原氏の滅亡後、幕府御家人の大江（長井）氏が地頭。置賜郡支配	長井氏領	
	弘安７年	1285	大在家遺跡17区の中世板碑建立		
南北朝	天授６年	1380	伊達宗遠④、除奥国伊達郡から置賜侵攻。長井氏攻略	伊達氏領	1356年　斯波（氏上）氏山形城築く
室町時代	応永４年	1397	伊達（黒山）政宗③、足利義満に謁見 この頃、伊達氏、屋代（高畠）城を整備したとされる		
	長禄３年	1459	貴泉寺創建		
	明応３年	1494	屋代城の伊達稙宗⑨、会津芦名氏に攻められ、陸奥に脱走		1467年　応仁の乱
	永正年間	1504	この頃、貴泉寺４代目の中興住職没		
	天文11年	1542	伊達稙宗⑨と晴宗⑩、天文の乱おこる		1549年　キリスト教伝来
	天文17年	1549	伊達晴宗⑩、居城米沢城へ移す		
	天文22年	1554	伊達晴宗⑩、屋代郷を一族の小梁川氏へ配置		
安土桃山時代	天正２年	1574	高畑城主、小梁川氏が上山城攻撃		1582年　本能寺の変
	天正13年	1586	伊達政宗⑪、家督相続		
	文禄３年	1594	蘆生氏移、置賜郡の検地実施	蘆生氏領	1592年　朝鮮出兵
	慶長３年	1598	上杉景勝、会津120万石（置賜地方含む）	上杉氏領（米沢藩）	1600年　関ヶ原の戦い
江戸時代	慶長６年	1609	上杉景勝、米沢30万石領地替え		
	寛文４年	1664	幕府直轄領（米沢藩預地）	幕府直轄領（米沢藩預地）	1649年　慶安御触書 1671年　東廻航路開発（北前船）
	元禄２年	1689	幕府直轄領 この頃、貴泉寺所蔵の「元禄高畠城絵図」作成（直前の米沢藩領地状況）	幕府直轄領	1687年　生類憐れみの令発布
	享保年間	1716	享保、元文年間頃、貴泉寺の供養塔（地蔵塔等）集中的に建立		1716年　享保の改革
	元文年間	1736			
	宝暦７年	1758	屋代郷35村の名主、幕府に「年貢延納」嘆願		
	宝暦12年	1763	貴泉寺14代目の中興住職没		
	明和４年	1767	領州より織田氏、転封。高畠藩約23,000石 ※同年、米沢藩、上杉鷹山家督相続。藩政改革実施	織田氏領（高畠藩）	1783年　天明の大飢饉
	文化７年	1811	高畠城の陣屋御殿、火災で焼失		1788年　寛政の改革
	文政９年	1818	高畠村の陣屋御殿、火災で焼失		
	天保11年	1831	織田氏、村山郡天童に転封（天童織田藩）	（天童藩）	1841年　天保の改革
	嘉永１年	1848	幕府直轄領（米沢藩預地）	幕領（米沢藩預地）	1853年　黒船、浦賀に来航
	文久３年	1863	幕府直轄領・米沢藩領に準じた預地 屋代郷庄名主、増税恐れ仙台藩（伊達氏）を通し、上記藩領の嘆願行動	幕領（米沢藩領準）	1864年　禁門の変
明治時代	明治３年	1871	高畠村火災（横町34戸焼失）	米沢藩	1867年　大政奉還、明治維新
	明治６年	1875	高畠村火災（横町・荒町107戸・貴泉寺焼失）	置賜県	1871年　廃藩置県
	明治７年	1876	置賜・鶴岡、山形県に統合	山形県	1876年　置賜・鶴岡、山形県統合
	明治14年	1882	この頃、井上芳雄氏所蔵の「明治10～20年代の高畠町図」作成か		
	明治43年	1910	貴泉寺19代目の中興住職没（寺再建）		

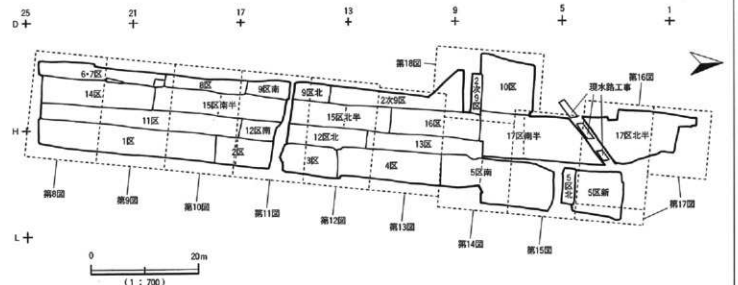
＊山形県史・高畠町史・高畠町郷土資料館資料（山崎　正氏）・貴泉寺資料に基づき作成。
＊伊達氏に関わる○内の数字は家督の継代を表す。



第６図　遺構配置図

表３　調査各区の遺構・遺物番号の登録表

	区	遺構・遺物番号	レベル高(m)	備考
第1次調査	3	1～100	227.00	
	4	101～200	227.00	
	10	201～300	227.00	
	5	301～400	227.00	
	1	401～500	226.50	
		901～1000	226.50	
		1001～1100	226.50	
	5新	801～900	227.00	
		1101～1200	227.00	
	9	501～600	226.50	
	8	601～700	226.50	
	6・7	701～800	226.50	
第2次調査	2	2201～2300	226.64	
	2次9	2901～3000	226.50	
	11	1101～1200	226.50	2次(2－)を付す
	12	1201～1300	226.50	
	13	1301～1400	226.50	
	14	1401～1500	226.50	
	15	1501～1600	226.80	遺構番号1560～1570は226.50m
	16	1601～1700	226.80	一部226.50m
	17	1701～2100	226.80	



第７図　調査区細分図（S＝1：700）

Ⅲ　遺跡の概観

1　調査区と層序

今回の大在家遺跡１・２次調査区は、遺跡範囲の北辺部にあたり、巨視的にみれば遺跡を南北に貫いたトレンチを設定した感がある。本遺跡は、高畠町教育委員会により調査が実施され竪穴住居跡などが検出され、飛鳥時代を含む古代の集落遺跡とされている。

今調査でも古代と考えられる包含層（Ⅲ層）は、ほぼ調査区全体で認められたが、遺構は全体に希薄で、主に調査区北端部の下層の河川跡（覆土：Ｆ１～９）だけである。

調査区全体としては中～近世の柱穴や溝跡などの遺構が大半である。特に近世末～明治初頭頃の大火焼土層（Ⅱ層）やその焼土、炭を多量に含む整地層（Ⅱ上層）は、調査区全体で認められ、それを覆土とする遺構も多い。しかし、遺構覆土に焼土や炭を含まず、調査区壁の層序からもⅡ層以前の遺構もあり、焼土が時期を判断する上で一つの鍵層となった。

基本層序

基本層序は、大別してⅠ層：現道路盤を含む表土、Ⅱ層：暗褐色微砂の旧表土（幕末頃の大火の整地層及び焼土層）、Ⅱ下層：暗褐色砂質シルト（焼土を含まない中～近世の包含層）、Ⅲ層：暗褐色シルト（古代包含層）、Ⅳ層：にぶい黄橙色シルト層（地山）である。

Ⅱ層下部から近世を主とした遺物の包含が認められ、遺構の検出は、中～近世について一部調査区でⅢ層上面や、調査区北端部で古代河川跡のＦ１層（近世初頭整地層）上面で行ったが、他は中～近世・古代とも基本的にⅣ層直上面である。なお、古代河川覆土は、中～近世の遺構覆土と区別するためＦを付した。

旧道路部の層序

なお、調査区内の現道部分は、高畠城絵図などの近世の横町通り（旧道路部分）と推定される。この旧道路部分では一部層序が異なり、Ⅱ層より上位に砂層と砂利層が互層し、旧道路の路盤（路盤工）となる。特に調査区北半部では、旧路盤の遺損状況が良く、路盤間には焼土層が２枚あり、Ⅱ層以降の大火や道路改修が推測された。現道部分にはⅠ′・Ⅱ′などを付した。

また、基本層序でⅡ下層としたものは、調査区南半部のみで観察され、層準から古代（Ⅲ層）以降で幕末の大火以前（Ⅱ層）の時期で、中～近世の包含層若しくは整地層と判断した。

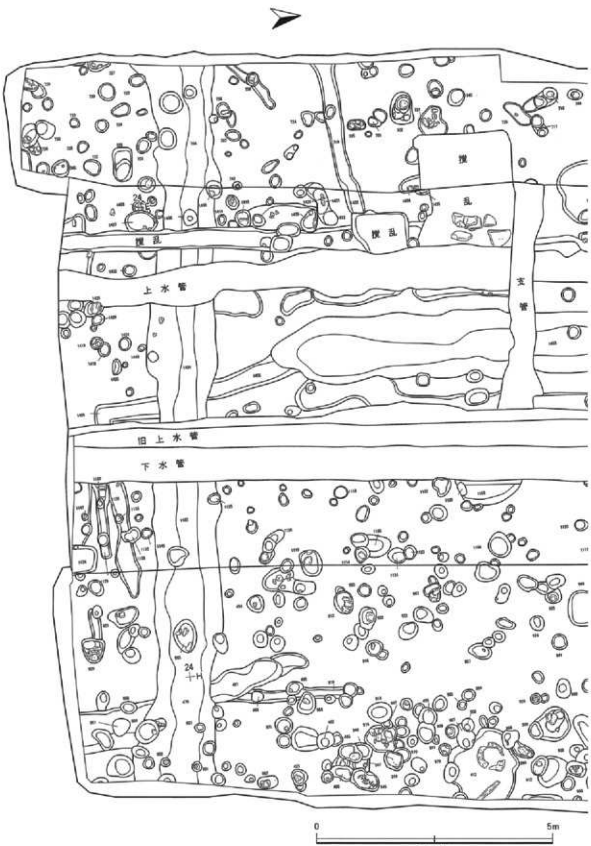
これは、第19図に示した遺跡を南北に縦断する各区の柱状図の旧地形（地山高）の変移が関係すると考えられる。調査区北端部の古代河川跡から南側に自然堤防上の高まりが形成され、更に南側に後背湿地状の低地が続くと推測され、Ⅱ下層はこの低地の整部にのみ堆積したと考えられる。

2　遺構と遺物の分布

調査で検出された主な遺構は、古代では河川跡１条、調査区全体で若干の小ピットや風倒木がある。中～近世では、建物跡４棟以上、側溝状の溝跡４条以上、水路跡２条、木樋１条、溝跡、井戸跡、土坑、木組み遺構、他多数の柱穴などがある。

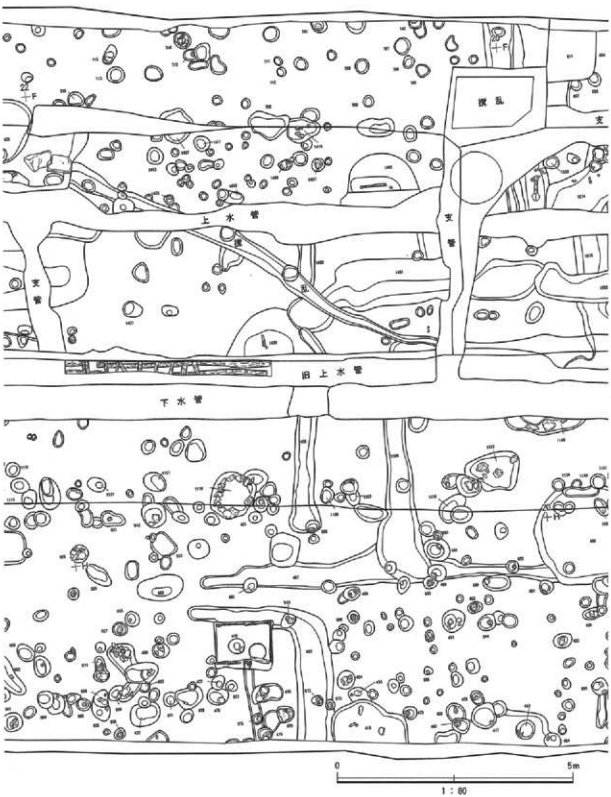
古代河川跡

下層の古代では、調査区北端部でＳＧ1773とした幅約25ｍの河川跡が東から西方向に走行し、

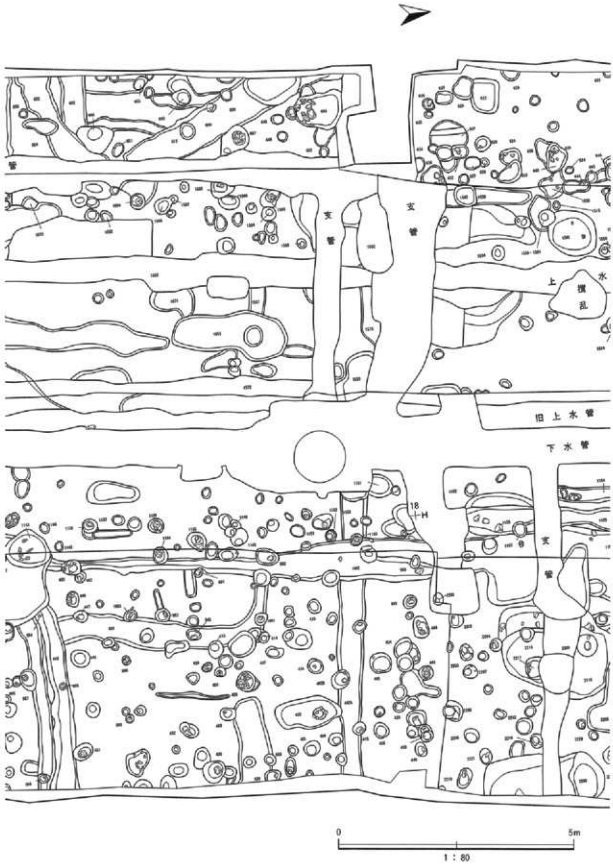


第8図　遺構平面図（1）

※数字は遺構番号を表す。

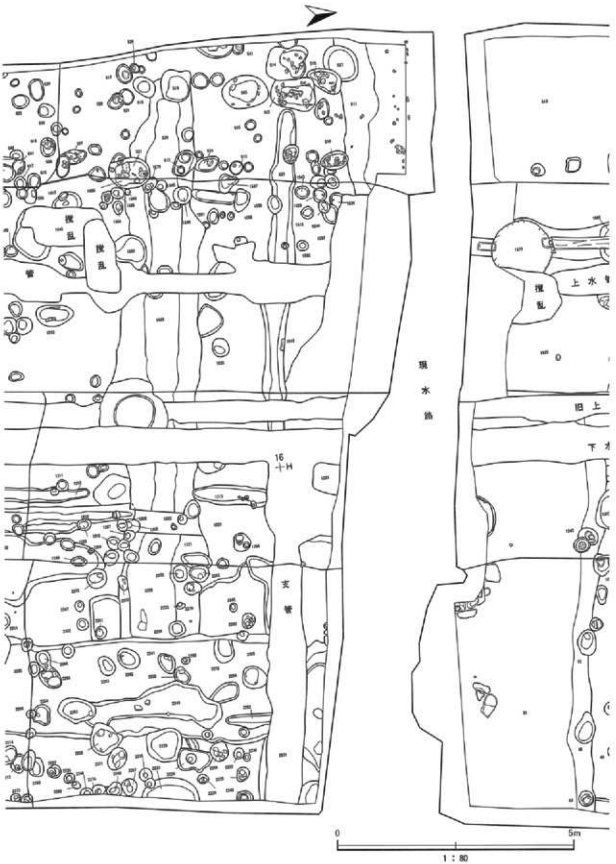


第９図　遺構平面図（２）
※数字は遺構番号を表す。

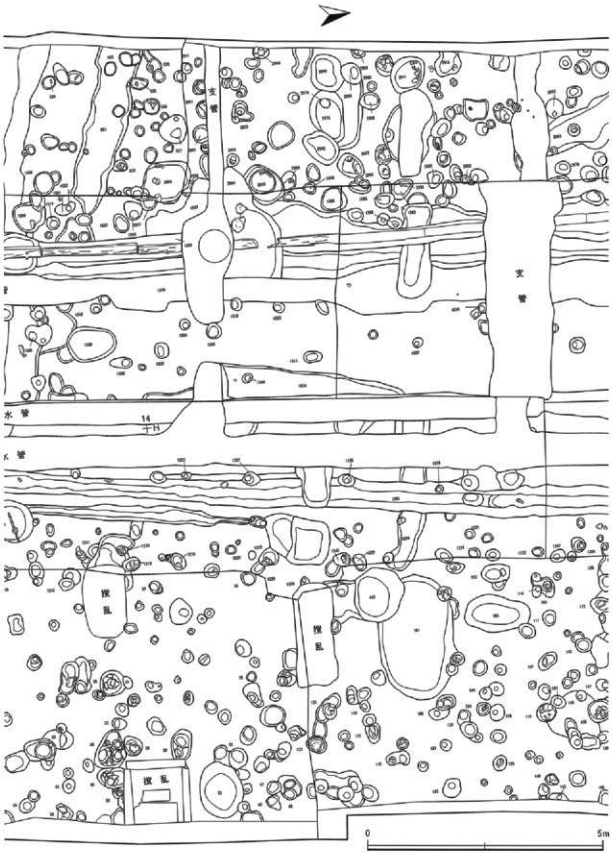


第10図　遺構平面図（3）

※数字は遺構番号を表す。

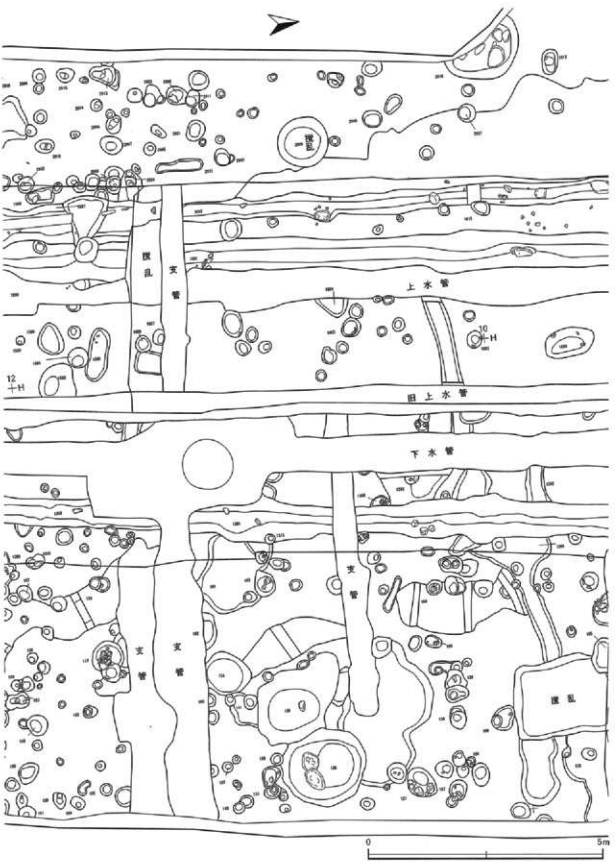


第11図　遺構平面図（4）
※数字は遺構番号を表す。



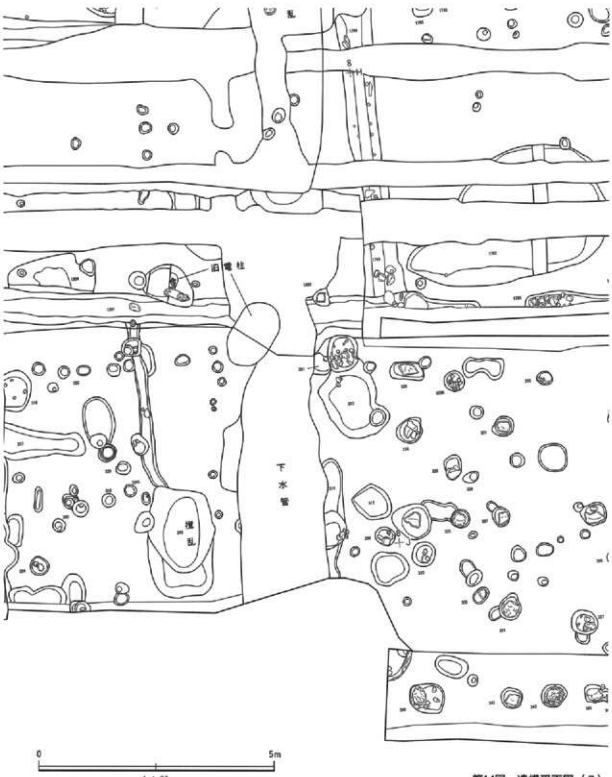
第12図　遺構平面図（5）

※数字は遺構番号を表す。

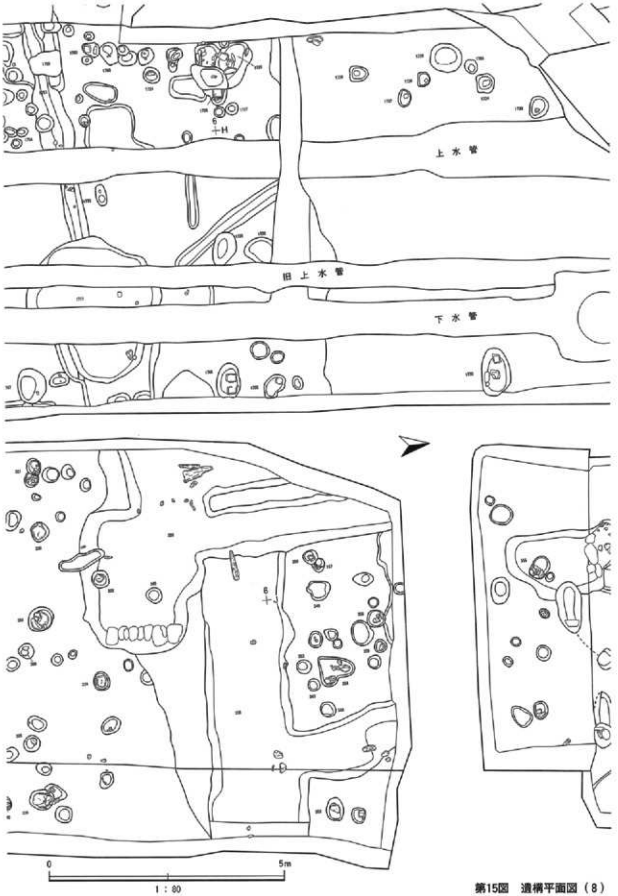


第13図　遺構平面図（6）

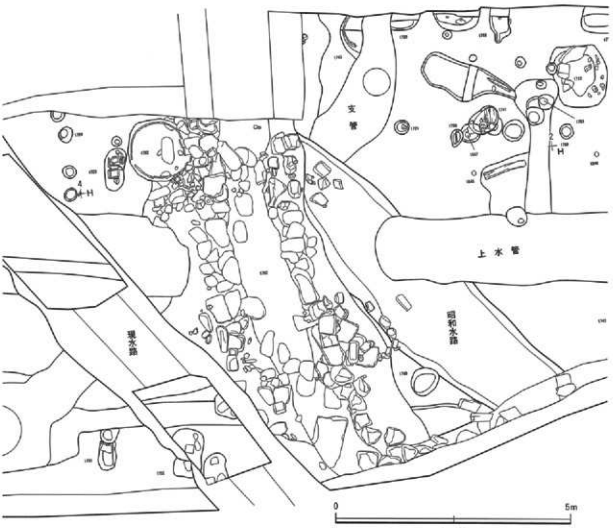
※数字は遺構番号を表す。

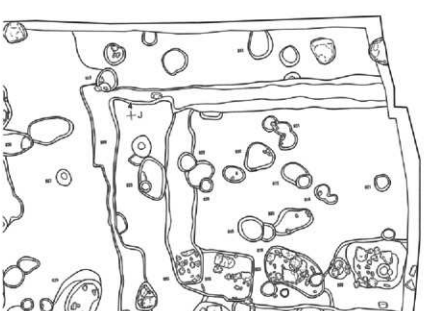


第14図　遺構平面図（7）
※数字は遺構番号を表す。

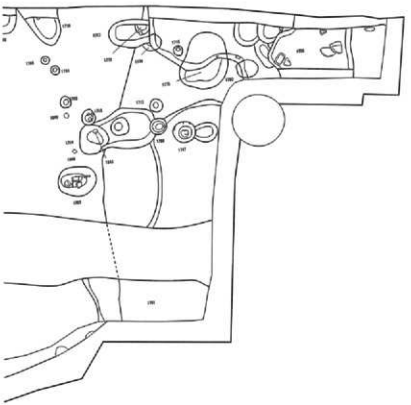


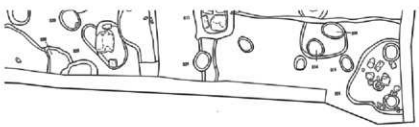
第15図　遺構平面図（8）
※数字は遺構番号を表す。





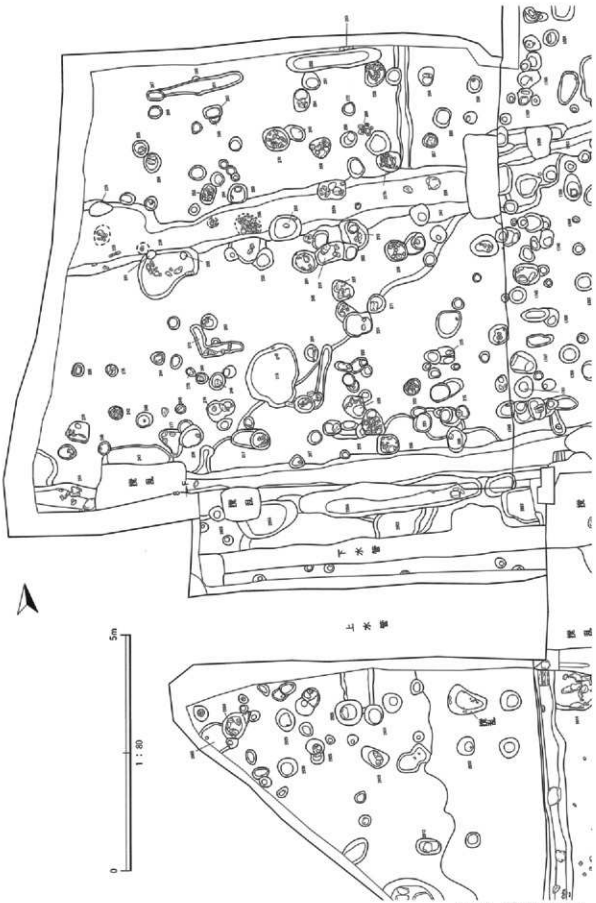
第16図　遺構平面図（9）
※数字は遺構番号を表す。



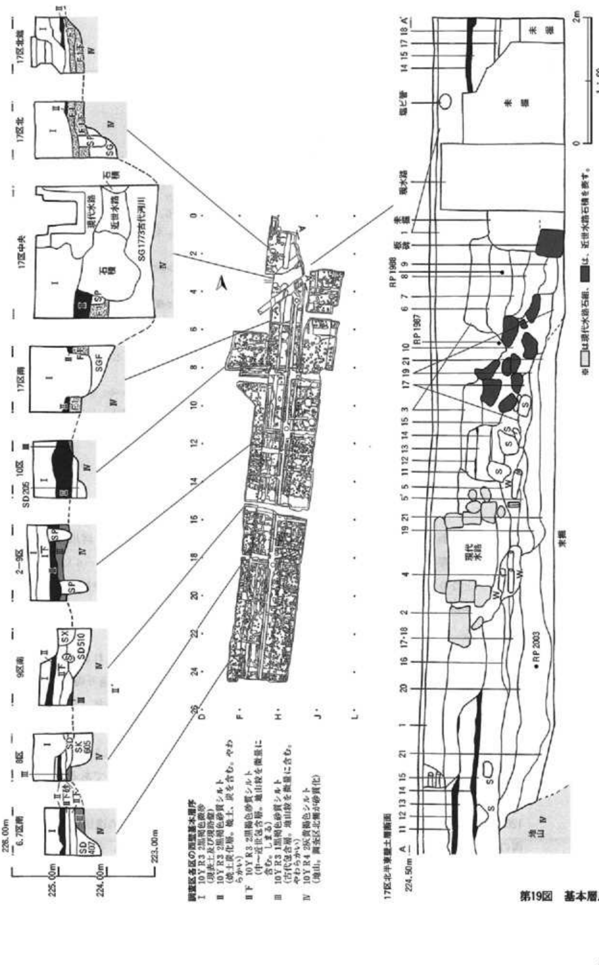


0　5m
1：80

第17図　遺構平面図（10）
※数字は遺構番号を表す。



第18図 遺構平面図（11）
※数字は遺構番号を表す。


調査区各区の西壁基本層序
Ⅰ 10YR3 2黒褐色微砂
(現表土及び現路盤)
Ⅱ 10YR3 2黒褐色砂質シルト
(焼土炭化層。焼土、炭を含む。やわらかい)
ⅡF 10YR3 2黒褐色砂質シルト
(中－近世包含層。地山粒を微量に含む。しまる)
Ⅲ 10YR3 1黒褐色砂質シルト
(古代包含層。地山粒を微量に含む。やわらかい)
Ⅳ 10YR4 2灰黄褐色シルト
(地山。調査区北端が砂質化)
17区北半東壁土層断面
17区北端
17区北
17区中央
17区南
10区
2－9区
9区南
8区
6.7区南
SG1773古代河川
現代水路
近世水路
石積
現代水路
実測
地山
1：60

第19図　基本層序

第19図　17区北半東壁土層断面（A－A′）

1　10YR5/3にぶい黄褐色細砂（Ⅰ。現路盤。小礫を多く含む。かたくしまる）
2　10YR6/4にぶい黄橙色細砂（昭和水路の堰土。礫を多く含み、高畠石を含む）
3　10YR2/2黒褐色シルト（Ⅰ′a。旧路盤。地山粒、小礫を微量に含む）
4　10YR6/4にぶい黄橙色細砂（昭和の上水土管の堰土。小礫と支木柱含む）
5　10YR6/4にぶい黄橙色細砂（近代の上水木管の堰土。小礫を含む）
5′　10YR6/4にぶい黄橙色細砂（近代の上水木管の堰土）
6　10YR6/6明黄褐色細砂（SD1702F1。旧路盤。礫土層上に分布。かたくしまる）
7　10YR6/6明黄褐色細砂と10YR4/2灰黄褐色シルトの互層（SD1702F2。3～5cm大の小礫含む）
8　10YR6/6明黄褐色細砂（SD1702F3。5～10cm大の礫多い）
9　10YR6/6明黄褐色細砂と10YR3/2砂質シルトの混合土（SD1702F3′。小礫多い）
10　10YR3/2黒褐色砂質シルト（SD1702石積み裏土。高畠石を多く含み、小礫も含む。ややしまる）
11　10YR3/2黒褐色微砂（Ⅰ′b。旧路盤。3～5cm大の礫を多く含み、礫土層上に分布。かたくしまる）
12　10YR2/1黒色シルト（礫土炭化層。礫土、炭塊を多く含む。やわらかい）
13　10YR5/4にぶい黄褐色微砂と10YR3/2黒褐色シルトの互層（Ⅰ′c。旧路盤。2～5cmの小礫含む。かたくしまる）
14　10YR2/1黒色シルト（Ⅱ層。礫土炭化層。礫土塊・炭塊を多く含む。やわらかい）
15　10YR5/6黄褐色微砂と10YR4/2灰黄褐色シルトの互層（Ⅱ′。旧路盤。2～3cmの小礫、30cmの高畠石、炭を含む。かたくしまる）
16　10YR6/4にぶい黄橙色微砂（SG1773F1相当か。炭を含む。3～5cm大の小礫と砂を互層に含む。しまる）
17　10YR3/2黒褐色粘質シルト（SG1773F1下相当か。炭粒・地山粒・小礫を若干含み、かたくしまる）
18　10YR4/2灰黄褐色粘質シルト（SG1773F3。有機物を微量に含み、やわらかい）
19　10YR4/2灰黄褐色粘質シルト（SG1773F6。10YR4/1褐灰色微砂を縞状又は斑状に含む。やや しまる）
20　10YR4/1褐灰色粘質シルトと10YR6/4にぶい黄橙色細砂の互層（SG1773F7上。細砂間に粘質シルトを厚く堆積）
21　10YR6/4にぶい黄橙色細砂（SG1773F7。3～5cm大の小礫を若干含み、単層）

検出面から底面までは深さ約2.5mを測る。最下層からは縄文土器も出土し、河川の下限を示す。主体的な覆土は、下位から洪水層（F7・9）、砂・シルトの互層（F5・6）、有機物層（F4）となり、徐々に河川が埋没する様子が分かる。最終的に近世初頭の整地層（F1）などでほぼ平坦になる。F6層前後から有段の須恵器坏・有段丸底の土師器坏など古相の土器群が出土する。

他に古代では、この河川より南側で、風倒木や小ピットが単発的に散見されるのみである。

中～近世の遺構

本遺跡で主体的な中～近世は、調査区が江戸時代中頃の高畠城絵図の横町通り周辺にあたる。調査区全体を概観すれば、絵図にも描かれる東西方向の水路が、調査区中央部（SD31）と北端部（SD1702）で現水路のほぼ直下で確認された。前者は幅約5mを測り、北岸では橋脚跡と考えられる大形の柱穴も2基確認された。後者は石積みの水路で幅は約1.5m前後と狭い。また、覆土は前者が泥炭層、後者が砂層を主とし、水路の性格が異なるようである。

近世横町通りの旧道路関連の遺構としては、旧道路の側溝と考えられる溝跡が2条（SD1201・1570）ある。両溝は、間隔が約5.4mで、両溝内側には旧道路のため遺構は希薄で、両溝の外側に柱穴群が分布し、これがほぼ当時の道幅と捉えられる。溝跡は、部分的に途切れる所もあるが、北半部では長さ約40mを測り、南端部でクランク状に屈曲する。

また、近世末頃の丸太を継いで利用した長大な木樋（SD1531）も、この旧道路西側のSD

1570側溝に重複しながら南北にほぼ併走する。

一方、調査区中央部の西側で横町通りに接続する町道付近では東西に走行する細溝が2条（SD205・234）確認され、当時の道路が現在よりやや北側にあった可能性がある。

他に大形の溝跡は、南北に走行する調査区南端（SD470）や、調査区中央部の水路南側（SD538）で確認され、前者は大町通りの側溝、後者は水路に関連する施設と考えられた。

しかし、これら水路や側溝跡、木樋は、重複関係や覆土、出土遺物などから一定の時期差や新旧がある事も分かる。

全体に古い順に、幅広のSD31中央水路・SP1203・1595橋脚（近世前半）→狭いSD31中央水路・SD1570木樋・旧道路東側SD1201南北側溝（近世後半）→旧道路西側SD1570南北側溝（覆土上位に焼土：幕末大火層）となる。SD1201南北溝やSD1531木樋とSD205東西溝では、古い順にSD1201南北溝東側→SD205東西溝南側→SD1531木樋になる。

さて、旧道路に面していた建物跡は、調査区の範囲が限定的で、明確に建物跡全体が判断できるのは焼土や炭を含む柱穴で構成される3～4棟程度に留まる。しかし、柱根や礎盤・根固め石を持つ柱穴群の全体的な分布からは、概ね梁が2～3間程度の建物の一部で更に調査区外に延び、明治初頭頃の第3・4図にある建物配置と同様の配置状況が看取れた。

特に5区の礎盤建物は、柱穴や礎盤の石が大形で、他区と比べ柱穴群が単独で検出され、建て替えが少ない建物として特徴的である。また、これら建物の周囲からは石組の井戸、土坑などが単発的に検出された。

その他に調査区南東部で小判型の土坑が2基検出され、底面から漆器碗が各々出土し、土坑の形態等から墓坑の可能性もある。

また、大町通りや現町道と交差する旧道路両端に、旗指し状の木組遺構が一定間隔で検出され、幕末以降の道路幅を知る手がかりとなる。

中～近世の遺物

遺物相では近世陶磁器が主体を占めるが、一部中世に遡る陶磁器類もある。他に漆器や下駄などの木製品、キセルや古銭などの金属製品、砥石、石臼、板碑などの石製品がある。

主体を占める中～近世陶磁器では、中世に遡るものとして主に珠洲系陶器、瀬戸・美濃系陶器（大窯期）、土師質土器、中国産磁器などがある。

特に土師質土器では、伊達氏の領内で出土事例が多い土師質土器の内耳土鍋が出土した。また、供伴する遺物がなく時期は不明だが、前述小判型の土坑の底面から出土した漆器椀の一部にも、伊達氏家紋の「三引両」文が描かれ、中世に遡る可能性がある。

他にSD1702の中世板碑に鎌倉時代の「弘安七季」(1284年）の年号が刻まれていた事も注目され付しておく。

近世陶磁器では、肥前系陶器や同染付磁器が当該期を通して主体的である。これらは、肥前系陶器の胎土目や砂目がある明らかに古相（江戸時代前半）のものと、一般にくらわんかと称される染付磁器の厚手の椀類に代表的な新相（江戸時代後期）のものに分けられる。

これらに供伴して、江戸時代前半期には、在地で県内の戸長里窯や福島県岸窯産、瀬戸・美濃系（登窯期）の陶器も出土する。江戸時代後半期以降には、所謂福島県大堀相馬焼、同会津本郷焼、県内の成島焼の陶器が出土し、瀬戸・美濃系や在地産と考えられる染付磁器などが多く出土するようである。

Ⅳ　検出遺構

1　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡としてほぼ全体を確認できたものは2棟である。この他にも多くの柱穴が認められたが、限定された調査区でもあり、建物の全容を把握するまでには至らなかった。

柱穴群の中には、明治初頭の絵図などから横町通りに沿って短冊状に配置されていた町家と考えられる遺構が認められた。

柱穴の種類（礎盤・根固め石）

それらは、大形の掘方を持ち、①柱根やその痕跡があるもの、②柱穴底面に礎盤を持つもの、③柱穴内に根固め石を持つものなどである。ここで言う礎盤とは、柱の沈下を防ぐための工夫で、本遺跡では次の二つのタイプがみられる。一つは柱穴の底面を覆うような大きさの、扁平な川原石を置くタイプで、大形扁平礎盤と仮称する。もう一つは、拳大程度の小さな川原石を敷き詰めるタイプで、小礫群礎盤と仮称する。二つのタイプに時間差があるか否かは明確ではないが、後述するＳＢ362とＳＡ363の切り合いにおいて、小礫群礎盤が大形扁平礎盤より古いという証左を得ている。

焼土を含む柱穴

また、これらの柱穴の中には、覆土に炭化層が充満するもの、焼土や炭化物を多く含むものがみられる。これらは、幕末期の大火で火を被った家屋や、大火後の整地層を掘り込んで建てられた家屋の柱穴と考えられた。これらは、全体に焼土や炭を含まない大火以前の柱穴や溝跡などの遺構を切る事から、本遺跡で最も新しい遺構と捉えることができる。

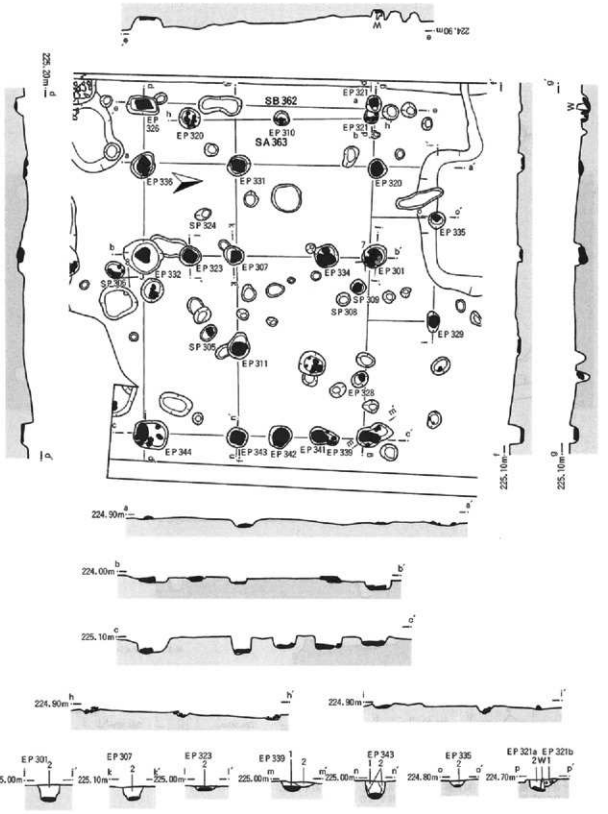
これらを基に、上記の特徴的な柱穴群の分布域を概観すれば、特に焼土や炭を含む主な柱穴群は、概ね明治初頭絵図（第３図）の建物配置の横町通り沿いの各家屋に対応すると考えられる。

しかし、既に述べたように今調査区が横町通りの道路部が主体となるため、柱列などは確認できるが、建物の本体は調査区外にあるため、建物の長さや構造は不明である。以下に調査区の状況から全体に建物構造が明確なものについて概述する。

大形の礎盤建物

ＳＢ362・ＳＡ363（第20図）　５区のⅠ～Ｊ－６～７グリッドに位置する。一部Ⅲ層上面で検出し、全体の検出面はⅣ層上面である。ＳＡ363を切る。全ての柱穴に大形の扁平礎盤を持つ建物で、調査区全体からみれば他区より柱穴群が少なく、重複などの建て替えなども少ない状況が認められ、長期間存続した事が推測される。南北梁行4.8m（16尺）、東西桁行6.9m（23尺）以上の２×３間以上の東西建物で、西側と北側に１間の張り出しをもつ建物である。方位はＮ－87°－Ｗである。

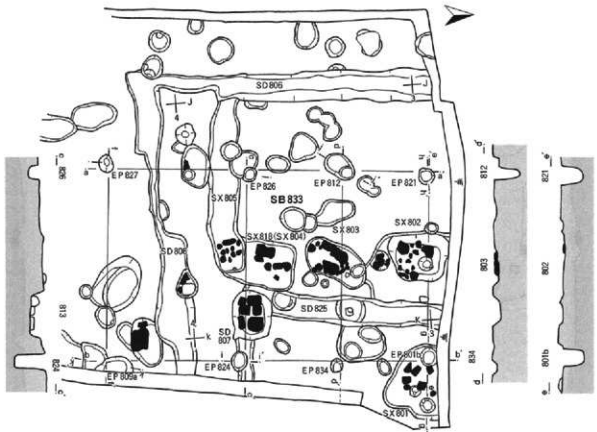
柱間距離は、梁間が主軸（ＥＰ331・343間）の南側と北側で長さが異なり、北側が南側より約1.5倍長い。南側がＥＰ336・331、ＥＰ332・307、ＥＰ344・343のそれぞれ柱間が1.9m（約６尺）、北側がＥＰ331・320、ＥＰ307・301、ＥＰ343・339の柱間が2.9m（約10尺）を測る。最も西側の梁間ＥＰ326・321ｂ間は、主軸ラインなどに明確な礎盤柱穴などはなく、溝状の掘り込みが認められる柱間4.8m（16尺）を測る。他に、梁では補助的にＥＰ332・307の中間に

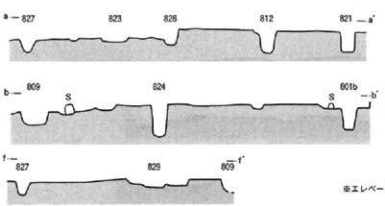


ＳＢ362ＥＰ
1　10Ｙ Ｒ2/2黒褐色シルト（柱痕。地山粒、焼土粒、炭粒を含む。）
2　10Ｙ Ｒ3/3黒褐色砂質シルト（地山塊を多く含み、炭化粒、焼土粒を微量に含む。）
ＳＡ363ＥＰ
1　10Ｙ Ｒ3/2黒褐色砂質シルト（地山塊を若干含み、小礫を多く含む。）

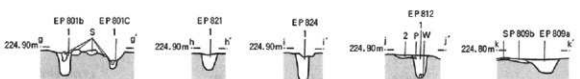
0　2m
1：80

第20図　ＳＢ362建物跡・ＳＡ363柱列





※エレベーションの高さは全て 225.00m



ＳＢ833ＥＰ
1　10ＹＲ2/2黒褐色シルト（炭化層。炭化物を多く含む。小礫を若干含む。やわらかい。）
2　10ＹＲ3/2黒褐色砂質シルト（炭化物、焼土粒を含む。）

ＥＰ809a
10ＹＲ2/2黒褐色シルト（炭化物を含み、地山塊を含む。）

0　2m
1：80

第21図　ＳＢ833建物跡

ＥＰ323、ＥＰ307・301間の約２／３にＥＰ334、ＥＰ343・339間の約１／３等間(0.9～1.0m：約３尺)でＥＰ342、ＥＰ341が存在する。

桁間も等間隔ではなく、西側から梁行ＥＰ326・336、ＥＰ321ｂ・320間が1.2m（４尺)、梁行ＥＰ336・332、ＥＰ331・307、ＥＰ320・301間が1.9m(約６尺)、ＥＰ332・344、ＥＰ307・343、ＥＰ301・339間が3.8m（約13尺）を測る。

これらの柱穴の配置から主体的な建物は、主軸ラインと平行するＥＰ336・320・344・339を建物角とする規模であろう。最も西側のＥＰ326・321ｂ辺は、梁行に比して桁行が短く、付属的な軒先などと考えられる。北側の張出しは、ＥＰ335・329で、梁行1.3m(約４尺)、桁行2.2m（約７尺）である。

柱穴の平面形は隅丸方形や楕円形を呈し、径30～86cm、確認面からの深さ６～36cmである。全ての柱穴底面から礎盤の長さ６～40cm、厚さ４～16cmの大形の扁平礎盤が認められ、一部礎盤の下や脇からは栗石と考えられる小礫群が出土している。柱穴の覆土は暗褐色微砂で、一部柱痕跡が確認されるものもある。覆土には若干炭化物を含むものもあるが、明瞭な焼土を含むものは少ない。しかし、川原石などは一部被熱したものもあり、時期的には大火以前の建物だが、柱などが焼けて礎盤の一部分が火を受けた可能性が推測された。

他にＳＡ363とした柱穴底面に小型礫を敷き詰めた礫群礎盤とした３基の柱穴の柱列が確認された。長さは（梁行）約3.8m（約13尺）で、柱間は1.9m（約６尺）である。主軸はＳＢ362よりやや北に傾き、ＥＰ321ａが柱根の残るＳＢ362ＥＰ321ｂに切られる。

ＳＢ833（第21図）　５区新のＪ～Ｋ－３～４グリッドに位置し、古代河川跡の近世整地層Ｆ３層上面で検出した。焼土や炭を多く含むＳＸ801などを切る。柱穴は径30～40cm前後の小型の円形で、全体に40～50cmと深く、ほぼ全ての柱穴で炭化層が充満する特徴がある。

柱穴に炭化層充満する建物跡

梁行3.8m（約13尺）、桁行3.9m（13尺）以上の２×１間以上の東西建物で、南側に梁が更に１間延びる可能性がある。方位はＮ－85°－Ｗである。

柱間は、梁間が棟通り（ＥＰ812・834間）の南側と北側で若干異なり、南側ＥＰ826・812間が2.1m（７尺）、北側ＥＰ812・821間が1.7m（約６尺）を測る。桁行はＥＰ826・824、ＥＰ821・801ｂ間が3.9m（13尺）を測る。なお、建物南側のＥＰ827も上記建物の柱穴と同様の形態で、柱の抜き取りなどと考えられるやや大形のＥＰ809ａが対応する柱穴として推測され、建物との距離（ＥＰ826・827間）は2.9m（約10尺）を測る。

遺物はＥＰ812から肥前磁器片（ＲＰ831）が出土している。

ＳＢ286・287・1004（第８・９・18図・附図）　その他に10・17区（ＳＢ286・287）や１・11区（ＳＢ1004）でも建物が認められた。10・17区では、炭化層が充満し整地層を切るＳＰ203・204を北側桁とするＳＢ286や、ＳＰ236・219・1749を南側桁とするＳＢ287など東西棟が２棟以上認められた。

その他の建物跡

１区では南端で覆土に焼土を含むＳＰ913・942・495・937の組み合わせなどからＳＢ1004南北棟の存在が推測され、明治初期の絵図に対応するのかもしれない。しかし、これらは、一部調査区外に延びる可能性があり、今後周辺の調査を待ち確認したい。

2　道路関連遺構

今調査で特徴的なものには、元禄高畠城絵図などから少なくとも近世中頃まで遡れる城下の

横町通り（道路）を調査した事があげられる。現在は、幅７ｍ程の融雪道路として利用されているが、その際の工事などにより上面が撹乱され、近世の路盤の状況は一様でない。また、調査区が分割されている事から、近世を含む旧路盤全体を調査するのは困難で、各区の土層断面などで状況を確認した。なお、調査区全体で確認できる幕末の焼土層（Ⅱ層）以降の上位路盤は、重機などにより慎重に盤下げを行い、主に焼土層から遺物の取り上げを行った。

近世側溝　遺構検出面では、旧路盤の範囲の両端から幅30～50cmの溝跡が２条検出され、当時の道路と建物域を区切る側溝などと考えられた。両溝の内側は、ほとんど柱穴などの遺構が存在せず、両溝の外側に多数検出された道路沿いの建物の柱穴群とは対照的である。少なくとも近世以降にも、この両溝の内側が、継続的に道路として利用された結果だろう。

一方、調査区北側の17区では、一部旧道路の路盤の遺存状況が良好で、調査区全体で確認される焼土層（Ⅱ層）との関連や、旧道路の路盤の構築方法などもある程度把握できた。以下に、これを基に旧道路の状況や旧道路の側溝と考えられる溝跡などを概述する。

旧道路横断面　**ａ　旧道路路盤（第19・22図）**　17区南側の６～７－Ｈ～Ｉグリッド付近では、付替え道路工事の関係で、唯一現道路を東西に切断する土層が確認できた。上位からⅠ層（現道及び現路盤）、Ⅰ'層（旧路盤：礫層とシルト層の互層）、Ⅱ層（焼土炭化層：大火期）、Ⅱ'（大火以前の旧路盤：礫層）、Ⅱ下層（Ⅱ'以前の整地層及び包含層か）、Ⅳ層（地山）に大別できる。

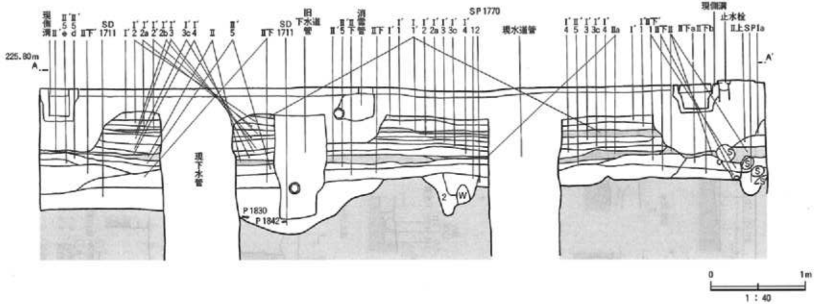
特にⅠ'～Ⅱ'層は、焼土層（大火）前後の旧道路の状況が見取れる。最も古い旧道の痕跡は、ＳＤ1711やＳＰ1770などの遺構が埋没し、古代河川による低地部を整地（包含層か）した直後に認められる。現地で旧路盤５（Ⅰ'５層）としたシルト層がこれにあたり、厚さ６～10cmで、小礫や砂を非常に多く含み、旧道路の沈下を防ぐ路盤や路床の性格が推測される。また、路盤は、一部現代の上・下水管などに壊されるが、幅5.8m程まで確認され、中央部から両端にかけて５～10cm程緩やかに立ち上がる。雨水などの家屋浸水を防ぐ対策と推測された。

次に、この上面には焼土層（Ⅱ層）が、３～８cmと薄く堆積し、旧路盤中央部から両端に約10cmの高低差で緩やかに立ち上がる。焼土層は、調査区西側の旧道路外（柱穴群域）で約16cmとやや厚く堆積し、遺物域の火災と、それが道路上に広がったものとの違いであろう。

その後、焼土層の上には、旧路盤４（Ⅰ'４層）とした暗褐色粘質シルトに小礫や砂を多量に含む砂礫層が道路幅の焼土層全域を被い、その上に不純物がほぼ混入しない黄褐色細砂層（Ⅰ'３ｃ層）がそれを覆う。その後、この砂礫層と砂層の互層は、最も確認できる中央部では４回以上認められ、部分的に更に細分も可能である。

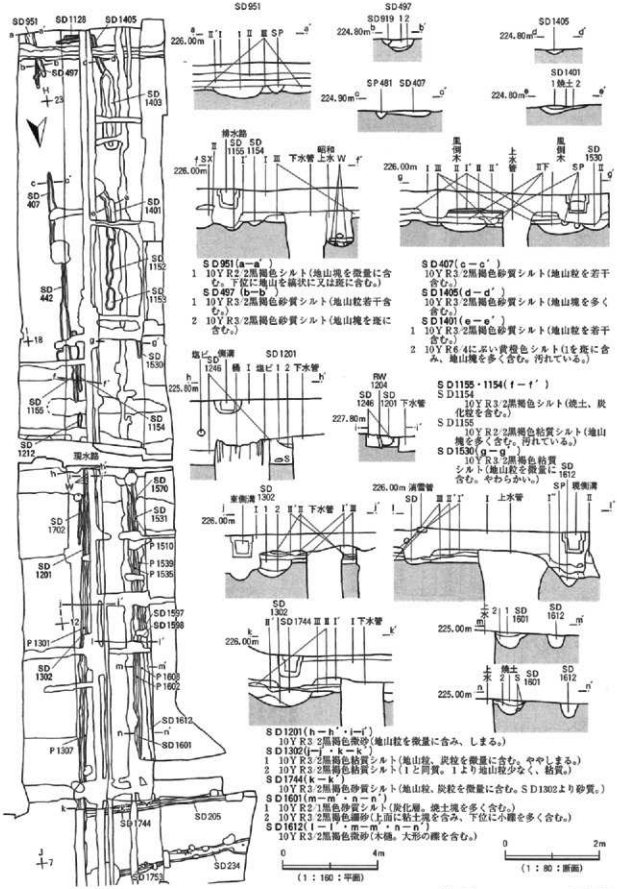
これらは、火災後の整地路盤や路面の改修、全体として版築状の幕末以降の旧道路の路盤の可能性も考えられたが、上記地下堆設物に要所が破壊され、判然としなかった。しかし、少なくともⅡ層から約15～25cm上位の旧路盤１'（Ⅰ'１'層）には、厚さ２～８cmの焼土層があり、時期は、幕末以降の近代～現代と不明確だが、この段階で再度火災などの災害があった事が窺え、調査区南半では確認できないが、北端部の現道中央部でも確認できた。

南北側溝　**ｂ　ＳＤ1201・1570南北溝跡（第23図）**　近世の道路関連遺構としては、２次調査区の現道部分の現側溝ラインとほぼ並んで、２条平行する南北溝が部分的に検出された。この両溝跡は、直交する中央水路との重複関係や、焼土層との層準関係から存続期間に時期差も考えられるが、特に明確なＳＤ1201・1570のある調査区中央部では、両溝間は約4.9～5.7mを測り、最長で約

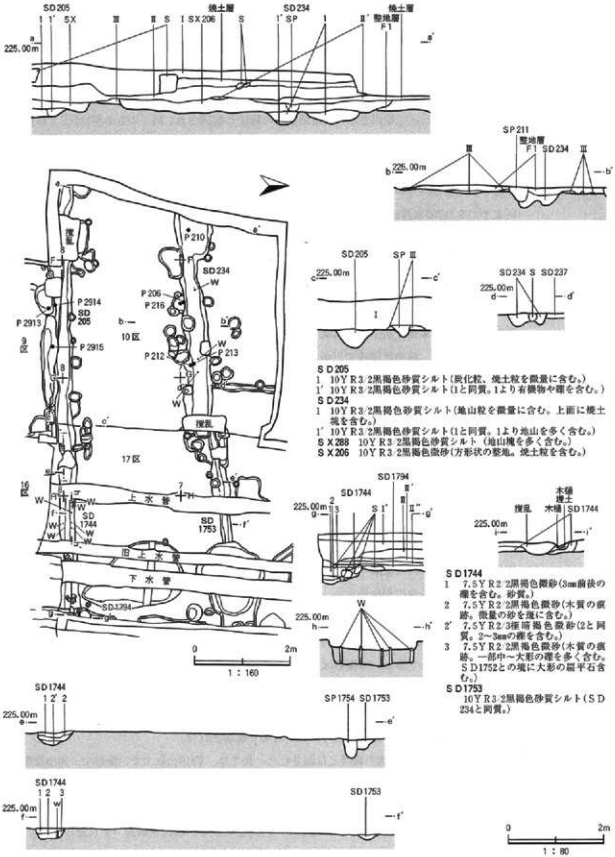


17区南半　南壁土層断面（第6図Ａ－Ａ'）
Ⅰ　10YR6/2灰黄褐色細砂（現路盤。）
Ⅰa　10YR3/2黒褐色微砂（現高畠石裏土。）
Ⅰ'　10YR5/2灰黄褐色微砂（炭化粒を若干含む。）
Ⅰ'1　10YR5/2灰黄褐色細砂（地山粒を微量に含む。しまる。）
Ⅰ'1　10YR5/2灰黄褐色砂質シルト（炭、焼土粒を多く含む。しまる。）
Ⅰ'2　10YR6/6明黄褐色細砂（下位に2～3cmの小礫含む。ややしまる。やや厚く堆積。）
Ⅰ'2a　10YR5/2灰黄褐色シルト（炭粒塊を若干含む。しまる。）
Ⅰ'2'　10YR6/4にぶい黄橙色細砂（全体に2～3cm大の小礫を含む。ややしまる。）
Ⅰ'2b　10YR5/3にぶい黄橙色微砂（炭粒を微量に含み、やや焼けている様子。汚れている。）
Ⅰ'3　10YR6/6明黄褐色細砂（やや厚く堆積。下位のｃを縞状又は斑に含む。ややややわらかい。）
Ⅰ'3c　10YR3/2黒褐色微砂（2～3cm大の小礫を多く含む。かたくしまる。炭粒を微量に含む。）
Ⅰ'4　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト（3～5cm大の礫を多く含み、しまる。炭粒を多く含む。）
Ⅱ上　10YR3/2黒褐色微砂（焼土を縞状に含む。）
Ⅱ　10YR2/1黒色砂質シルト（焼土粒、炭粒を多く含む焼土層。やわらかい。中央部で2～3cm大の礫を多く含む。）
Ⅱ'　10YR4/1褐灰色砂質シルト（炭を若干含み、礫を含まず。路盤4と路盤5の間層。）
Ⅱ'5　10YR3/2黒褐色微砂（5cm前後の礫を多く含み、かたくしまる。）
Ⅱ'5e　10YR3/3暗褐色微砂（Ⅲ上と同質。Ⅲ上より炭、地山粒含まず、ややややわらかい。）
Ⅱ'5d　10YR3/2黒褐色微砂（路壁5と同質。礫をあまり含まない。2～3cm大の小礫を若干含む。）
Ⅱ下'　10YR3/3暗褐色微砂（炭粒、地山粒を若干含む。Ⅲより色調明るく粘質。）
Ⅱ下　10YR3/2黒褐色微砂（地山粒、砂を若干含む。整地層的。しまる。）
Ⅱ下a　10YR4/1褐灰色粘質シルト（Ⅱ下と類似するが、粘質。土手様。）
Ⅱ下b　10YR3/2黒褐色粘質シルト（Ⅱ下と類似するが、粘質。土手様。）
SD1711
10YR4/1褐灰色砂質シルト（ややグライ化し、炭粒を微量に含み、やわらかい。）
SP1770
1　10YR3/2黒褐色微砂（地山を含む。）
2　10YR3/2黒褐色微砂（柱根を含む。）

第22図　近世道路土層断面



第23図　ＳＤ1201・1570南北側溝



S D205
1　10Y R3/2黒褐色砂質シルト（炭化粒、焼土粒を微量に含む。）
1'　10Y R3/2黒褐色砂質シルト（1と同質。1より有機物や礫を含む。）

S D234
1　10Y R2/2黒褐色砂質シルト（地山粒を微量に含む。上面に焼土塊を含む。）
1'　10Y R2/2黒褐色砂質シルト（1と同質。1より地山を多く含む。）

S X288　10Y R3/2黒褐色砂質シルト（地山塊を多く含む。）

S X206　10Y R3/2黒褐色微砂（方形状の整地。焼土粒を含む。）

S D1744
1　7.5Y R2/2黒褐色微砂（3mm前後の礫を含む。粉質。）
2　7.5Y R2/2黒褐色微砂（木質の腐朽。微量の砂を塊に含む。）
2'　7.5Y R2/3極暗褐色微砂（2と同質。2～3mmの礫を含む。）
3　7.5Y R2/2黒褐色微砂（木質の腐朽。一部0～大形の礫を多く含む。S D1752との境に大形の扁平石含む。）

S D1753
10Y R3/2黒褐色砂質シルト（S D234と同質。）

第24図　S D205・234東西側溝

16m以上確認され、遺構の分布状況などから当時の側溝的な役割が推測された。調査区の南半では北半と比してやや西に傾き、南端のクランク状の屈曲（ＳＤ1405）などは城下の防御的要素の一つかもしれない。

なお、現地では、調査区の細分により同一の遺構を各区で遺構登録番号を付したが、本稿では、最も主体的な遺構番号を代表させる。

ＳＤ1201（ＳＤ1301・1302・1794と同一）

ＳＤ1201は、12区で検出され、旧道路東側の側溝と推測され、同一のものが13区（ＳＤ1301・1302）、17区（ＳＤ1794）でも検出された。長さ約16m以上で、幅約60cmを測り、確認面からの深さは38cm前後である。断面形は逆台形を呈し、覆土は、暗褐色シルトを基調とし、下位に砂層を多く含む。ＳＤ31中央水路を切り、同部分で溝東側に４基の小杭列が確認された。調査区北半のＳＤ205東西溝に切られ、13区南壁の土層からもⅡ層以前の旧道路の下位で検出される。遺物では、一部新相も混入するが、岸産の摺鉢（ＲＰ1303）、中国産磁器碗（ＲＰ1314）があり、床面付近より志野産の皿（ＲＰ1301）などが出土し、17世紀後半頃と考えられる。

ＳＤ1570（ＳＤ1598・1601と同一）

ＳＤ1570は、15区北で検出し、旧道路西側の側溝と推測され、15（ＳＤ1598）・16区（ＳＤ1601）で検出された。長さは約16m以上で、幅約54cm以上を測り、確認面からの深さは34cm前後である。南・東側で現上水管に壊され、西側でＳＤ1531木樋、ＳＤ31（ＳＤ1525）中央水路を切る。覆土は、暗褐色微砂で上面に焼土層（Ⅱ層）が混入する。断面形は逆台形を呈し、覆土より瀬戸・美濃の皿（ＲＰ1535）、天目茶碗（ＲＰ1598）、中国産磁器（ＲＰ1602）などが出土し、遺物からは17世紀前半頃と推定されるが、焼土との関係から埋没時期などは新しい。

なお、調査区南半で両溝に対応する溝跡として、東側がＳＤ1212・1154、ＳＤ1156・442・407、ＳＤ497・951、西側がＳＤ1530、ＳＤ1401・ＳＤ1405・1128などがあげられる。特にＳＤ497、ＳＤ1405はＳＤ470南端水路に切られる。

東西側溝

ｃ　ＳＤ205・234東西溝跡（第24図）　調査区中央の10（ＳＤ205・234）・17区（ＳＤ1744・1753）でも、現町道の北側に平行する、東西溝跡が２条検出された。

両溝間は約5.7～6.6mを測り、最長で約17m以上確認される。両溝跡は、共に重複する遺構はないが、ＳＤ1201南北溝やＳＤ1531木樋との重複、10区の整地層下での検出や柱穴群に全体に切られるなどやや古相を呈する。高畠城絵図にも描かれる横町通りに西側で直交する細道の側溝などの可能性も窺えた。

ＳＤ205（ＳＤ1744と同一）

ＳＤ205は、旧細道南側の側溝と推測され、長さ約18m以上、幅約70cmを測り、確認面からの深さは34cm前後である。断面形は逆台形を呈し、覆土は暗褐色シルトを基調とし、17区では下位に断面方形状の木質（樋か）の痕跡が一部確認された。東側でＳＤ1201を切ると考えられ、更に東の５区には延びない。17区南西角付近でＳＤ1531木樋北端の一部が直交し、これに切られる。８－Ｈグリッド付近では杭列が溝の両端で確認された。

ＳＤ234（ＳＤ1753と同一）

ＳＤ234は、旧細道北側の側溝と推測された。長さは、約16m以上で、幅約60～90cmを測り、確認面からの深さは約10～28cmである。東側でＳＫ1711に切られる。10区では整地層や西側でＳＸ206とした方形状の焼土を含む撹乱層に壊される。断面形は10区の一部でＷ字状の二股だが、17区では浅い船底状を呈する。覆土は、暗褐色微砂で、珠洲系陶器（ＲＰ221）、瀬戸・美濃の皿（ＲＰ223）などが近接して出土した。時期的にはＳＫ1771から中世～近世初頭の内耳土鍋も出土し、それ以前の時期も推測される。

3　水路跡・溝跡

今調査では、現在は農業用水路として利用され、近世には高畠城絵図にも描かれる、少なくとも元禄期頃までは遡れる東西方向の旧水路跡２条を検出した。両旧水路は、調査区中央部と調査区北端部で確認され、各々中央・北端旧水路として各区で登録した。他に水路と同じ東西方向の大形の溝跡も南端部と中央部で検出された。以下に記す。

近世絵図に残る水路跡

ＳＤ31中央水路（第25図）　調査区中央のＦ～Ｉ－14～15グリッドのⅣ層上面で検出した。現在も農業用水路として利用されるため、部分的な調査に留まり、水路の両岸を明確に検出したのは調査区西側の９区（ＳＤ510）のみで、これを層準の基本とした。

調査区中央部のＳＤ31（ＳＤ510・1246・1525と同一）水路

旧水路の検出長は東西約17ｍ以上で、水路幅は西側で約６ｍで、確認面からの深さは70cm前後である。断面形は緩やかな舟底状を呈するが、特に９区北側（北岸）では、覆土は５層に大別され２回以上の改修が推定された。

当初、水路は現在よりも約１ｍ北側を走行し、底面のＦ５砂層が河床と判断される。その後堆積（Ｆ４）が進み、Ｆ３を北岸土手（盛土）とするＦ２底面の水路に改修する。その後徐々に泥炭の堆積土（Ｆ２）で埋没し、旧水路は幅が狭いＦ１'底面の水路に改修され、Ｆ１ａ～ｃが北岸の土手（盛土）と考えられ、焼土などを含む人為的な黄褐色地山土で土盛し、川原石や打ち込み杭などで更に北岸下部を護岸する。その後旧水路は、再び泥炭層（Ｆ１）が堆積し、江戸時代末頃にはほぼ埋没し、現在の小規模な水路幅に落ち着く。その直後の幕末頃に調査区全体で確認される焼土層（Ⅱ層）が以前の旧水路全体を被うようである。なお、９区南側（南岸）は、各覆土などの類似から北側との層準を理解したが、一部土留めに小礫の土盛りや打ち込み杭の多用など、北岸とはやや異なる土手や護岸も認められた。

他遺構との重複もこれら改修と関連し、水路北側で、最も新しい焼土を含む黄褐色盛土層（Ｆ１）などをＳＤ1201・1570南北側溝、ＳＤ1531木樋などが切る。更にこのＳＤ1531木樋の下から橋脚の一つと考えられた大形のＳＰ1595が確認される。これと対になる柱穴が、12区水路北岸で検出された大形のＳＰ1203と推定され、両者の距離間は約６ｍを測る。ＳＰ1203には、柱の固定を目的とした貫板を持つ柱根の下部が残存し、覆土も地山塊を多く含む埋土である。一方、ＳＰ1595は、暗褐色粘質土で柱の抜き取りなどが考えられた。

ＳＰ1203・1595橋脚跡

ＳＤ31の出土遺物は、散発的で明確な時期を示すものはないが、上層から相馬焼（ＲＰ505）、会津焼（ＲＰ506）の陶器片、中～下層から瓷器系陶器（ＲＰ519）、瓦質土器（ＲＰ33）の甕などが出土した。他に古代の土器や中世板碑も出土する。

ＳＤ1702北端旧水路（第26図）　調査区北端の17区北側のＧ～Ｉ－２～４グリッド、近世整地のＦ１層上面で検出した。両岸石積みで東西方向の旧水路である。現在は農業用堰（一ノ堰）として利用され、平成17年にはＳＤ1702の北側から南側に改築された。周辺は、南北に現上水管、東側に昭和期の上水管が走行し、石積み上部が既に壊されている。また、西側で近代まで遡るＳＥ1703桶が、石積み南岸に埋設され、一部石積が改修される。なお、本工事の進行上最初、現上水管を残し、下位の古代河川跡精査時に現上水管を撤去し調査した。

調査区北端のＳＤ1702石積水路

この石積み水路の検出長は東西約８ｍ以上、水路幅は石積み内側で約１～1.5ｍで、確認面からの深さは100cm前後である。断面形は箱形や逆台形を呈し、覆土は間層に砂とシルトの互

層を挟む洪水砂層を主とした3層に分けられ、Ｆ１・２の間に薄く有機物層を含む。

両岸の石積みは、南岸が現水路の崩落の恐れから一部石積みのトレンチ調査などに留め、北側を主に石の積み方や掘り方を精査し、石の外しなどを行った。石積みは、最初石積部から約20～30cm外側をほぼ垂直か斜位に掘り込む。その後直径50～80cmの大形の川原石の平坦面を利用し不規則に積み上げ、間に人頭大の川原石や小礫、粘土を詰め込む形態で、現状ではあまり企画性は認められず、長さ約１mの長大な中世板碑なども石積みに転用される。河床には崩落したと考えられる川原石が一部認められ、中には「弘安七季」(1284年)銘のある中世板碑が、砕面を裏にして出土した。また、両岸の石積みの内側に沿って、土留めなどのために部分的に小規模な打ち込み杭も認められた。

中世板碑

構築年代は、石積み掘り方（岸窯産香炉：ＲＰ1804）や最下層のＦ３付近（中～下層：唐津砂目皿・碗類：ＲＰ1802・1790）の遺物などから近世初頭頃と考えられ、周辺の低地を整備した古代河川の最上層のＦ１層（近世整地層）の年代とほぼ同時期と推測される。ＳＤ1702最上層のＦ１層からは多くの近世後半の陶磁器（44～46図）が出土し、現況では概ね近代には埋没したようである。なお、両石積みを外した際の出土陶磁器からは、石積構築年代と明らかに時期差があるものが一部あった。平面では判然としなかったが、調査区西壁や北壁の石積み土層断面から部分的な石積みの改修も窺えた。

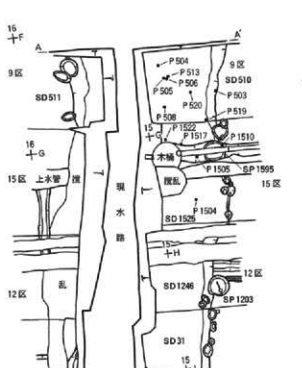
調査区南端の溝跡ＳＤ470（ＳＤ704・1102・1404と同一）

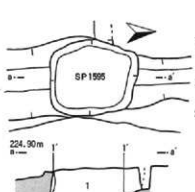
ＳＤ470南端溝（第28図）　ＳＤ470は、調査区南端の１・６・11・14区のＥ～Ｇ－23グリッドでⅣ層上面の検出のやや幅広の東西溝である。検出長は約15m以上で、幅約140cmを測り、確認面からの深さは26～55cm前後である。断面形はＵ字状を呈し、覆土は、暗褐色シルトを基調とし、地山塊を多く含む上層と、地山塊や粒を微量にしか含まずグライ化する下層に分けられる。この溝跡は、調査区西・東壁の土層の層準から、焼土層（Ⅱ層）や調査区南半で顕著な中～近世の包含層（Ⅱ下層）より下位に位置する。しかし、調査区を南北に並走する備溝状の溝跡であるＳＤ1405やＳＤ497を切る事から一定の時期幅がある。近世の備前系陶器(35－10)などは出土するが、全体に出土遺物が少なく、時期的には判然としない。大町通りと併行する主軸方向や、他の溝跡に比べ幅広である事から、大手門から続く大町通りの備溝の可能性もある。

調査区中央部の東西溝跡ＳＤ538（ＳＤ1529・1221・2250と同一）

ＳＤ538・523東西溝（第28図）　ＳＤ538・523は、調査区中央の２・９・12・15区のＦ～Ｈ－16グリッド付近、ＳＤ31中央旧水路の南側で検出された東西の溝跡である。特にＳＤ538は長大で、検出長は約11.8m以上で、西側で幕末頃の焼土や炭が充満したＳＸ2205性格不明遺構に切られる。幅は約140～170cmを測り、確認面からの深さは32～44cm前後で、断面形はＵ字状を呈する。覆土は、汚れた地山様を主体とし、最も明瞭な部分では、上層と下層に薄く地山塊を含む灰黄褐色シルト、間層に地山塊を多く含むにぶい黄褐色シルトに分けられ、人為的な一括堆土などが考えられた。ＳＤ523もＳＤ31中央旧水路とＳＤ538の中間に位置し、東側は撹乱で壊されるが、約50cmとやや幅は狭いがＳＤ31と同様東西に並走し、覆土もＳＤ538と同じく汚れた地山様を呈する。両者は、汚れた地山様を覆土とする点や、ＳＤ31中央水路と平行する点が共通し、東側の先端は明らかでないが、近世旧道路に直交する事などから、これら旧水路や旧道路に関連した溝跡と考えられる。

時期的には、ＳＤ538で漆器碗（ＲＷ1518）が１点出土したのみで不明だが、近代のＳＸ2205



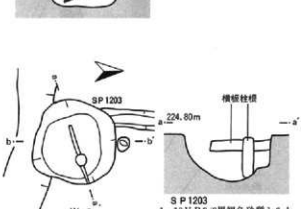


S P1595

1　10Y R2/2黒褐色砂質シルト(地山塊・粒を含む。炭化物を含む。)

1'　10Y R2/2黒褐色砂質シルト(1より砂少ない。)

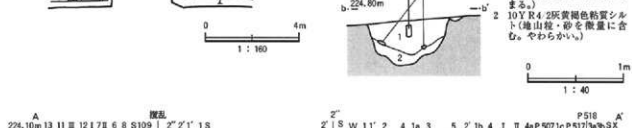
2　10Y R2/2黒褐色砂質シルト(地山塊、粘土を多く含む。有機物含む。)



S P1203

1　10Y R3/2黒褐色砂質シルト(地山塊を斑に多く含み、しまる。)

2　10Y R4/2灰黄褐色粘質シルト(地山粒・砂を微量に含む。やわらかい。)



S D31（510）中央水路西壁

Ⅰ　10Y R3/2黒褐色微砂(現表土。)

Ⅱ　10Y R3/2砂質シルト(焼土、炭を含む。)

Ⅲ　10Y R4/2灰黄褐色シルト(地山粒を微量に含む。古代包含層。)

1　10Y R3/2黒褐色砂質シルト(礫、焼土、炭を多く含む。)

1'　10Y R2/1黒色細砂(明るい砂層。)

1a　10Y R3/2黒褐色砂質シルト(地山塊を多く含み、焼土塊を多く含む。1の土留め盛土。整地層。)

1b　10Y R3/2黒褐色砂質シルト(1aと同質。炭化層を挟み、焼土粒、地山塊を含む。)

1c　10Y R3/2黒褐色砂質シルト(1aと同質。地山塊多い。)

2　10Y R3/2黒褐色砂質シルト(焼土を基本的に含まず、炭化粒若干含む。しまる。)

2'　10Y R3/2黒褐色砂質シルト(2と同質。2より地山塊多く粘質。)

2"　10Y R3/2黒褐色砂質シルト(2と同質。2より地山塊が微量で、粘質。上位に砂層を含む。)

3　10Y R3/2黒褐色シルト(地山塊をブロック又は斑状に多く含み、しまる。土留め盛土。)

3a　10Y R3/2黒褐色シルト(地山塊・粒を多く含む。土留め盛土様。)

3b　10Y R3/2黒褐色シルト(炭含むが、焼土、地山塊、礫はほとんど含まない。)

4　10Y R3/2黒褐色微砂(明るい砂質。地山粒を微量に含む。下位が色調暗い。)

4a　10Y R6/4にぶい黄橙色砂質シルト(地山塊を斑に含む。汚れている。)

5　10Y R6/4にぶい黄橙色細砂(小礫を含み、下位に砂礫層。)

6　10Y R6/1褐灰色シルト(灰状焼土。)

7　10Y R3/2黒褐色シルト(焼土、炭を含む。盛土状で1a相当か。)

8　10Y R3/2黒褐色シルト(大形の礫を含む。土留め用か。)

9　10Y R3/2黒褐色砂質シルト(2～3cm大の礫が多い。)

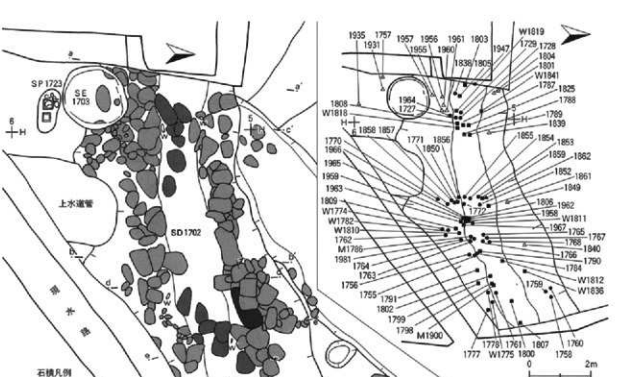
10　10Y R4/4褐色粗砂(明るい砂礫層。5～10cm大の礫を含む。)

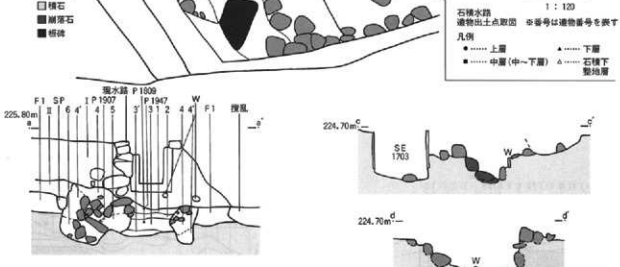
11　10Y R4/2灰黄褐色シルト(焼土、炭粒少ない。盛土状で土留め様。しまる。2相当か。)

12　10Y R3/2黒褐色シルト(3～5cm大の礫を多く含む。盛土状で土留め基部か。)

13　10Y R3/2黒褐色シルト(地山粒を微量に含む。Ⅱ下か。)

第25図　S D31中央水路





SD1702

1　10YR6/6明黄褐色細砂(2～3cm大の小礫を多く含む。遺物を多く含む。上との境に有機物層を含む。しまる。)

1′　10YR3/2黒褐色粘質シルト(有機物層。植物質の有機物を多く含む。)

2　10YR6/4にぶい黄橙色中砂と10YR3/2黒褐色シルトの互層(中砂には3～5cm大の礫を含み、やや しまる。)

3　10YR6/4にぶい黄橙色細砂(5～10cm大の礫を含む。しまる。)

3′　10YR6/6明黄褐色中砂(上位に5～10cm大の礫を縞状に含む。)

4　10YR3/2黒褐色砂質シルト(石積み崩土。地土粒、炭粒を含む。5～5cm大の礫含む。しまる。)

4′　10YR3/2黒褐色砂質シルト(石積み崩土。1と同質。10YR7/2にぶい黄橙色粘土塊を含む。しまる。下位は粘質でやわらかい。)

5　10YR4/2灰黄褐色微砂と10YR6/6明黄褐色細砂の混合土(石積み崩土。3～5cm大の礫を多く含み、しまる。)

6　10YR5/2灰黄褐色微砂(石積み崩土。炭粒を微量に含む。地山砂を斑に含む。20cm大の礫含む。やわらかい。)

第26図　SD1702北端石積水路

や重複する柱穴や土坑の大半に切られる状況は、中～近世でも古相とみて大過ない。なお、ＳＤ31中央旧水路の北側にも、ＳＤ506とした東西の溝跡があるが、覆土は暗褐色シルトと異なり、溝の先端も近世旧道路には及ばず、ＳＤ538・523との違いが指摘できる。

4　木　樋　跡（第27図）

ＳＤ1531木樋は、調査区中央部の西側、Ｇ－７～15グリッドで検出された。最初、15区北（ＳＤ1531）で検出され、16区（ＳＤ1612）・17区に続く南北方向に走行する。

この木樋は、幅40～70㎝、確認面からの深さ40㎝の溝跡内部に、近世末の木製の樋を埋設するもので、桶などを経由しながら遠距離に水を運ぶための施設である。木樋施設は、ＳＤ31中央水路の北側にあり、南側から①上水をＳＤ31中央水路からＳＥ1577桶に引く短い導水部（方形木樋）、②上水の水溜のＳＥ1577桶、③上水を北側に流す主体のＳＤ1531木樋によって構成される。本稿では上水施設の主体であるＳＤ1531木樋を登録の代表とした。

ＳＤ1531（ＳＤ1597・1612と同一）

ＳＤ1531木樋の検出長は、15区の導水部（南端）を含め、17区南端で検出されたＳＤ1612内の木樋の表皮（北端）までで約35.5ｍを測る。部分的に近現代の上下水管や耕、電柱等の埋設時に既に壊される。木樋自体は、ＳＤ31中央水路に近い15区の遺存状況が良く、約16ｍ残存する。16区では溝内に大形の川原石が廃棄され木樋が抜き取られた事も窺え、17区では部分的に木樋外皮などが残るに留まる。一方、木樋の埋設状況を側面（15区）からみると、南から、ほぼ現況の水路の高さから短い導水部（方形木樋）が、ＳＥ1577桶に向かって斜め下に設置され、上水を桶内に溜める。そのＳＥ1577桶の北側の上位には、ＳＤ1531木樋が接続し、桶内部の上澄みの水を僅かな傾斜を保ち更に北側に流す仕組みである。

導水部

具体的には、導水部は、板材を縦10㎝、横16㎝の断面横長の長方形に釘で組む樋が、現水路の埋土のトレンチから確認された。現水路の崩落の恐れから樋の掘り方などは確認できなかったが、導水部の水口先端が現水路埋設時に壊される事や、導水部の樋がＳＥ1577桶に対し約16度の角度で、桶上半部に斜位に接続される事などが分かった。

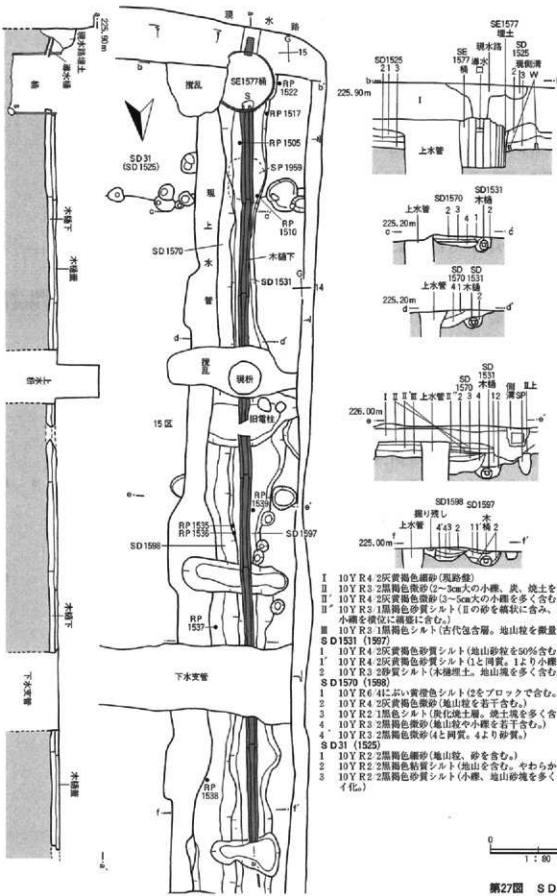
桶部

水を溜めるＳＥ1577桶は、直径120㎝のもので、長さ約１ｍ、幅15㎝、厚さ３㎝の板材を円形に廻らし、上下端部を箍（竹）で留める。東側約１／３を現上水管埋設時に破壊され、板材は18枚ほど確認できた。桶内の覆土には、その際の砕石が多く流入し、桶使用時の土砂の堆積は認められず、蓋などの存在も窺えた。他に桶北側のＳＤ1531木樋と接合する板材の底面には、人頭大の川原石が置かれ、木樋の荷重による板材の沈下を防ぐ。これは、桶や木樋の側面圏から、ＳＤ1531木樋の水口を導水部より高く保つためとも考えられる。

木樋

ＳＤ1531木樋本体は、直径約30㎝の丸太を利用し、両端が確認できるものや撹乱を受けて接合部が欠損する木樋の前後の状況から、長さ約２ｍ前後のものを接いでいくようである。丸太は木口の上部約１／３を萱、下部約２／３を樋本体とする。樋本体は中央部を緩横約９㎝四方の断面方形に掘り込み、水を通す溝に加工する。丸太の両端は、各々凹凸の加工が施され、丸太同士の繋ぎ目強化や水漏れ防止のためと考えられる。

時期的には、他遺構との重複でＳＤ1531木樋や桶、幅広のＳＤ31旧水路埋没土やそれに伴うＳＰ1595橋脚跡を切り、導水部の状況からも現水路とほぼ同じ狭い水路幅になる新相の時期と考えられた。また、構築時期の上限は、東接するＳＤ1570南北側溝（覆土上面に焼土層）に



Ⅰ　10Y R 4/2灰黄褐色礫砂(現路盤)
Ⅱ　10Y R 3/2黒褐色微砂(2～3cm大の小礫、炭、焼土を含む。)
Ⅱ'　10Y R 4/2灰黄褐色微砂(3～5cm大の小礫を多く含む。かたい。)
Ⅱ''　10Y R 3/1黒褐色砂質シルト(Ⅱの砂を縞状に含み、1～2cm大の小礫を横位に縞状に含む。)
Ⅲ　10Y R 3/1黒褐色シルト(古代包含層。地山粒を微量に含む。)

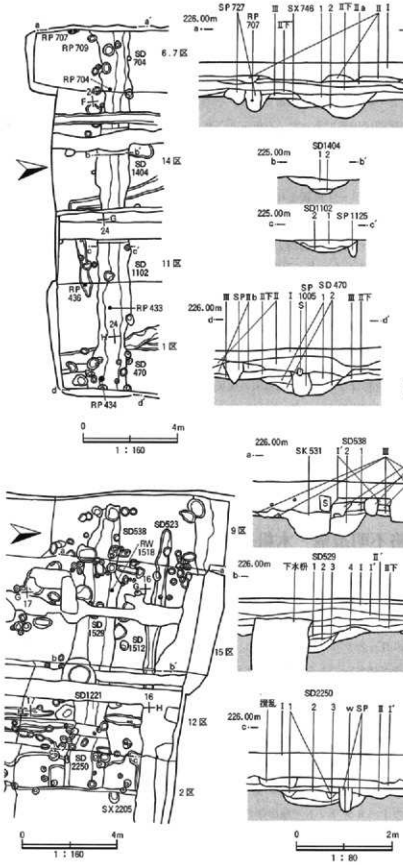
ＳＤ1531 (1597)
1　10Y R 4/2灰黄褐色砂質シルト(地山砂粒を50%含む。しまる。)
1'　10Y R 4/2灰黄褐色砂質シルト(1と同質。1より小礫を含む。)
2　10Y R 3/2砂質シルト(木樋埋土。地山塊を多く含む。)

ＳＤ1570 (1598)
1　10Y R 6/4にぶい黄橙色シルト(2をブロックで含む。しまる。)
2　10Y R 4/2灰黄褐色微砂(地山粒を若干含む。)
3　10Y R 2/1黒色シルト(炭化焼土層。焼土塊を多く含む。)
4　10Y R 3/2黒褐色微砂(地山粒や小礫を若干含む。)
4'　10Y R 3/2黒褐色微砂(4と同質。4より砂質。)

ＳＤ31 (1525)
1　10Y R 2/2黒褐色礫砂(地山粒、砂を含む。)
2　10Y R 2/2黒褐色粘質シルト(地山を含む。やわらかい。)
3　10Y R 2/2黒褐色砂質シルト(小礫、地山砂塊を多く含む。グライ化。)

0　2m
1：80

第27図　ＳＤ1531木樋



第28図　SD470・538・528東西溝

切られ、概ね幕末以前と考えられる。出土遺物でも、木樋や樋の埋土などから肥前系染付類（RP1510・1522・1539・1608）の小片があり、全体に新相が多い。

5　井　戸　跡（第29図）

石組み井戸

井戸跡は、石組みなどの明確なものは3基である。その他に素掘りの大形の井戸跡も登録したが、大形の土坑との区別は困難であった。石組み井戸跡を概述する。

ＳＥ136石組み井戸跡　4区のⅠ－10グリッドで検出された石組み井戸跡で、平面形はほぼ円形を呈し、直径約1.7mで、確認面からの深さは130cm前後である。石組みは南側を主に認められ、長さ30cm大の川原石が3～4段積まれる。特に最下位は長さ50cm前後の長大な川原石を横に2個配置し石組みの基部にする。断面形は逆台形状を呈し、覆土は黒褐色微砂のほぼ単層である。周辺には素掘りのＳＥ135（直径約1.5m）とＳＥ134（直径約1m）が分布し、近接するＳＥ135からは小片で図示しないが、近世の染付片（ＲＰ114・115）などが出土する。

ＳＥ1110石組み井戸跡　1・11区のⅡ－22グリッドの石組井戸跡で、平面形は隅丸方形状で、直径約1m前後を測る。確認面からの深さも約100cmである。石組みは直径10～20cmの川原石を丁寧に組み上げ、壁面を垂直に整える。一部壁面中～下部で長さ約40cmの扁平な川原石を縦や横に配置し、扁平な面を石組みの壁に利用する。断面形は方形状を呈し、覆土は焼土塊を多く含む灰黄褐色微砂で、遺物はないが、概ね幕末の火災後の廃棄が考えられる。

ＳＥ2910石組み井戸跡　2次調査の9区、Ｆ－9グリッドで、調査区外に延びる。明確な石組はないが、大形の川原石の出土状況から石組み井戸と考えられた。平面形は円形を呈し、直径約1.7mを測る。確認面からの深さは約100cmである。石組みは直径20～30cm大の川原石が底面近くの覆土中から出土し、下位には壁面に縦位の川原石が残存する。覆土は上位に焼け石を含み、主体は中～下位の灰黄褐色粘質シルトである。出土遺物はないが、近世だろう。

6　土坑・性格不明遺構・木組遺構（第30～32図）

土坑は、一般的な大形のものの他に、小判型の墓坑的なもの、浅い掘り方の性格不明のもの、木組遺構も含めた。覆土には、幕末の焼土や炭を含む（Ⅱ層）ものと、それ以前の古相のものがある。区毎に主なものを記す。

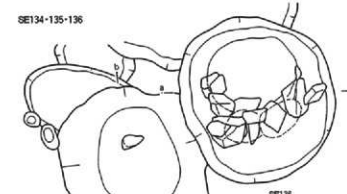
ＳＫ412土坑　1区のⅡ－22グリッドで検出され、調査区外に延びる。平面不整円形の直径1.5m、確認面からの深さは26cmである。断面U字状で、覆土は焼土や炭を含む暗褐色粘質土で中位に有機物層を含み、漆器（ＲＷ428）や下駄（ＲＷ413）、陶器擂鉢（ＲＰ412）などが出土する。

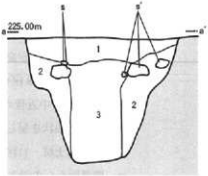
ＳＫ418土坑　1区のⅡ－20グリッドで検出、ＳＤ420を切る。平面不整円形で直径1.6m、深さは80cmである。断面方形で、覆土は焼土や炭を含む黒褐色シルトで、近世陶磁器片（ＲＰ417・418・419）、古銭などが出土した。唐津の胎土目など古相も含むが、近世後半である。

ＳＫ313土坑　5区のⅠ－8グリッドで検出される。平面楕円形の長さ1.5m、幅1.1mを測り、深さは30cmである。断面形はU字状を呈し、覆土は焼土や炭を含む黒褐色微砂で、漆器（ＲＷ305）や近世陶器片（ＲＰ306・307・310）などが一括出土した。近世後半が主体である。

焼土遺構

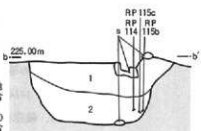
ＳＸ2205土坑　2区のⅡ～Ⅰ－16～17グリッド付近で検出され、現上水支管に切られる。平

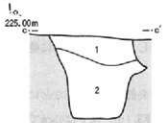




S E 135
1　10Y R 3 2黒褐色微砂(礫、地山粒を含む。)
2　10Y R 3 2黒褐色微砂粘質シルト(1と同質。礫、遺物を含む。)

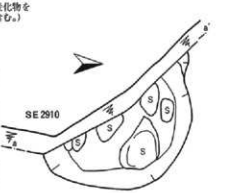
S E 136
1　10Y R 3 2黒褐色微砂(埴土。地山塊を微量に含み、小礫若干含む。ややしまる。)
2　10Y R 3 2黒褐色砂質シルト(20～30cmの礫を含み小石を多く含む。粘質。やわらかい。石の外側に小石をつめる。)
3　10Y R 2 2黒褐色微砂(炭化物を含み、地山粒を微量に含む。)

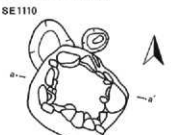


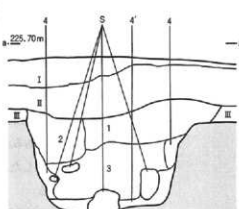


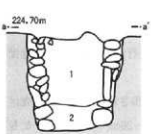
S E 134
1　10Y R 3 2黒褐色シルト(地山塊を若干含む。)
2　10Y R 3 2黒褐色シルト(1と同質。地下層砂質。小礫を含みグライ化。)

S E 2910
1　10Y R 3 2黒褐色微砂(地山塊、焼けた川原石を多く含む。)
2　10Y R 3 2黒褐色砂質シルト(地山粒を含む。しまる。)
3　10Y R 4 2灰褐色粘質シルト(地山粒を微量に含む。グライ化。)
4　10Y R 3 2黒褐色粘質シルト(大形の礫を含み、地山粒を微量に含む。粘質。)
4'　10Y R 4 2灰黄褐色粘質シルト(地山塊、粒を多く含む。崩落土。)









S E 1110
1　10Y R 4 2灰黄褐色微砂(焼土塊、地山塊を多く含む。)
2　10Y R 3 2黒褐色粘質シルト(焼土塊を含む。1より地山塊を含まず、色調明い。)

0　1m
1：40

第29図　S E 136・1110・2910井戸跡

面ほぼ長方形の溝状で、長さ5.6m以上、幅220cm前後である。浅い船底状の掘り込みで、深さは10～15cmである。覆土は、焼土や炭と共に、遺物を多量に含む。遺物登録したものは72点程で、全体に一括性が高い。出土遺物からも事実頃の大火後の整地的な性格が窺える。

ＳＫ605土坑　８区のＦ－18グリッドで、調査区外に延びる。調査区では稀な斜位に走行するＳＤ601や、中近世の包含層Ⅱ下より下位にあり、平面円形で直径1.１m、深さは40cmである。断面形は船底状を呈し、覆土の黒色シルトで土師器片（ＲＰ601）を含む。

ＳＫ1103土坑　11区のＧ－22グリッドで検出され、現下水管に切られる。平面円形で直径1.３m、確認面からの深さは55cmである。断面形は船底状で、覆土は、黒褐色の泥炭層を主とする。旧道路内に分布し、建物等に付属したものかは不明である。

ＳＫ1402土坑　14区のＦ－20グリッドで検出され、東側を現上水管に切られる。平面不整円形で、直径1.5m、深さは50cmである。断面形は逆台形状を呈する。覆土は黒褐色微砂で礫を含む。旧道路西側の端にあたり、建物に付属するかは不明である。

ＳＫ1436土坑　14区のＧ－21グリッドで検出、東側を現代の上水管に切られる。平面不整円形の直径1.4m、確認面からの深さは40cmで、北側にテラスを持つ。断面形は箱形を呈し、覆土は小礫を含む黒褐色砂質土で、木杭を縦・横位に含む。旧道路内中央に分布する。

ＳＫ218土坑　10区のＦ－７グリッドの検出で、北側の整地層を切る。平面楕円形の長さ1.３m、幅１mを測り、深さは40cmである。断面船底形を呈し、覆土は、上層に焼土や炭を含む黒褐色微砂の単層である。

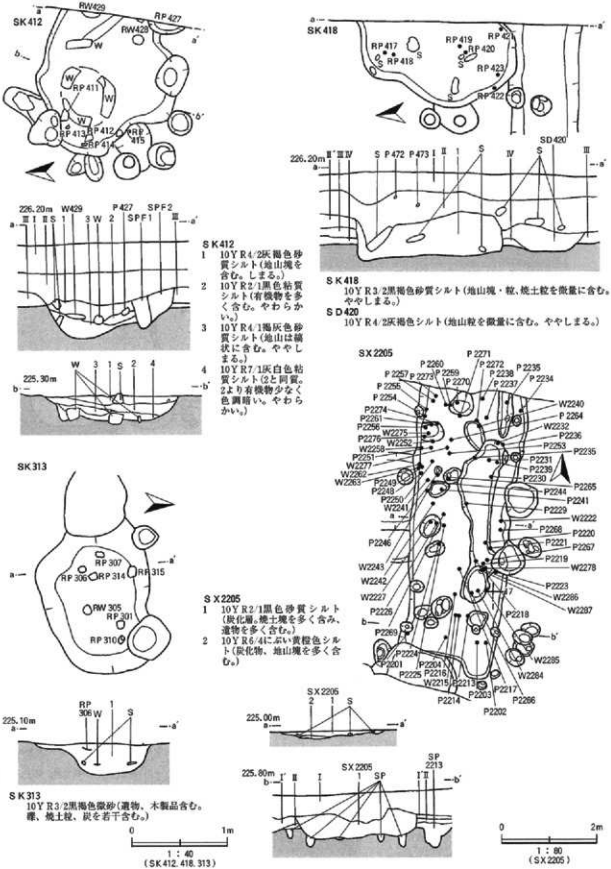
ＳＫ1711土坑　17区のＨ－６グリッドで検出され、中央部を現下水管などに切られる。東側の新旧不明の溝跡がＳＥ345に続く。平面楕円形で、直径3.1m、深さは45cmである。断面形は緩やかな船底状を呈し、覆土は、黒褐色粘質土で、内耳土鍋（ＲＰ1842）などが出土した。近世初頭以前の可能性がある。

ＳＸ410性格不明遺構　１区のＨ－21グリッドで検出され、北側で直角に曲がるＳＤ420を切る。平面は方形で、角に杭を打ち込み、板材が横位で四方に組まれる。板材内部の規模は長さ1.２m、幅0.９mである。内部の北東角には直径38cm、高さ37cmの小型の桶が埋設される。また、中央部には桶より古い段階のピットがある。板材内部と桶内の覆土は、焼土や炭が充満し、銅製品の火鉢用具や瓦質土器の火鉢（ＲＰ443）、近世～近代染付（ＲＰ407～409）が出土する。

ＳＥ345性格不明遺構　５区のＩ－６グリッドのⅡ層下位の整地層下で検出。平面隅丸長方形で長さ約３m、幅約２m、深さは40cmである。断面形は船底形を呈し、覆土は、地山塊を多く含む灰黄褐色微砂である。東側に川原石、西側に杭が配置され、図示しないが、ほぼ中央部から小型の曲物が出土した。北側に幅2.１mのＳＤ338が東西に走行する。ＳＤ338は近世前半の遺物が多く出土する。

ＳＸ802・801性格不明遺構　５区新のＪ－３グリッド付近で検出され、両者とも調査区外に延びる。両者は不整形で、直径1.5m前後、深さは全体に浅く５～20cmである。両者とも断面は緩やかな船底形で、覆土は主に焼土を含む炭化層で、整地的である。近世陶磁器（ＲＰ849・897）や古銭などが出土した。

小判形の土坑　**ＳＫ491土坑**　１区のＨ－23グリッドで検出、ＳＰ492などに切られる。平面小判形で、長さ0.６m以上、幅0.５m、深さは24cmである。断面は逆台形で、覆土は地山を多く含む黒褐色砂質



SK412
1　10YR4/2灰褐色砂質シルト(地山塊を含む。しまる。)
2　10YR2/1黒色粘質シルト(有機物を多く含む。やわらかい。)
3　10YR4/1褐灰色砂質シルト(地山は縞状に含む。ややしまる。)
4　10YR7/1灰白色粘質シルトと同質。2より有機物少なく色調暗い。やわらかい。)

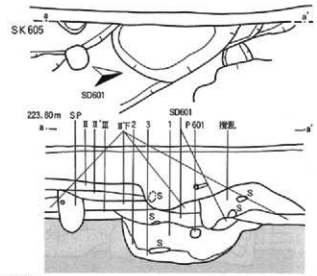
SK418
10YR3/2黒褐色砂質シルト(地山塊・粒、焼土粒を微量に含む。ややしまる。)

SD420
10YR4/2灰褐色シルト(地山粒を微量に含む。ややしまる。)

SK313
10YR3/2黒褐色礫砂(遺物、木製品含む。礫、焼土粒、炭を若干含む。)

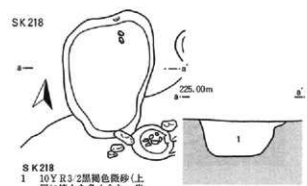
SX2205
1　10YR2/1黒色砂質シルト(炭化層、焼土塊を多く含み、遺物を多く含む。)
2　10YR6/4にぶい黄橙色シルト(炭化物、地山塊を多く含む。)

第30図　SK412・418・313土坑・SX2205性格不明遺構

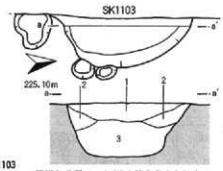


SK605
1　10YR2/1黒色シルト(地山塊・粒を微量に含む。やわらかい。木、根P601含む。)
2　10YR6/4にぶい黄褐色砂質シルト(1を斑に含み、地山塊を多く含む。)
3　10YR6/2灰黄褐色砂質シルト(有機物を線に含み、1を斑状に含む。汚れている。)
SD601
10YR3/2黒褐色シルト(地山塊を含み、焼土粒を微量に含む。)
SP
10YR3/2黒褐色砂質シルト(焼土粒、炭を含む。下位に地山塊を含む。)

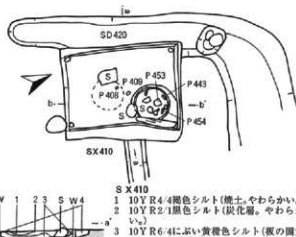
SK1436
1　10YR3/2黒褐色砂質シルト(やや粘質。小礫を多く含み、炭を多く含む。)

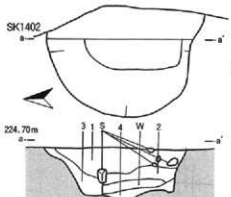


SK218
1　10YR3/2黒褐色微砂(上層に焼土を多く含む。炭化塊を含む。)

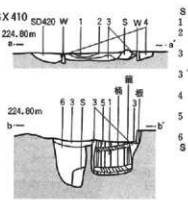


SK1103
1　10YR3/2黒褐色砂質シルト(地山塊を多く含む。)
2　10YR3/2黒褐色シルト(地山塊、粒を微量に含む。)
3　10YR3/2黒褐色シルト(地山粒を微量に含み、泥炭質。)





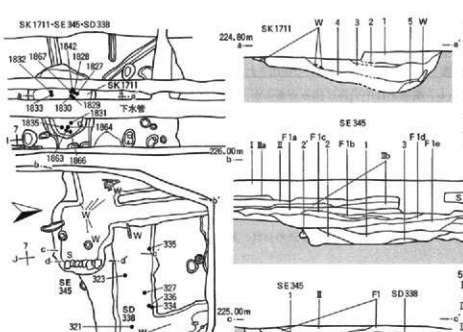
SK1402
1　10YR3/2黒褐色微砂(地山塊、礫を多く含む。)
2　10YR3/2黒褐色微砂(地山塊を多く含む。)
3　10YR3/2黒褐色砂質シルト(地山塊を若干含む。)
4　10YR3/2黒褐色シルト(泥炭質。地山粒を微量に含む。)



SX410
1　10YR4/4褐色シルト(焼土。やわらかい。)
2　10YR2/1黒色シルト(炭化層。やわらかい。)
3　10YR6/4にぶい黄橙色シルト(板の固定土。地山塊を多く含む。やや粘質。)
3'　10YR6/4にぶい黄橙色シルト(3の焼土。3と類似。地山塊を多く含む。)
4　10YR6/4にぶい黄橙色シルト(井枠の埋土か。3と同質。)
5　10YR2/1黒色シルト(炭化層。焼土、礫を含む。)
6　10YR5/3砂質シルト(地山塊を含む。)
SD420
10YR3/2黒褐色シルト(地山粒を微量に含み、やや粘質。)

0　1m
1：40

第31図　SK605・1436・1103・218土坑・SX410性格不明遺構



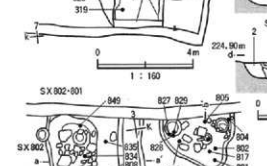
SK1711
1　10YR3/2黒褐色微砂(地山粒を微量に含む。)
2　10YR3/2黒褐色礫層(地山粒、小礫を含む。)
3　10YR3/2黒褐色砂質シルト(有機物を含み、泥炭様。)
4　10YR3/2黒褐色砂質シルト(3と同質。3より粘質。)
5　10YR3/2黒褐色礫砂

5区西壁土層断面(SE345、SD338)
Ⅰ　10YR3/2黒褐色微砂(炭土。高温石や礫を含む。)
Ⅱ　10YR3/2黒褐色微砂(焼土、炭、地山塊を多く含み、しまる。)
Ⅱa 10YR3/2黒褐色シルト(炭化層。焼土を含み、下位に明るい地山砂を縞状に含む。)
Ⅱb 10YR2/2黒褐色微砂(焼土、炭化層。下位に高温石を薄く含む。)
F1a 10YR3/2黒褐色微砂(整地層。焼土、炭を含む。)
F1b 10YR4/2灰黄褐色シルト(地山を縞状に含む。)
F1c 10YR6/4にぶい黄橙色シルト(地山塊層。地山縞だが、汚れている。)
F1d 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト(焼土若干含む。)
F1e 10YR3/2黒褐色微砂(下位に礫を多く含む。)
F1f 10YR3/2黒褐色微砂(F1eより礫少なく炭に含む。)
F1g 10YR3/2黒褐色砂質シルト(F1eより礫少ない。)

SE345
1　10YR3/2黒褐色粘質シルト(有機物含み、下層に地山塊を含む。やわらかい。)
2　10YR4/2灰黄褐色微砂(炭、焼土を微量に含む。)
2'　10YR4/2灰黄褐色微砂(地山塊を多く含む。)
3　10YR4/2灰黄褐色微砂(地山砂との互層。)

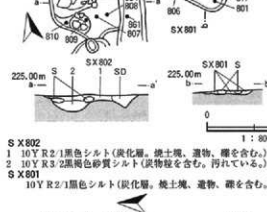
SD338
1　10YR3/2黒褐色微砂(地山砂、炭含みしまる。)
2　10YR3/2黒褐色微砂(地山塊・礫を多く含む。)

SD364
10YR3/2黒褐色粘質シルト(地山粒を微量に含む。)



SX802
1　10YR2/1黒色シルト(炭化層。焼土塊、遺物、礫を含む。)
2　10YR3/2黒褐色砂質シルト(炭物粒を含む。汚れている。)

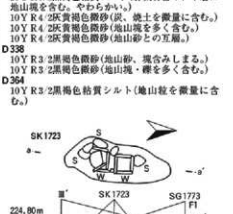
SX801
10YR2/1黒色シルト(炭化層。焼土塊、遺物、礫を含む。)



SK491
10YR3/2黒褐色砂質シルト(地山塊を多く含む。)

SP492
10YR3/2黒褐色微砂(焼土を多く含む。単層。)

SK482
10YR3/2黒褐色(地山塊を多く含む。)



SK1723木組遺構
1　10YR3/2黒褐色微砂(礫を多く含み、かたくしまる。焼土粒を若干含む。)

第320図　SK1711・491・482土坑・SX802・801性格不明遺構・SK1723木組遺構

シルトである。人為的な埋土で、底面から漆器椀（ＲＷ446）が逆位で圧着して出土した。形態的に他の柱穴群とは異なり、SK482と共に墓域の可能性がある。

ＳＫ482土坑　１区のＨ－21グリッドで検出される。平面小判形の長さ約１ｍ、幅0.5ｍ、深さは30㎝である。断面形は中央部に窪みがあるが、ほぼ逆台形を呈する。覆土は、地山塊を多く含む黒褐色砂質シルトで、底面から三引両文のある漆器椀（ＲＷ456）が出土した。

三引両文の漆器

ＳＫ1723木組遺構　17区のＧ－３グリッドで検出され、Ⅱ層を切る。平面楕円形で、中央部に長さ72㎝、幅３㎝の板材を、縦に方形（長さ18㎝前後）に釘で組む木組が２基掘設される。木組内部は空洞で、堆積土は礫などを含む黒褐色微砂である。

調査区全体では11基が確認され、木組を１～２基埋設する。17区の旧道路沿いや大町通りとの交差部分に多く分布し、一定の間隔も認められ、旗指しなどの機能が推測された。

表４　各区の主な柱穴（柱根・根固め石・礎盤）一覧表

地区	柱穴番号	種類	柱根径	高さ(cm)	断面形	先端加工	ＲＷ番号	備考
１区	ＳＸ406	柱根					ＲＷ449・499	
	ＳＸ410	柱根	10	44	不明	無し		
	ＳＰ411	柱根・根固め石	12	36	五角形	無し		
	ＳＫ412	柱根					ＲＷ413	
	ＳＤ416	柱根	16	44	不明	無し		
	ＳＸ417	柱根						
	ＳＰ426	柱根・根固め石	30	30	不明	有り		
	ＳＰ428	柱根	9	36	円形	有り		
	ＳＰ429	柱根	14	25	円形	有り		
	ＳＰ430	柱根	14	25	5面面とり	無し		
	ＳＰ447	柱根						
	ＳＰ448	柱根・根固め石						
	ＳＰ451	柱根・礎盤	14	49	六角形	無し		
	ＳＰ452	柱根・礎盤	15	32	3面面とり	有り		
	ＳＰ454	柱根・礎盤	12	33	八角形	無し		
	ＳＰ456	柱根・根固め石						
	ＳＰ459	柱根						
	ＳＰ460	柱根	15	30	2面面とり	無し		
	ＳＰ462	柱根	17	30	不明	有り		
	ＳＰ463	柱根						
	ＳＰ464	柱根	13	22	不明	有り		
	ＳＰ473	柱根	10	39	八角形	有り		
	ＳＰ478	柱根	16	45	六角形	有り		
	ＳＰ493	柱根						
	ＳＰ494	柱根	14	23	八角形	無し		
	ＳＰ496	柱根	12	20	八角形	無し		
	ＳＰ905	柱根	10	13	不明	無し		
	ＳＰ909	柱根	14.5	23	八角形	無し		
	ＳＰ910	柱根						
	ＳＰ911	柱根						
	ＳＰ916	柱根・根固め石	16	27	八角形	有り		
	ＳＰ920	柱根	18	33	八角形	無し		
	ＳＰ922	柱根						
	ＳＰ925	柱根						
	ＳＰ927	柱根・根固め石	11	28	不明	有り		
	ＳＰ928	柱根						

地区	柱穴番号	種類	柱根径	高さ(cm)	断面形	先端加工	ＲＷ番号	備考
１区	ＳＰ929	柱根						
	ＳＰ930	柱根						
	ＳＰ931	柱根	15.5	31	不明	有り		
	ＳＰ933	柱根	13	26	円形	無し		
	ＳＰ935	柱根						
	ＳＰ936	柱根						
	ＳＰ943	柱根・礎盤	15	21	八角形	有り		
	ＳＰ944	柱根・根固め石	14	27	不明	有り		
	ＳＰ952	柱根	10	49	六角形	無し		
	ＳＰ953	柱根	11	24	5面面とり	無し		
	ＳＰ954	柱根	11	46	八角形	有り		
	ＳＰ962	柱根	14.5	18	六角形	無し		
	ＳＰ964	柱根						
	ＳＰ965	柱根						
	ＳＰ966	柱根	20	32	八角形	無し		
	ＳＰ967	柱根						
	ＳＰ969	柱根						
	ＳＰ970	柱根						
	ＳＰ971	柱根・根固め石	10	9.5	面とり	有り		
	ＳＰ973	柱根	10	20	5面面とり	無し		片頭面とり
	ＳＰ976	柱根・根固め石						
	ＳＰ977	柱根	10	15	八角形	有り		
	ＳＰ980	柱根・根固め石	12	13	不明	有り		
	ＳＰ981	柱根	15	23	五角形	有り		
	ＳＰ982	柱根	2.5	30	八角形	無し		
	ＳＰ983	柱根	15	23	円形	有り		
	ＳＰ984	柱根	9	14	面とり	無し		
	ＳＰ985	柱根	10.5	10	不明	無し		
	ＳＰ986	柱根	12	15	八角形	無し		
	ＳＰ987	柱根	15	14	4面面とり	無し		
	ＳＰ989	柱根	17	25	八角形	有り		
	ＳＰ990	柱根・根固め石	11	21	八角形	有り		
	ＳＰ991	柱根						
	ＳＰ992	柱根・根固め石	14	29	不明	有り		
	ＳＰ993	柱根・根固め石						
	ＳＰ994	柱根	10.5	38	八角形	無し		

地区	柱穴番号	種類	柱痕値	高さ(cm)	断面形	先端加工	RW番号	備考
1区	SP401	根固め石						
	SP402B	根固め石						
	SK404	根固め石						
	SP405	礎盤						
	SP924	根固め石						
	SP409	根固め石						
	SP415	根固め石						
	SK418	根固め石						
	SP421	根固め石						
	SK422	柱根・根固め石						
	SP423	礎盤						
	SX425	根固め石						
	SP432	根固め石						
	SP434	礎盤						
	SP436	根固め石						
	SP439	根固め石						
	SP440	根固め石						
	SP441	根固め石						
	SP443	根固め石						
	SP444	根固め石						
	SP445	根固め石						
	SP446	根固め石						
	SP450	礎盤・根固め石						
	SP455	根固め石						
	SP461	根固め石						
	SP465	根固め石						
	SP468	根固め石						
	SP469	根固め石						
	SP472	根固め石						
	SP473	根固め石						
	SP474	柱根・礎盤・根固め石						
	SP475	礎盤						
	SP479	根固め石						
	SP480	根固め石						
	SP489	根固め石						
	SP490	根固め石						
	SP495	礎盤						
	SP499	柱根・石						SP947と同一
	SP500	根固め石						
	SP901	根固め石						
	SP902	根固め石						
	SP904	根固め石						
	SP906	柱根・根固め石						SP976と同一
	SP912	根固め石						
	SP913	根固め石						
	SP914	根固め石						
	SP915	根固め石						
	SP918	根固め石						
	SP921	根固め石						
	SP926	礎盤						
	SP934	根固め石						
	SP937	礎群礎盤						
	SP939	根固め石						
	SP942	根固め石						
	SP945	根固め石						
	SP946	礎盤						

地区	柱穴番号	種類	柱痕値	高さ(cm)	断面形	先端加工	RW番号	備考
1区	SP950	礎盤・根固め石						
	SP955	根固め石						
	SP956	礎盤						
	SP957	根固め石						
	SP958	礎盤						
	SP959	根固め石						
	SP960	礎盤・根固め石						
	SP963	根固め石						
	SP972	根固め石						
	SP974	柱根・根固め石						
	SP975	礎盤						
	SP978	礎盤						
	SP988	根固め石						
	SP995	根固め石						
	SP996	礎盤						
	SP997	根固め石						
	SP998	礎盤						
	SP999	根固め石						
	SP1001	礎盤						
	SP1002	根固め石						
	SP1003	根固め石						
2区	SP2202	柱根						
	SP2207	柱根						
	SP2208	柱根						
	SP2234	柱根	11	33	八角形	省り		
	SP2219	柱根・礎盤	11	13	不明	無し		
	SP2230	柱根	10	33	五角形	省り		
	SP2232	柱根・根固め石					RW2288	
	SP2240	柱根	12	40	六角形	省り		
	SP2242	柱根・根固め石	11	22	3面面とり	無し		
	SP2244	柱根	10	19	五角形	省り		
	SP2247	柱根	14	40	円形	無し		
	SP2248	柱根	15	21	六角形	無し		
	SP2253	柱根					RW2284～2287	
	SP2276	柱根・礎盤	10	23	六角形	無し		
	SP2279	柱根	10	35	円形	無し		
	SP2280	柱根	10	22	五角形	省り		
	SP2281	柱根	13	34	五角形	省り		
	SP2282	柱根・根固め石	12	27	五角形	省り		
	SK2300	柱根・根固め石						
	SP2205	根固め石						
	SP2204	礎盤・根固め石						
	SP2209	根固め石						
	SP2210	根固め石						
	SP2217	根固め石						
	SP2221	根固め石						
	SP2224	根固め石						
	SP2226	礎盤						
	SP2228	礎盤						
	SP2231	根固め石						
	SP2241	根固め石						
	SP2243	根固め石						
	SP2254	礎群礎盤						
	SP2264	根固め石						

地区	柱穴番号	種類	柱根径	高さ(cm)	断面形	先端加工	RW番号	備考
3区	SP2267	根固め石						SP2239と同一
	SP2275	根固め石						
3区	SK10	柱根						
	SP39	柱根・根固め石						
	SK40	柱根・根固め石	10	26	六角形	有り		
	SP52	柱根	12	45	不明	無し		
	SP53	柱根	17	12	不明	無し		
	SP58	根固め石						
	SK61	根固め石						
	SP43	礎盤						
	SK48	根固め石						
	SP54	礎盤・根固め石						
4区	SK106	柱根・根固め石	13	12	八角形	無し		
	SP109	柱根						
	SP110	柱根						
	SP123	柱根						
	SP125	柱根						
	SP127	柱根						
	SP131	柱根						
	SX136	柱根	14	39	不明	無し		
	SX138	柱根						
	SX140	柱根・根固め石	12.5	22	不明	無し		
	SP145	柱根						
	SP148	柱根						
	SP150	柱根						
	SP152	柱根						
	SP154	柱根						
	SP155	柱根						
	SP159	柱根	14	9	八角形	無し		
	SP160	柱根						
	SP168	柱根						
	SX101	根固め石						
	SP107	根固め石						
	SP108	根固め石						
	SP112	根固め石						
	SP115	根固め石						
	SX117	礫群礎盤						
	SP119	根固め石						
	SX121	礎盤						
	SX122	礎盤・根固め石						
	SP124	根固め石						
	SP126	根固め石						
	SP128	根固め石						
	SP129	柱根・根固め石						
	SP132	礎盤						
	SP133	礎盤・根固め石						
	SX137	根固め石						
	SX139	根固め石						
	SP141	根固め石						
	SP149	礎盤						
	SP153	根固め石						
	SP163	根固め石						
	SP164	礎盤・根固め石						
	SP166	礎盤・根固め石						

地区	柱穴番号	種類	柱根径	高さ(cm)	断面形	先端加工	RW番号	備考
4区	SP167	根固め石						
5区	SK313	柱根・根固め石						
	SX314	柱根・根固め石	14.5	27	不明	無し		
	EP321	柱根・礎盤	12.5	25	不明	無し		SB362
	SD338	柱根					RW322・350～352	
		柱根	12.5	48	六角形	無し	RW329	穴あき
		柱根	12	20	不明	無し	RW332	樹の皮
		柱根	11.5	64.5	六角形	無し	RW356	
	SX345	柱根					RW347～349・353～355	
	SP353	柱根・根固め石	13	24	不明	有り	RW338	
	EP301	礎盤・根固め石						SB362
	SK302	根固め石						
	SP303	礎盤						
	SP304	礎盤・根固め石						
	SP305	礎盤						
	SP306	根固め石						
	EP307	礎盤						SB362
	SP309	根固め石						
	EP310	根固め石						SB362
	EP311	礎盤						SB362
	SP317	根固め石						
	EP320	根固め石						SB362
	SK322	根固め石						
	EP323	礎盤						SB362
	SP325	根固め石						
	EP326	礎盤						SB362
	SP327	根固め石						
	EP328	根固め石						SB362
	EP329	礎盤						SB362
	EP330	礎盤						SB362
	EP331	礎盤						SB362
	EP332	礎盤						SB362
	EP334	礎盤・根固め石						SB362
	EP335	礎盤						SB362
	EP336	礎盤・根固め石						SB362
	EP339	礎盤・根固め石						SB362
	SP340	根固め石						
	EP341	礎盤						SB362
	EP342	礎盤・根固め石						SB362
	EP343	礎盤						SB362
	EP344	礎盤・根固め石						SB362
	SP352	礎盤						
	SP354	住居						
	SP355	根固め石						
	SP356	礎盤・根固め石						
	SP357	根固め石						
	SP358	根固め石						
	SP359	礎盤						
	SK361	根固め石						
5区新	SX002	住居・根固め石	13	25	不明	無し		
	EP812	住居					RW833	SB833
	EP824	住居					RW836	SB833
	SP831	住居						

地区	柱穴番号	機能	柱根径	高さ(cm)	掘面形	先端加工	RW番号	備考
5区西	EP801b	根固め石						SB833
	SX801	礎盤・根固め石						
	SX805	根固め石						
	SP813	根固め石						
	SX818	根固め石						SX804と重複
	SP820	根固め石						
	SP823	根固め石						
	EP826	根固め石						SB833
	SP828	礎盤・根固め石						
	SK829	根固め石						
	SX830	根固め石						
	SP832	根固め石						
6・7区	SK721	柱根・根固め石						
	SP722	柱根・根固め石	16.5	36	不明	無し		
	SP726	柱根・礎盤					RW715	
	SP741	柱根						
	SP742	柱根	12.5	13.5	不明	無し		
	SK702	礎盤						
	SP703	根固め石						
	SP714	礎盤・根固め石						
	SP715	礎盤						
	SK720	礎盤						
	SP724	礎盤						
	SP725	根固め石						
	SP726	根固め石						
	SP727	根固め石						
	SP729	根固め石						
	SP739	礎盤						
	SP743	礎盤						
	SP745	擂鉢礎盤						
8区	SD601	柱根					RW603	
	SD603	柱根						
	SP626	柱根						
	SP657	柱根						
	SP658	柱根						
	SP607	根固め石						
	SP609	礎盤						
	SP610	根固め石						
	SP617	礎盤						
	SP618	礎盤						
	SP624	根固め石						
	SP625	根固め石						
	SP630	根固め石						
	SP632	根固め石						
	SP636	根固め石						
	SP637	根固め石						
	SP639	根固め石						
	SP641	根固め石						
	SP644	根固め石						
	SP653	柱根・石						
	SP655	石						
	SP656	石						
9区	SP510	柱根・根固め石	15	41	日面	無し		
	SP515	柱根・根固め石	10	23	円形	有り		
	SP517	柱根・礎盤	15	42	円形	無し		

地区	柱穴番号	機能	柱根径	高さ(cm)	掘面形	先端加工	RW番号	備考
9区	SP533	柱根	12	23	六角形	無し		
	SP542	柱根	8	65	円形	有り		
	SP552	柱根	12	26	六角形	有り		
	SP507	柱根・根固め石						
	SP513	柱根	12	40	不明	無し		
	SP520	柱根・根固め石	15	39	不明	無し		
	SP526	柱根						
	SP530	柱根						
	SP533	柱根						
	SP541	柱根						
	SP542	柱根						
	SP506	根固め石						
	SP510	根固め石						
	SP514	根固め石						
	SP515	根固め石						
	SP516	擂鉢礎盤						
	SK522	根固め石						
	SD523	根固め石						
	SP524	礎盤						
	SP525	礎盤						
	SP527	根固め石						
	SP529	礎盤						
	SP531	根固め石						
	SP534	根固め石						
	SP535	根固め石						
	SP536	根固め石						
次2区	SK2905	柱根						
	SP2906	柱根						
	SP2907	柱根・根固め石						
	SP2913	柱根・根固め石						
	SP2916	柱根・礎盤						
	SP2924	柱根						
	SP2933	柱根						
	SP2934	柱根・根固め石						
	SP2937	柱根	7	23	円形	無し	RW2903	
	SK2940	柱根・根固め石						
	SP2945	柱根						
	SP2953	柱根	18.5	25.9	不明	無し		
	SP2969	柱根						
	SP2901	根固め石						
	SX2904	根固め石						
	SX2908	根固め石						
	SP2912	礎盤						
	SP2914	礎盤						
	SP2925	根固め石						
	SP2926	根固め石						
	SP2928	根固め石						
	SP2935	根固め石						
	SP2939	根固め石						
	SK2941	根固め石						
	SK2942	根固め石						
	SP2943	礎盤						
	SP2950	根固め石						
	SK2954	根固め石						
	SP2957	根固め石						
	SP2959	根固め石						

地区	柱穴番号	種類	柱痕径	高さ(cm)	断面形	先端加工	RW番号	備考
2次9区	SP2960	根固め石						
	SP2962	根固め石						
	SP2964	石						
	SP2966	根固め石						
	SP2973	根固め石						
	SP2975	根固め石						
	SP2976	根固め石						
16E区	SP303	柱根						
	SP304	柱根						
	SD305	柱根					RW231・232	
	SK310	柱根						
	SK315	柱根						
	SK316	柱根						
	SP317	柱根	18	28	3面面とり	無し		
	SX319	柱根・根固め石	17	28	八角形	無し		
	SX320	柱根	13.5	14	不明	無し		
	SX324	柱根・根固め石						
	SX325	柱根						
	SP326	柱根	14	27	5面面とり	有り		
	SP329	柱根						
	SP331	柱根	15	24	八角形	無し		
	SP332	柱根	20	16	丸角形	無し		
	SP333	柱根						
	SD334	柱根	12	21	不明	無し	RW114	
	SP339	柱根・根固め石	17	50	八角形	無し		
	SP340	柱根	19	14	円形	無し		
	SP341	柱根						
	SX343	柱根						
	SP345	柱根						
	SP350	柱根・礎盤	16	17.5	八角形	無し		
	SP352	柱根・根固め石						
	SP353	柱根・根固め石						
	SP354	柱根						
	SP360	柱根	19	29	不明	無し		
	SP361	柱根・根固め石	16	9	不明	無し		
	SP362	柱根						
	SP363	柱根	14	22	不明	無し		
	SP367	柱根						
	SP368	柱根	15.5	47	八角形	無し		
	SP372	柱根	13	15	不明	有り		
	SX373	柱根						
	SP374	柱根	16	7.5	不明	有り		
	SP375	柱根	12	29	不明	無し		
	SP376	柱根						
	SP377	柱根	16	42	八角形	無し		
	SP383	柱根	14	33	六角形	無し		
	SP204	根固め石						
	SP208	根固め石						
	SP211	根固め石						
	SP212	根固め石						SX249と重複
	SK213	根固め石						
	SX222	根固め石						
	SX226	雨群礎盤						
	SX227	根固め石						
	SP235	礎盤						
	SK236	根固め石						

地区	柱穴番号	種類	柱痕径	高さ(cm)	断面形	先端加工	RW番号	備考
16E区	SP237	根固め石						
	SX238	根固め石						
	SP240	礎盤						
	SP242	根固め石						
	SP244	礎盤						
	SP246	礎盤						
	SP256	根固め石						
	SP264	根固め石						
	SX265	雨群礎盤						SK211と同一
	SP266	雨群礎盤						
	SP270	根固め石						
	SP279	根固め石						
	SP281	雨群礎盤						
	SP284	礎盤						
	SP285	根固め石						
11E区	SP1101	柱根	半径10	13	八角形	無し		
	SP1109	柱根	14	34	八角形			
	SP1112	柱根						
	SP1113	柱根	14	21	不明	無し		
	SP1115	柱根						
	SP1118	柱根						
	SP1121	柱根・石						
	SP1130	柱根・根固め石					RW1106	
	SP1139	柱根	13.5	17	不明	無し		
	SK1143	柱根・根固め石						
	SP1149	柱根						
	SP1151	柱根	11	8	円形	無し		
	SP1157	柱根						
	SP1160	木組遺構・根固め石						無さしか
	SP1163	柱根						
	SK1165	根固め石						
	SP1114	礎盤						
	SK1117	根固め石						
	SP1119	礎盤						
	SP1123	雨群礎盤						
	SP1121	根固め石						
	SK1134	根固め石						
	SP1136	礎盤・根固め石						
	SP1137	石						
	SP1138	根固め石						
	SP1140	石						
	SP1141	根固め石						
	SP1142	礎盤・根固め石						
	SK1146	根固め石						
	SP1149	根固め石						
	SP1152	礎盤						
	SP1164	礎盤						
	SP1165	根固め石						
	SP1166	礎盤・根固め石						
12E区	SP1209	柱根	19	22	六角形	無し		
	SP1219	柱根・根固め石						
	SP1220	柱根						
	SP1228	柱根	10	25	六角形	無し		
	SP1235	柱根						
	SP1294	根固め石						

地区	柱穴番号	種類	柱根径	高さ(cm)	掘形形	先端加工	RW番号	備考
12区	SP1207	礎盤						
	SP1208	礎盤						
	SP1218	根固め石						
	SP1222	根固め石						
	SP1224	礎盤						
	SP1225	根固め石						
	SP1238	礎盤・根固め石						
	SP1239	根固め石						
	SP1242	根固め石						
	SP1243	根固め石						
	SP1245	根固め石						
13区	SP1303	木組遺構						抜きしか
	SP1315	柱根						
	SP1316	柱根						
	SP1309	根固め石						
	SP1310	根固め石						
14区	SP1407	柱根	19	19	削り有り	無し		
	SP1437	柱根・礎盤礎盤	18.9	25.2	不明	無し		
	SP1406	根固め石						
	SP1409	礎盤						
	SP1412	根固め石						
	SP1414	礎盤礎盤						
	SP1415	礎盤・根固め石						
	SP1416	根固め石						
	SP1419	礎盤						
	SP1425	根固め石						
	SP1428	礎盤						
	SP1431	根固め石						
	SP1432	礎盤						
	SP1433	根固め石						
	SP1434	根固め石						
	SP1435	礎盤						
	SP1438	根固め石						
	SP1439	礎盤礎盤						
15区	SP1514	柱根						
	SP1517	柱根	9	17	五角形			
	SP1519	柱根	19	34	五角形	無し		
	SP1528	柱根						
	SP1534	柱根						
	SP1535	柱根						
	SP1579	柱根	12	18	一部掘とり	無し		
	SP1503	根固め石						
	SP1506	根固め石						
	SP1516	礎盤						
	SP1521	根固め石						
	SP1537	根固め石						
	SP1538	根固め石						
	SP1541	礎盤						
	SP1542	礎盤						
	SP1550	根固め石						
	SP1559	根固め石						
	SP1554	礎盤・根固め石						
	SP1561	根固め石						
	SP1563	礎盤・根固め石						
	SP1565	根固め石						
	SP1568	礎盤						
	SP1583	石						

地区	柱穴番号	種類	柱根径	高さ(cm)	掘形形	先端加工	RW番号	備考
15区	SP1590	礎盤						
	SP1592	曝砂礎盤						
16区	SP1603	根固め石						
	SP1604	根固め石						
	SP1607	根固め石						
	SP1608	根固め石						
17区	SP1705	柱根	18	66	5面とり	無し		片側面取り
	SP1706	木組遺構						抜きしか
	SK1707	木組遺構						抜きしか
	SP1714	柱根・根固め石						
	SP1721	柱根						
	SK1723	木組遺構・根固め石	13	20	七角形	有り		抜きしか
	SP1726	木組遺構						抜きしか
	SP1727	柱根・根固め石						
	SP1730	木組遺構・根固め石						抜きしか
	SP1731	木組遺構						抜きしか
	SP1732	木組遺構						抜きしか
	SP1734	柱根	12	19	円形	有り		
	SP1735	柱根	8	8	不明	無し		
	SP1737	柱根・礎盤	10	10	六角形	無し		
	SP1738	柱根	15	30	五角形	有り		
	SP1739	柱根	9	24	五角形	無し		
	SK1741	柱根・根固め石					RW1830	
	SP1750	木組遺構						抜きしか
	SP1751	柱根						
	SP1768	柱根						
	SP1770	柱根	11	29	円形	有り		
	SP1771	柱根	15	33	4面取り	無し		
	SK1775	柱根	14	21	不明	有り	RW1945	
	SP1781	柱根					RW1940	
	SP1784	柱根	10	26	四角形	無し		
	SP1785	柱根					RW1943	
	SP1786	柱根	14	24	八角形	無し	RW1950	
	SP1787	柱根・根固め石					RW1954	
	SP1788	柱根	13	19	円形	有り	RW1957	
	SP1789	柱根						
	SP1790	柱根	15.8	38	不明	無し	RW1647	
	SP1713	根固め石						
	SK1717	根固め石						
	SP1724	礎盤						
	SK1725	根固め石						
	SP1745	根固め石						
	SP1746	根固め石						
	SP1747	根固め石						
	SP1748	根固め石						
	SP1754	根固め石						
	SP1764	石						
	SP1769	礎盤						
	SP1774	石						
	SP1778	礎盤・根固め石						
	SP1779	根固め石						

※柱根は遺存状況の良い径100cm前後以上のものを計測した。

7　古代河川跡（第33・34図）

今調査で古代の遺構は、調査区北端のＳＧ1773河川跡より南側には遺構は希薄で、風倒木やピットが単発的に検出されたのみである。最も明確に古代の遺物が出土した河川跡を概述する。

ＳＧ1773河川跡　調査区北端部の５区・５区新・17区の下層で検出され、Ｇ～Ｋ－１～５グリッドにある。河川跡は、東西方向に走行し、両岸が確認された17区での河川幅は約23mを測る。17区南の近世遺構検出面から河床までの深さは約1.5mを測り、現地表面からは約2.5mを測る。河川の主体は、５区新・17区で、５区は現宅地排水路を残して調査したため河川南岸の一部を確認したに留まる。また、河川の主体部である５区（１次）と17区（２次）も、現道や現水路直下の深掘りのため安全に配慮してトレンチ的な調査に限定された。なお、層序は、両区が仮設道路幅の確保などから隣接して調査できず、区毎に付し本稿でも踏襲した。

５区新　５区新では、近世遺構の調査後に小トレンチを設け、古代の遺物が明確に出土する層準を確認し、近世整地層（Ｆ３）と下位の基本的に無遺物の中世～古代包含層（Ｆ４・５：有機物層）を重機や人力により除去し、古代の遺物が散見されるＦ６～９層の一部を主に精査した。特にＦ６層の岸の緩やかな立ち上がりの北西角からは須恵器の甕片（ＲＰ871）が集中して出土した。他に単発的に須恵器の坏類が僅かに出土した。しかし、その下位は、東・西壁付近など部分的にＦ10～12層（洪水砂層）まで確認し、概ね河川幅の南北両岸の緩やかな立ち上がりを検出した。

17区　17区では、17区南の近世遺構検出面のＧ～Ｉ－５グリッドで南岸、17区北の近世整地層（Ｆ１）を外したⅣ層上面のＧ～Ｈ－１グリッドで北岸を確認した。近世遺構精査後、最初に調査区東の現道の崩落を防ぎ、古代の遺物の出土する層準と深さを確認するため、重機と人力による深掘りトレンチ（東トレンチ）を行い、概ね９層に大別した。

最下～下層　その結果、下位から順に主体的な層準を概観すれば、最下層の大形の粘土塊を含む洪水による粗砂層（Ｆ９）が河川幅全域に堆積し、上面から縄文土器片（中期）や石器が僅かに出土した。次に両岸際の堆積層（Ｆ８）を間層に挟み下層の洪水による中～細砂層（Ｆ７）が河川両岸側を主に堆積し、若干古代の遺物が出土する。

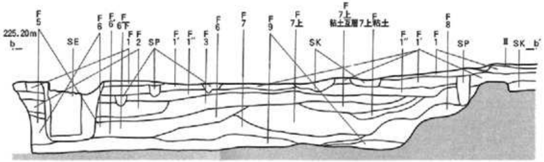
中層　中層は徐々に河川幅が狭くなり、大きく２時期に流路が変遷する。河川南岸（Ｆ５～６：河川幅約18m）と北岸（Ｆ７上：河川幅約５m）に分層され、前者が後者を切る。両者は各覆土内に洪水砂層や停滞したシルト層、両者の互層などが確認され、更に細分が可能であった。出土遺物からは、一定の出土集中域も窺え、小河川の岸際から多く分布が認められ、この時期が概ね飛鳥～奈良時代頃と考えられる。

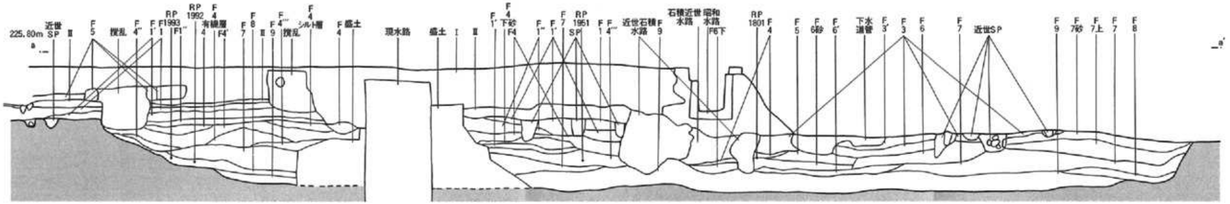
上層　上層（Ｆ４）は有機物を多く含み、緩やかな堆積を示し、この時期にはほぼ河川が埋没し泥炭状になり低地化する。最上層（Ｆ１～３）は、出土遺物が少なく時期の判断に窮するが、少なくとも炭化物を多く含むＦ１は遺物から近世初頭と考えられ、低地状の続部を整地平坦化し、近世の遺構面として利用するようである。

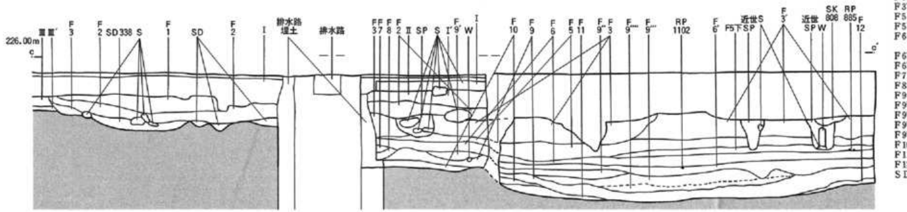
なお、５区新と17区の層準は、単純に一様でないが、層毎の特徴や高さなどから有機物層が主体の５区新のＦ５層と17区Ｆ４層、洪水砂層とシルト層の互層を主とする５区新Ｆ６～９と17区Ｆ６～７層に対応すると判断された。

17区中央トレンチ西壁・17区北半西壁土層断面（ＳＧ1773古代河川跡）

Ⅰ　10YR6/6明黄褐色礫（現表土。宅地基礎。高畠石や礫を含む。）
Ⅱ　10YR3/2黒褐色微砂（焼土塊か。炭を含む。）
F1　10YR3/2黒褐色微砂（整地炭層。焼土粒、炭化粒を多く含む。かたくしまる。）
F1′　10YR3/2黒褐色砂質シルト（F1下位層。炭化粒を含み、地山粒を含む。焼土粒を微量に含む。しまる。F1よりシルト質で、炭、焼土等少ない単純層。）
F1″　10YR3/2黒褐色シルト（F1′下位層。炭化粒を若干含み、焼土粒微量に含む。ややしまる。F1′より粘質で炭粒少ない。）
F2　10YR3/1黒褐色シルト（下位に有機物、木片を多く含む。）
F3　10YR4/2灰黄褐色シルト（F6とF7の上位層。10YR6/4にぶい黄橙色地山砂を紋状又は斑に若干含み、ややしまる。底面付近は粘質化し、有機物若干含む。F4か。）
F4　10YR3/2黒褐色粘質シルト（有機物層。有機物を多く含み、やわらかい。F3とF5の間層として入る。）
F4′　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト（有機物を若干含む。）
F4有機層　10YR5/4にぶい黄褐色中砂（有機物を非常に多く含み、やわらかい。）
F4″　10YR3/2黒褐色粘質シルト（F4と類似。F4より粘質。）
F4‴　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト（F4′と砂の互層。上位にF4′、下位にF4′と細砂の互層。）
F4下砂　10YR5/4にぶい黄褐色中砂（17区南のF4有機物層と類似。有機物を多く含み、やわらかい。）
F5　10YR6/3にぶい黄橙色中砂（新河川。砂層。3〜5cm大の小礫を多く含み、主に下位に10YR3/2黒褐色シルトを縞状に含む。やわらかい。）
F6　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト（10YR6/4にぶい黄橙色地山砂を縞状又は斑に含み、ややややわらかい。）
F6砂　10YR5/2灰黄褐色中砂（砂層。2〜3cm大の小礫を微量に含み、下位に10YR3/2黒褐色シルトを縞状に若干含む。やわらかい。）
F6下　10YR4/1褐灰色砂質シルト（有機物、木片を若干含み、砂を微量に含む。F6、F6砂より砂を含まず、単純層。やわらかい。部分的F6の下部か。）
F6′　10YR5/2灰黄褐色中砂（砂層。10YR3/2黒褐色シルト20〜30cm大の塊を紋状又は斑に含む。ややややわらかい。）
F7上粘土互層　10YR4/1褐灰色粘質シルトと10YR6/4にぶい黄橙色細砂の互層（旧河川。細砂の間に厚さ3〜5cmの粘質シルト層を厚く挟む。東壁で厚く堆積。同質のシルトを縞状に含む。ややしまる。）
F7上粘土　10YR3/1黒褐色粘質シルト（遺物を含み、F7上10YR4/1褐灰色シルトと10YR6/4にぶい黄橙色中砂の互層。シルト層は縞状に4回以上含む。木片を含む。岸にかけて、砂がシルト化し、斜位に縞状又は斑に含む。やわらかい。）
F7　10YR6/4にぶい黄橙色中粗砂（砂層。2〜3cm大の小礫を多く含み、下位に粗砂〜小礫を縞状に含む。やわらかい。）
F8　10YR4/1褐灰色シルトと10YR6/4にぶい黄橙色細砂の互層（シルト層を縞状に斜位に多く含む。岸側で同シルトを不整に斑状又は縞状に含み、3〜5cm大の小礫群を若干含む。やわらかい。）
F9　10YR6/6明黄褐色粗砂（10YR6/1褐灰色粘土塊、10YR3/1粘質シルト塊を斑に含む。）







5区東壁・新5区トレンチ東壁土層断面（合成：古代河川跡）

Ⅰ　10YR3/2黒褐色微砂（表土。高畠石や礫を含む。）
Ⅱ　10YR3/2黒褐色微砂（焼土、炭、地山塊を多く含み、しまる。）
F1　10YR3/2黒褐色微砂（整地層。焼土、炭を含み、しまる。）
F2　10YR3/2黒褐色微砂（F1と類似。F1より礫少なく斑に含む。）
F3　10YR3/2黒褐色砂質シルト（F1に類似。F1より礫少なく、シルト質。小礫、炭を含み、焼土粒微量に含む。しまる。）
F3′　10YR5/1褐灰色砂質シルト（地山粒、炭粒を微量に含み、3より色調明るい。混入物少なく純粋層。上位に炭粒を含み粘質。）
F5　10YR3/2黒褐色粘質シルト（有機物層。）
F5下　10YR3/2黒褐色粘質シルト（F5との間に砂層を挟む。上より有機物やや多い。）
F6　10YR7/1灰白色細砂（洪水層。遺物微量に含み、F9を若干斑に含む。汚れている。木片による撹乱と砂を紋状に含む。木を含む。）
F6′　10YR7/1灰白色細砂（F9との互層。砂細くなりF9を斑に含む。）
F6″　10YR7/1灰白色細砂（砂を多く縞状に含む。）
F7　10YR3/2黒褐色粘質シルト（砂と有機物を含む。）
F8　10YR3/2黒褐色粘質シルト（F7より粘質土の量が多い。）
F9　10YR3/2黒褐色粘質シルト（有機物、遺物含む。やわらかい。粗砂を斜位に斑に少量含む。やわらかい。）
F9′　10YR6/1褐灰色粘質シルト（有機物を含みやわらかい。）
F9″　10YR6/1褐灰色粗砂（F6を斑に多く含む。）
F9‴　10YR7/1灰白色粗砂（F6を斑に含み、F9″との間にシルト層を含む。）
F9⁗　10YR7/1灰白色粗砂（F9‴と類似。F9‴より明るい。）
F10　10YR7/1灰白色砂礫（F10塊斑に少量含む。河床礫か。）
F11　10YR3/2黒褐色粘質シルト（有機物を多く含み、地山砂を縞状に若干含む。やわらかい。）
F12　10YR3/2黒褐色砂礫（F11と類似。3〜5cm大の礫を多く含む。）
SD338
10YR3/2黒褐色微砂（地山砂・塊を含み、ややしまる。）

0　4m
1：80

第34図　ＳＧ1773古代河川跡土層断面図

第33図　ＳＧ1773古代河川跡

V 出土遺物

1・2次調査では、油脂箱で約200箱の遺物が出土したが、大半は柱根などが多く、中・近世陶磁器は約40箱である。他に同時期の漆器や下駄などの木製品、キセルや火鉢道具、古銭などの金属製品、砥石や硯、石鉢、石臼、板碑などの石製品などがある。他に古代の須恵器や土師器、木製品、自然木が出土した。以下に近世と古代に分け概述する。

1 中～近世陶磁器（第35～47図）

中～近世陶磁器は、今調査の主体的な時期で、全体に近世に所属するものが多いが、戦国や室町時代に遡る中世遺物も一定量認められる。また、一部幕末～近代にかかるものもある。

両者をまとめ、二次的な大火による被熱を受けて判断が難しいものもあるが、胎土や釉薬、形態などの相違から、産地や種別毎に主なものを記す。

（1）珠洲系陶器 今調査の中世の古い段階のものに珠洲系陶器壺（43－9）がある。体部片で外面タタキ、内面に4cm大の円状のアテ痕を有する。13～15世紀代である。

（2）土師質土器 内面に把手を有する内耳土鍋（47－10）がある。破片だが図上復元で径約26cm内外である。16世紀代を前後する時期と考えられる。

（3）瀬戸・美濃系陶器 瀬戸・美濃系陶器（志野焼含む）には、中世後葉～近世初頭の大窯期と近世初頭以降の登窯期がある。

大窯期のものは、全体に黄緑色の釉が厚く高台が短い、折縁皿（39－17、41－8、44－12）や丸皿（40－13・20、43－5）の皿類が多く、43－5は見込みに印花文がある。また、天目茶碗（43－2・12）や徳利（39－21）も認められる。志野焼では、全体に釉が厚く、皿（39－13、40－19、43－10・17）が主である。39－13は輪ドチ痕があり、40－2は足が付く所謂皿志野の向付と考えられる。全体に16世紀代を主とする。

登窯期のものは、香炉類（39－5、42－10）や天目茶碗（44－13）がある。志野焼も全体に釉が薄く、皿（40－12、43－7、44－4）がある。17世紀後半～18世紀代と推測される。

（4）中国産染付磁器（青花）・青磁 中国産染付磁器は、高台の形態や文様などから区別し、染付磁器は、端反の皿（39－22）や碗（40－17）などが多い。唐草文（39－22、41－14、44－16、45－1、46－15）や植物文（35－17、40－17、44－5）が多い。破片で文様不明（40－11、43－4・13、45－2）もある。44－5は色絵で朱色や黄色で植物文を描く碗である。景徳鎮や漳州窯産と考えられる。青磁では、龍泉窯と推測される碗（40－1）や蓮弁文（35－12）のものもある。両者の時期は、一部青磁に15世紀代に遡るもの（40－1）もあるが、全体に16世紀代後半から17世紀初頭頃のものと考えられる。

胎土目・砂目

（5）肥前系陶器（唐津） 碗や皿類が主体を占める。特に古相の見込みや高台に胎土目（35－7・20、40－18、42－1、45－14）や砂目（40－14・24、41－22、43－19、45－11～13）が付着する。近年の大橋康二氏などの研究による編年（大橋康二『肥前陶磁』1993ニューサイエンス社・九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』2000）のⅠ・Ⅱ期で、16世紀末～17世紀前半で

ある。香茶碗（40－3）片も当期頃の所産であろう。

他の皿（45－14）や碗類（35－9、40－3・14、41－3・7、42－9・17）などは大橋編年Ⅲ・Ⅳ期頃の17世紀後半～18世紀後葉頃のものと推測される。

（6）肥前系染付磁器　調査区内で主体的な肥前系染付は、皿や碗類が多く、鉢、徳利、猪口、汽車などがあり、全体に江戸時代中～後期のものが多い。大橋編年などに照らせば、古相の江戸時代前期（大橋編年Ⅱ～Ⅲ期：1610～1690年）と考えられるものは、口径に比して高台径が小さい皿（40－27、41－2・19、43－1、45－3、47－5）などが推測される。一部花唐草文や一重網目文（35－11・13、41－20）も前葉であろう。　古相

新相の江戸時代中～後期（大橋編年Ⅳ～Ⅴ期：1690～1860年）は、皿類で、一部古相も考えられるが、見込みに蛇の目状の釉剥ぎ（35－21、39－3、40－5、41－5・23、42－18、46－13）や、蛇の目凹形高台（36－6、37－3、45－5、46－13、47－2）のものが多い。特に45－6、47－1・3などは見込み部が厚く、後述くらわんか手のものである。文様では、見込みにはコンニャク印判を用いた五弁花（39－9、45－6、47－1・3）、内面文様に墨弾き（41－21、45－6）を用いるもの、目跡が残る（45－7）などがあげられる。　新相

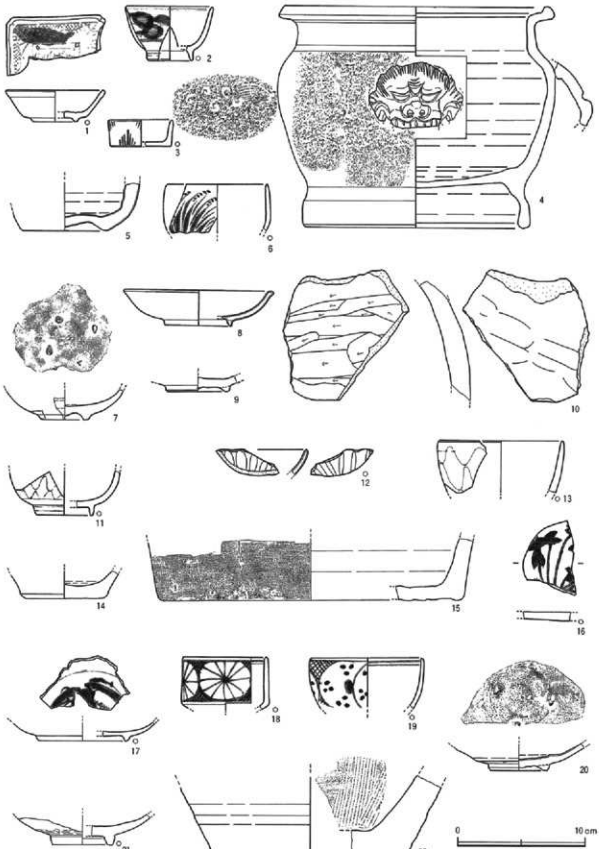
碗類では、所謂くらわんかと称される見込みが厚手のもの（36－9、39－14・19、41－10・17、44－18・19・21、46－10）が多く、梅文（36－9、44－19・21）、二重網目文（44－18、46－10）などが多い。44－20は広東碗である。徳利の蛸唐草文（37－4、38－13）なども一般に新相の文様形態である。

（7）戸長里産陶器　戸長里窯は、山形県米沢市内にある江戸時代前期初頭頃の在地窯とされ、自然釉の鉢（35－5）や擂鉢（35－22、36－2・3、44－10、47－8）などがある。全体に器厚が厚く、卸目は8～12条で粗い。47－8は縦の卸目の他に横位に波状に卸目が付く。16世紀末～17世紀初頭頃の所産と考えられる。

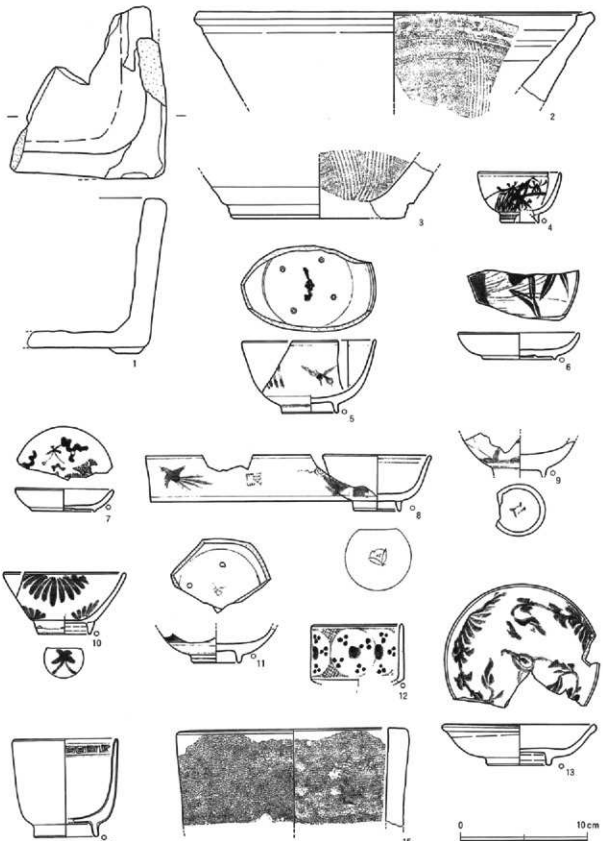
（8）岸産陶器　岸窯は、福島県福島市内の江戸時代前期中葉（正保年間）頃の窯跡とされ、鉄釉を主とする擂鉢（39－4、40－15、41－6・9・12、42－6・11、43－3・8・21、44－1・3、46－8、47－7）や香炉（45－18、46－16・17）などが出土した。擂鉢は、口縁部や体部は薄手だが、卸目は6～9条前後と少なく粗い。41－6は、底部外面周辺に指圧痕が残る。全体に17世紀後半～18世紀前半頃と推測される。粗い卸目の擂鉢（44－14）、瓶（46－3）、皿（39－25）なども岸産と考えられるが、窯資料では判然とせず新相と推測される。

（9）大堀相馬（焼）産陶器　大堀相馬窯は、福島県浪江町内の江戸時代前期末葉（元禄年間）の創業とされる窯跡で、胎土が全体に硬質で、黄灰色や淡緑色の灰釉、鉄釉の碗類（40－10・25、42－7、45－8・9、47－9・13）、小碗（42－2）、鉢（42－4）、蓋（37－16）などが認められた。碗類では、全体に丸碗で器厚が薄く、釉が貫入するものが多い。45－8、47－13は体部下半沈線を廻らす腰錆碗様である。47－9は見込みに水金走馬文、外面に水金繋馬文が貼り付けされ、高台内に相馬印がおされる。42－4や37－16は外面に飛び跳を施すものである。概ね18～19世紀代と考えられる。

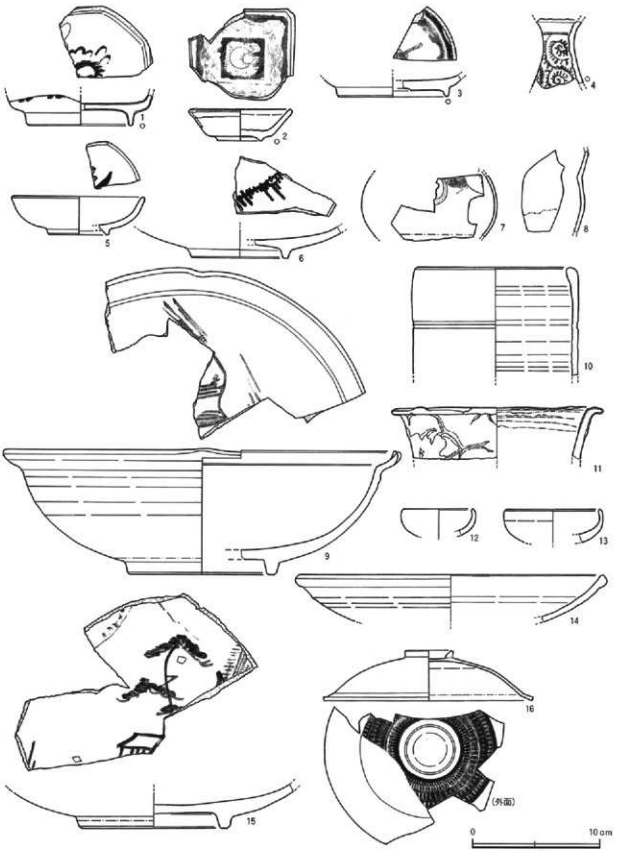
（10）会津本郷（焼）産陶器　会津本郷窯は、福島県浪江町内の江戸時代前期中葉（正保年間）創業の窯跡で、灰釉の鉢（42－8）、皿（47－12）、や鉄・海鼠釉の鉢（40－26、42－12）、瓶（40－23）、擂鉢（40－6、42－21）などがあげられる。全体に幕末を含む江戸時代後期を前



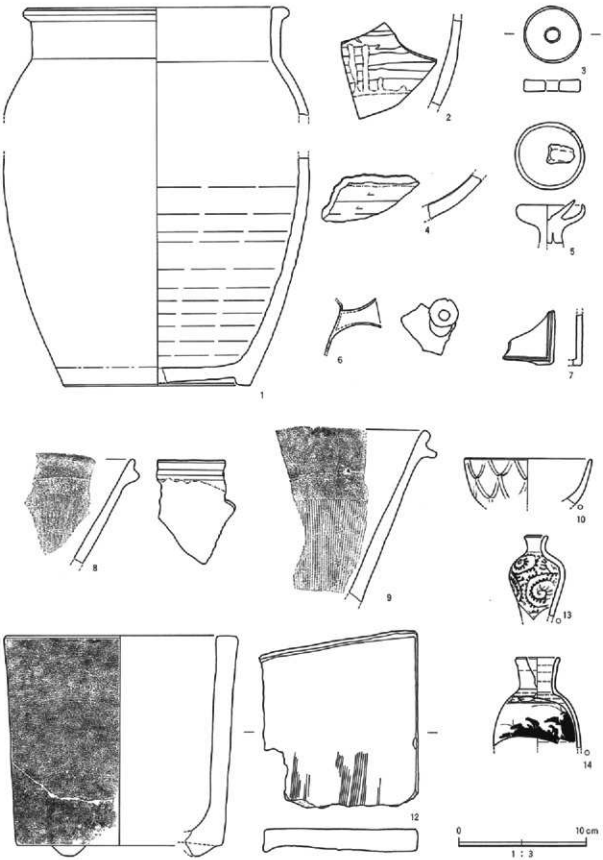
第35図　近世陶磁器（1）



第36図　近世陶磁器（2）

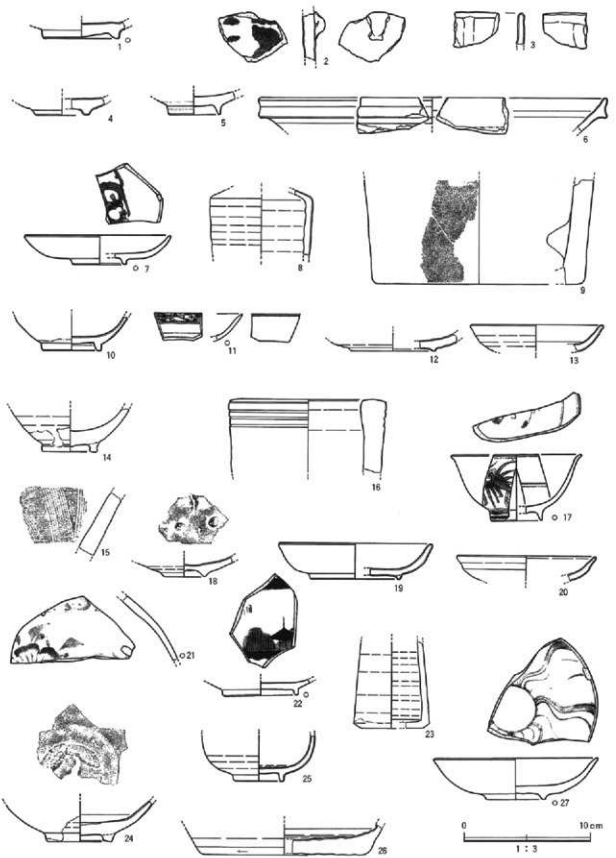


第37図　近世陶磁器（3）

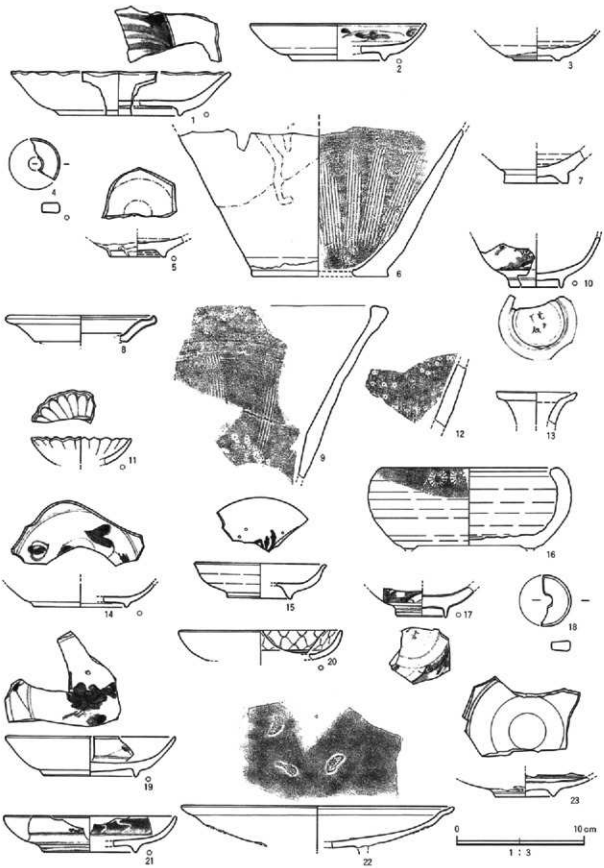


第38図　近世陶磁器（4）

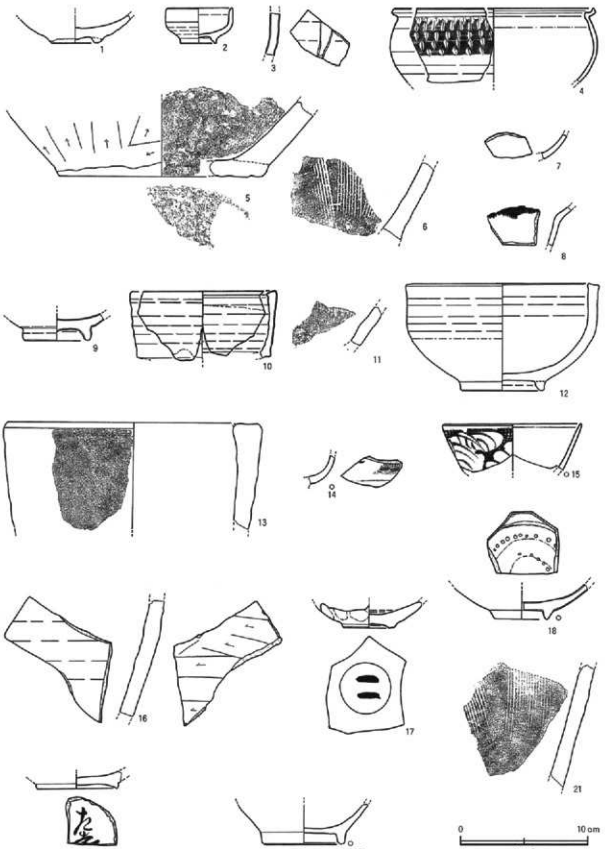
第39図　近世陶磁器（5）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
25
24
26
0
10cm
1：3

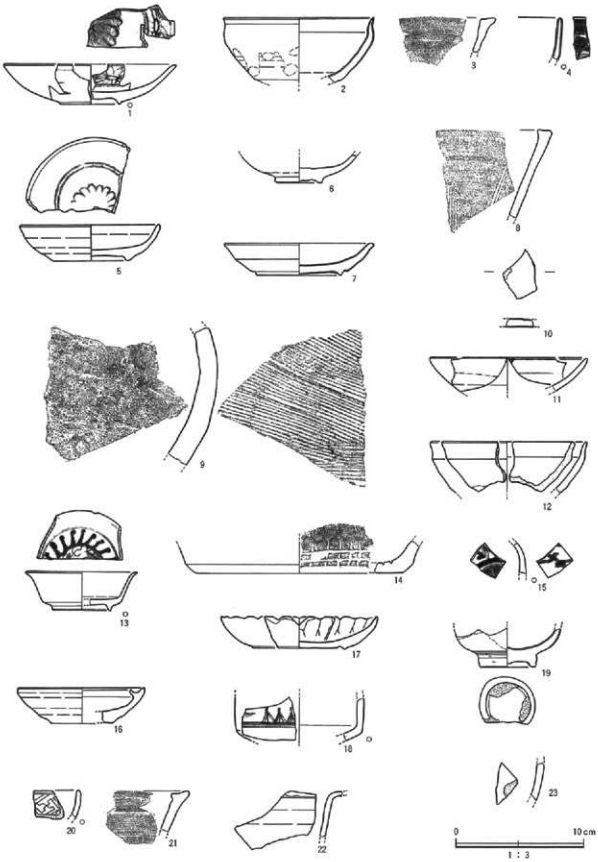
第40図　近世陶磁器（6）



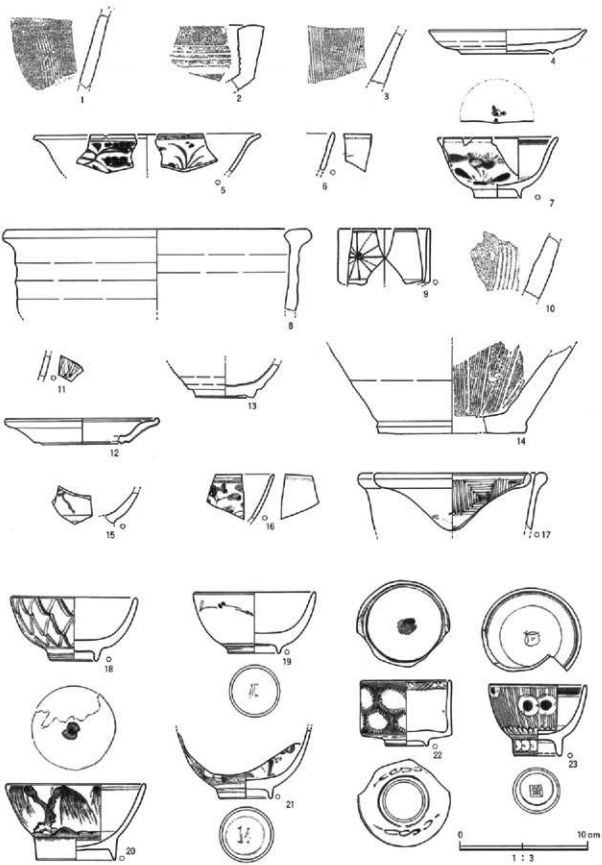
第41図　近世陶磁器（7）



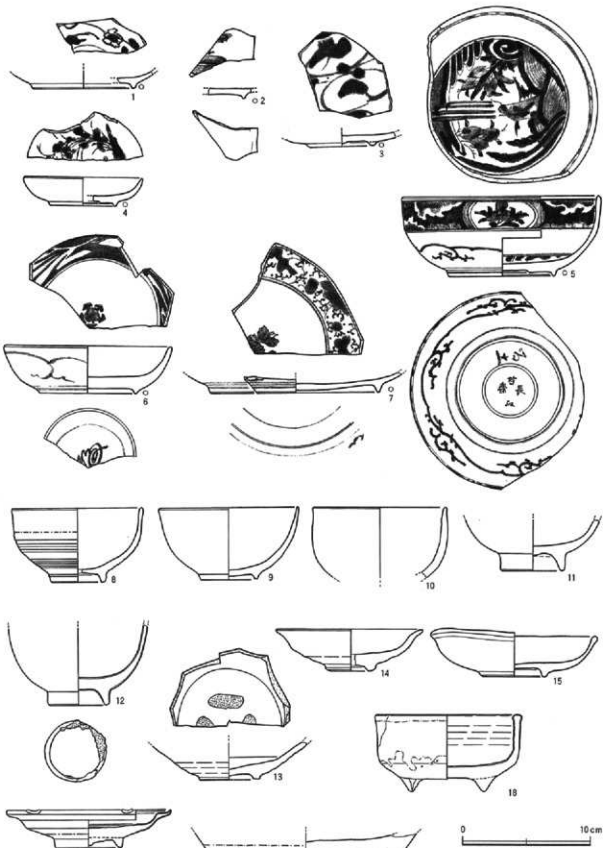
第42図　近世陶磁器（8）



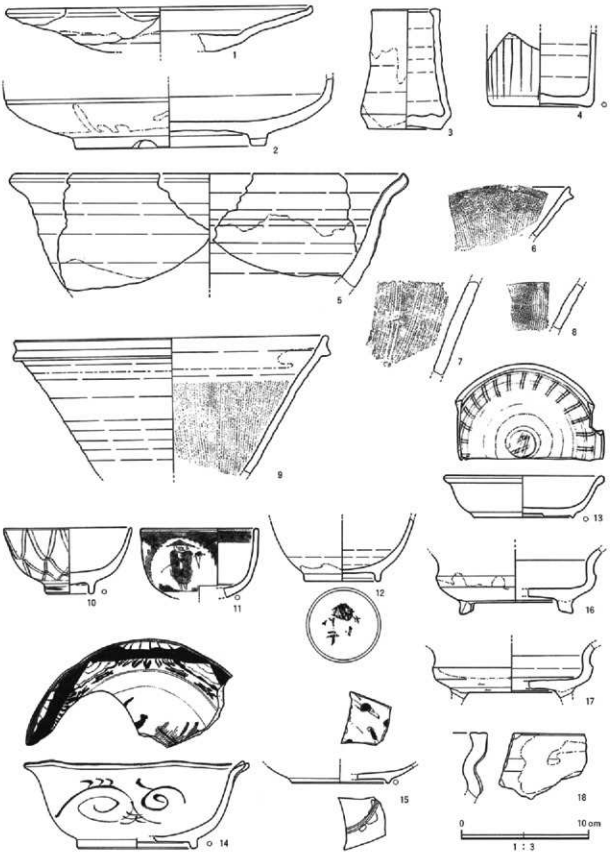
第43図　近世陶磁器（9）



第44図　近世陶磁器（10）



第45図　近世陶磁器（11）



第46図 近世陶磁器（12）

第47図　近世陶磁器（13）

後する19世紀代と考えられる。

(11) 成島（焼）産陶器　成島窯は、山形県米沢市内の江戸時代中期末葉（安永年間）に創業された在地窯で、黒釉や鉄釉、海鼠釉を主とする甕（38－1、44－8）、擂鉢（38－8・9、46－6・9）、大鉢（46－2）、鉢（47－11）、筒形の鉢（37－10、39－2）、灯明皿（37－12、38－5）などの器種がある。38－1の大甕はやや肩が張る。擂鉢は、全体に薄手で卸目が密で、卸目上端が直線状に整えられる。江戸時代後期～幕末期の18世紀末～19世紀代と考えられる。

(12) 瀬戸・美濃系染付磁器　瀬戸・美濃系の染付磁器で、江戸時代後期初頭に生産が始まる碗（36－14、44－7）がある。全体に胎土が白く呉須が明るい。19世紀代であろう。

(13) 在地染付磁器　肥前系や瀬戸・美濃系以外の在地産と考えられる染付磁器をまとめた。碗（36－5・10、39－11）・皿（35－1、36－7・13、37－2、39－1・6、43－20）が主で、4個の目跡を持つものが多い。近世末～近代の19世紀以降の所産であろう。

(14) 瓦質土器　瓦質土器には、火鉢が主に認められた。35－4は、体部に獣面把手、側面に線刻文、地文に細線状の型押しである。41－16は口縁外面に印花を連続して付す。なお、筒型・箱型の火鉢（35－4、41－16、36－1、38－1・12、40－9）なども多い。他に43－14は、底部付近に格子目状の刻み目を施す。供伴遺物から近世末～近代である。

(15) 産地不明の陶器　産地不明の陶器類では、灰釉主体のもの、鉄釉主体のもの、灰釉に鉄絵を描くもの（37－5・6・9・15、40－7、41－15）などがある。

他に京焼風の急須（37－7）、所謂瓷器系陶器甕（42－5、47－4・6）、備前焼と考えられる赤褐色のもの（35－10、42－16）、硬質の陶器製の急須（38－6）、瓶（38－7）などがある。全体に近世～近代のものである。

2　中～近世の木製品（第48～50図）

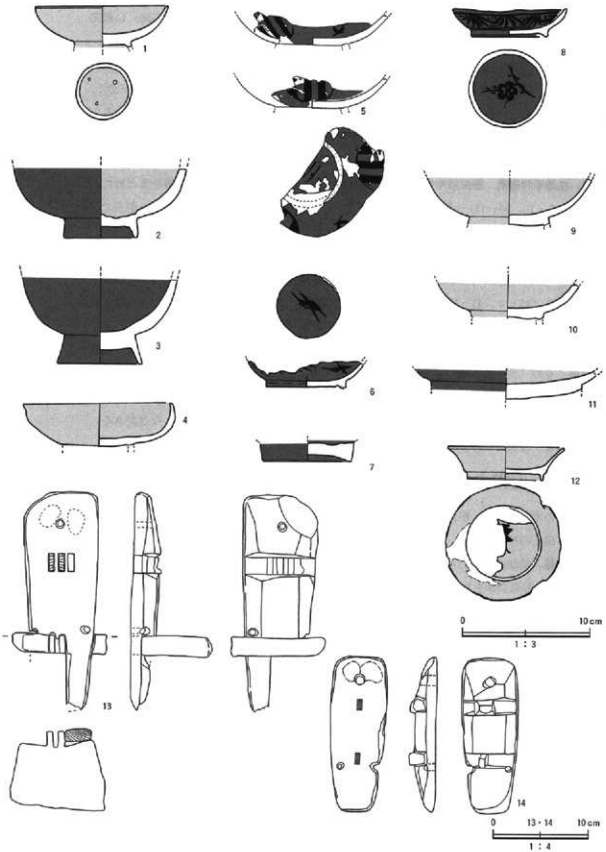
中近世の木製品では、漆器や下駄、柱根、木組遺構、木樋、桶、曲物などがある。大半は、柱穴から出土の柱根である。

（1）**漆器**（第48図1～12）　漆器は、椀・皿類が中心である。破片や土圧による歪みのあるものが多く、器形全体を知れるものは少ないが、高台の見込みが厚く高い椀（48－2・3・9・10）などが一定量ある。ほぼ全ての椀が、内外面を赤色・黒色漆を施され、内外面赤色漆（48－1・4・9・10・12）、内外面黒色漆（48－3・5・6・7・8）、外面黒色内面赤色漆（48－2・11）などがある。一部は外面や見込み、高台内に文様を描くもの（48－5・6・8・12）もある。48－5は外面の黒色漆地に赤色漆で伊達氏の家紋である三引両文が描かれる。文様の配置から三引両文は3個描かれると考えられ、その間に意匠不明の文様が小さく描かれる。高台内にも線状の文様が描かれる。48－8は外面に植物文、高台内に篦文を描く。48－6は外面なども意匠不明の文様を描く。

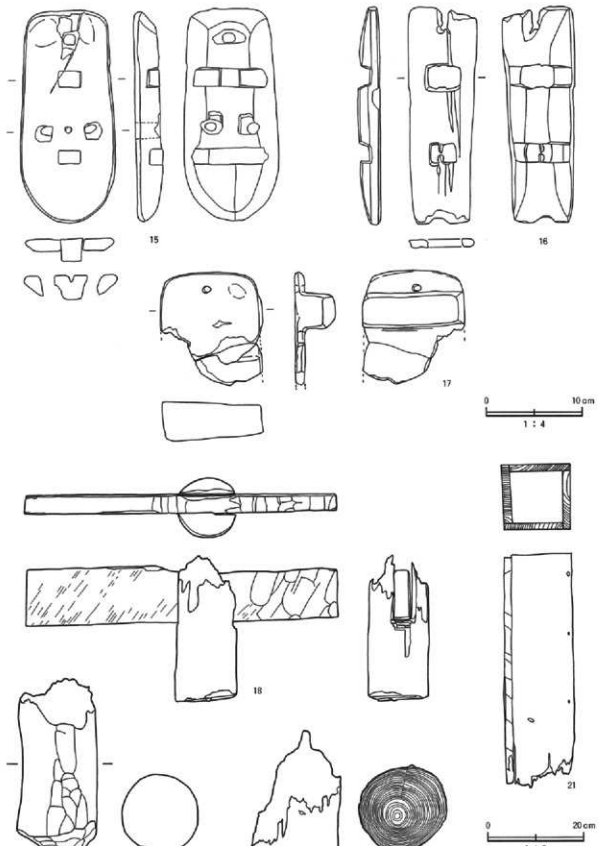
伊達氏家紋の三引両文のある漆器

材種は、ブナ属が多い。塗膜調査からは下地や顔料が、柿渋（膠着材）・木炭粉（混和材）で顔料ベンガラを用いるもの（48－1・4～6・8・10・11）、漆（膠着材）・砥の粉（混和材）で顔料朱を用いるもの（48－9）、漆（膠着材）・木炭粉（混和材）で顔料に朱を用いるもの（48－12）に分けられた。

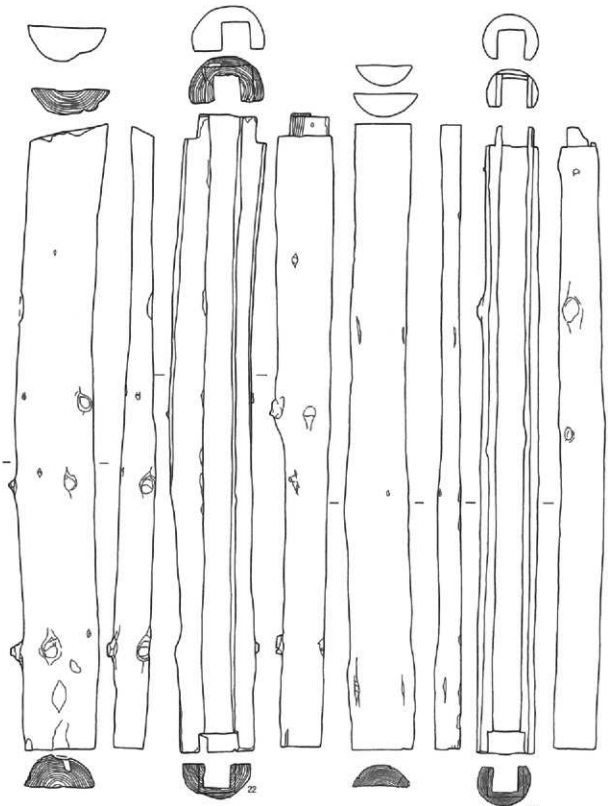
時期的には、概ね供伴する陶磁器などから概ね近世と判断されるが、48－5や48－12は、遺



第48図　木製品（1）



第49図 木製品（2）



第50図 木製品（3）

構の重複関係などから中世まで遡る可能性がある。

（2）下駄（第48・49図）　下駄では、露卯下駄、連歯下駄などが出土し、全体に露卯下駄が多く、長さ23cm前後の大形品と、長さ16cmほど小形品がある。露卯下駄では歯を台に付けるほぞ穴が、前3穴後2穴（48－13・49－16）、前後とも1穴（48－14、49－15）のものがある。49－17は連歯下駄である。材種は、広葉樹のモクレン属（48－13・49－15・16）などで、一般に針葉樹より湿気や乾燥に強く加工し易い。時期は供伴遺物等から全体に近世代である。

（3）橋脚・柱根（第49図）　橋脚（49－18）は、ＳＰ1203から出土し、柱根上部は朽ちるが、直径約13cm前後の柱根の下部中央に、縦約10cm、幅約3cmのほぞ穴を開け、長さ約66cmの横板を差し込み、柱根の倒壊を防ぐ特異な構造である。材種は、両者ともスギ材である。

一般的な柱穴出土の柱根は、朽ちた表皮や痩せた基部しか残らないものも多いが、遺存状況が良いもので直径約15～20cmを測り、一部下部に加工を施すもの（49－19）、図示はしないが柱根の周囲を4～8面に面取りするもの（表4）などが確認された。材種は、全体にスギ材やマツ（アカマツ）材が多い。出土遺物からは近世～近代の段階のものが多い。

（4）木組遺構（第49図21）　木組遺構として想設された旗指し状の木組みである。4枚の長さ約64cm以上、幅約14cm、厚さ約1．5cmの長方形の板材を方形に釘で組む木組である。材種は、スギ材である。調査区では、他に6基ほど同様の木組遺構が確認され、1基に1～2個の木組を埋設する。最も長い木組みで約90cmを測るものもある。全体に幕末前後と考えられる。

（5）木樋（第50図22～23）　木樋は、上水を遠距離に運ぶため丸太などを利用した木製の樋で、今調査では概ね8本が繋がって出土したが、部分的に近現代の攪乱で破壊を受ける。完品では、水を溜めた桶に接続などする南側の2本の遺存状況が良好であった。

50－22（最南端）・23（50－22北側）は、全体に直径約18～26cm内外、長さ約2ｍ前後に丸太を裁断して利用する。丸太木口の上部を約1／3で切断し蓋にする。下部の本体には、中央部を幅約9cm四方の溝を掘り込み、断面方形の樋状にしている。丸太の両端は、それぞれ長さ10cm前後で凹凸の加工が施され、丸太同士の繋ぎ目強化や水漏れ防止の工夫がなされる。なお、外面（表皮）は、加工しないため木の節が部分的に残る。材種は、50－22・23はマツ属（アカマツ：50－23）で、他の木樋も表皮などから同様の樹種が推測された。アカマツは、一般に針葉樹の中では硬化で腐れにくい樹種とされ、上水施設には適していたのかもしれない。遺構の重複関係や出土遺物から江戸時代末葉頃の所産と考えている。

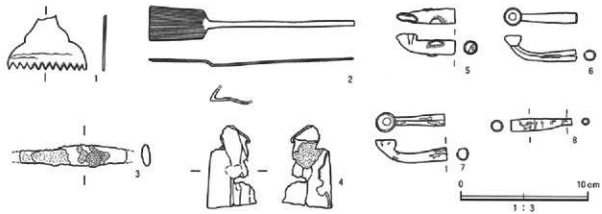
3　中～近世の金属製品（第51図）

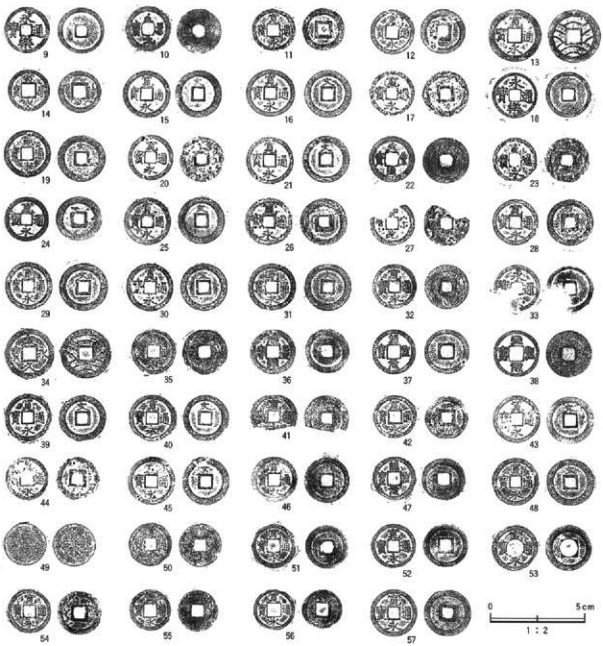
中近世の金属製品では、刀子や釘などの鉄製品、キセルや灰ならし等の火鉢関連の道具、古銭などの銅製品がある。

（1）鉄製品　鉄製品では、錆膨れが著しい刀子（51－3）がある。

（2）銅製品　銅製品ではキセル（51－5～8）や灰ならし（51－1・2）、性格不明品（51－4）などがある。キセルは鍍金するものや鍔など線刻するものがある。51－1～5は、焼土を含む遺構からの出土で幕末から近代にかけての所産である。

（3）古銭　104点が出土し、主なものでは、宋銭などの中国銭や永楽通寶など初鋳年が中世に遡るものもあるが、近世の寛永通寶が圧倒的に多く、一部近代のものも出土した。


1
2
3
4
5
6
7
8
0
10cm
1 : 3


9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
0
5cm
1 : 2

第51図 金属製品

中国銭は、宋銭の「至道元寶」(初鋳995年：51－10)、「天聖元寶」(初鋳1023年：51－38)、「元豊通寶」(初鋳1078年：51－22・36)、「紹聖元寶」(初鋳1094年：51－37・47)、「聖宋元寶」(初鋳1101年：51－27) などがある。日本銭では、中世の「永楽通寶」(初鋳1408年：51－9・18) があり、近世では「寛永通寶」が多く、他に「文久永寶」がある。寛永通寶は、近世後半のものが多いが、最古相の所謂「古寛永」(初鋳1636年) や、裏面に「文」字を鋳出する文銭 (初鋳1668年) と称されるものなど近世前半期も一定量ある。51－13や近世末の文久永寶 (51－34) は裏面に波文をもつ。なお、10区の近現代の撹乱精査時に一括出土したRM205は、16枚の古銭が付着し、聖宋元寶1枚、寛永通寶15枚 (裏面「文」5枚) で、銭サシの可能性もある。

4　中～近世の石製品 (第52・53図)

中・近世の石製品では、砥石、硯、石臼、石鉢、戸車、板碑などがある。

(1) 砥石　砥石 (52－1～7) は、欠損品もあるが長さ約7cm前後、幅約3～5cm大の中砥が多い。2～4面の擦り面を持つ。泥岩や流紋岩が多い。

(2) 硯　硯 (52－8) は、先端欠損し陸部の角のみ残存する。長さ3.6cm以上、幅2.2cm以上、高さ2.7cmを測る。泥岩製である。

(3) 石臼　石臼 (52－9・11) は、両者とも上臼である。52－9は直径約30cm、高さ約8cmの平面円形である。52－11は長さ26cm、高さ12.5cmの平面8角形である。両者は側面に径約2.5cmの挽木孔、上面に径約2.5cmの軸受孔などが穿たれる。凝灰岩製である。

(4) 石鉢　石鉢は表面に凹部を持つもつものを石鉢として一括した。直径約10cm前後の小形品 (52－10・13) と、直径約20cmの大形品 (52－12) がある。全体に大形品は、凹部の掘り込みが大きく深く、小形品は小さく浅い傾向が認められる。凝灰岩や砂岩製が多い。

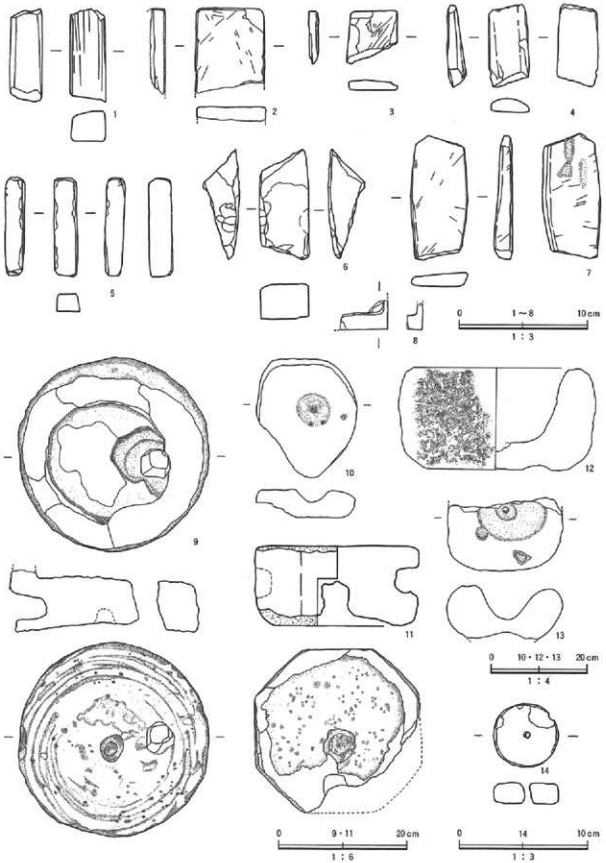
(5) 戸車　石製の戸車 (52－14) は、直径約5cm、厚さ約1.8cmを測る。中央に径1.5mm程の孔を穿つ。砂岩製である。

(6) 板碑　板碑は、近世水路への廃棄、近世水路の石積みに転用されるなどして、欠損や摩滅が著しい。凝灰岩製が多く、大形品と小形品があり、主なものを記す。

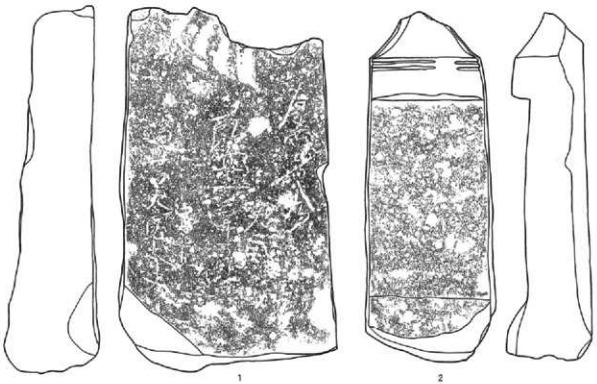
中世板碑

53－1は、大形の板碑の下部である。調査終了後の本工事の際に、町教育委員会がSD1702近世水路底面の東壁から取り上げ、保管して頂いたものである。上半部を欠損すが、全体に長方形で、長さ約1.15m以上、幅約68cmを測る。厚さは、上部で約19cmを測り、下部にかけて緩やかに厚くなり、下端で約30cmである。碑面には、正面中央に梵字キリーク (阿弥陀如来) の下部が残り、その下に「弘安七季甲大歳申」(1284年) が刻まれ、室町時代の構築年代と推測される。また、右側には造立主旨の「右志者為□□」、左側には偈文と考えられる「過去□□□也」が刻まれる。凝灰岩製である。

53－2も、SD1702近世水路の石積みに転用されていたもので、長さ1.11m、幅40cm、厚さ20cmを測る長大なものである。頭部を山型とし、額部の突帯上部に、摩滅が著しいが二条線を配置する。碑面は、摩滅して不明で、凝灰岩製である。53－3は、小形の板碑で、下部を欠損する。長さ46cm以上、幅27cm前後、厚さ12cmほどである。碑面は摩滅が著しく不明だが、頭部を山型とし、額部の突起などの遺存状況は一部良好である。凝灰岩製である。


1
2
3
4
5
6
7
8
0　1～8　10cm
1：3
9
10
11
12
13
0　10・12・13　20cm
1：4
14
0　9・11　20cm
1：6
0　14　10cm
1：3

第52図　石製品



第53図　板碑

5　縄文時代・古代の出土遺物（第54～58図）

古代の出土遺物は、調査区北端（17・5区）の古代のＳＧ1773河川跡を主に須恵器や土師器などの土器や木製品、自然木が出土した。他に調査区中央の近世水路などで古代の土器が若干出土した。

今調査では、県内で調査例の少ない飛鳥時代の土器群が出土した事が注目された。具体的には、「須恵器の坏は、県内では希少な飛鳥時代に遡るであろう口径に比して器高が低い坏や有段坏がある。土師器坏は、有段丸底が主で口縁部が外反・外傾（住社式期）～内湾（国分寺下層式期）する。一部には口縁部に粘土紐痕を残すものや、底部調整が一般的なケズリでなくハケメ調整を施すものがある。甕や鉢では、土師器では頸部などに沈線を施すものが多く、口縁部が内傾などの特異な形態がある。須恵器の甕では口縁部に複数の平行沈線間に櫛描波状文が施され装飾性が高い」などの特徴をもつ土器群である。

古代河川の主体的な調査が可能であった17区を主に、上層から主な遺物相を概観する。

17区Ｆ１層とした近世整地層から底径が４cm前後と小さい赤焼土器坏（54－12：東壁際）が出土し、最も新相の土器群の一端で、遺物自体は９世紀後半～10世紀初頭頃であろう。

Ｆ３層は、遺物が少ないが、逆台形の須恵器坏（54－１）が出土し、口径15cm、底径8.5cm、器高４cm代を測る。高径指数（口径／器高×100）は26.6である。底部切り離しはヘラ切である。同層から須恵器捏鉢（55－８）や土師器坏（54－18）などが出土する。55－８は底径約11cmである。54－18は丸底の椀状を呈する土師器坏で、体部下半をケズリ、体部上半の粘土紐痕をナデなどで整える。体部下半のケズリなどから祖形は有段丸底の坏と考えられ、明瞭な段の消滅から東北南部の土師器編年の所謂国分寺下層式期（８世紀代）の古～新段階に移行する時期であろう。遺物が少なく窮するが、８世紀後葉～９世紀前半としておく。

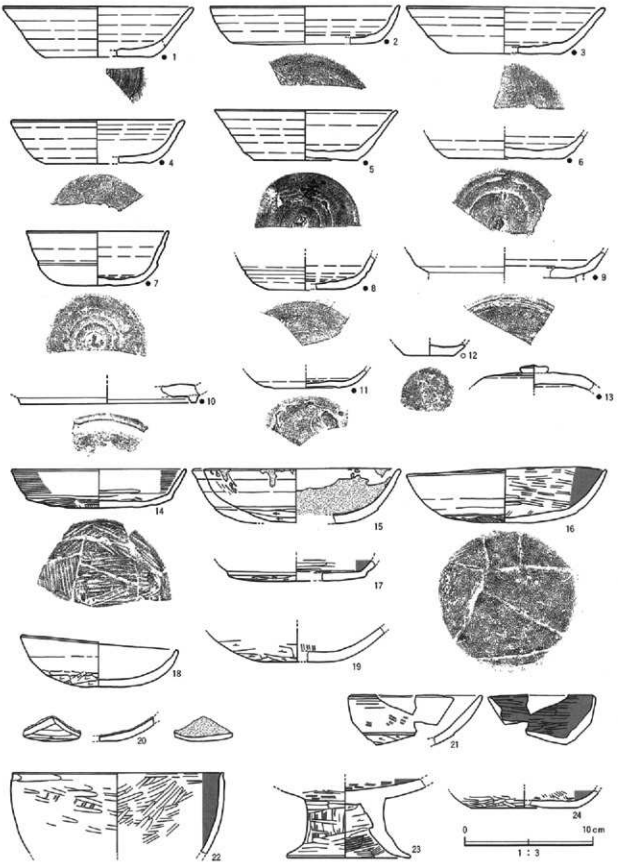
Ｆ４～６層（河川南側～中央）は、上位Ｆ３層、下位Ｆ７層に挟まれる砂とシルトの互層で、旧小河川のＦ７上層（河川北側）を切る段階である。須恵器甕などの接合状況からまとめた。

須恵器坏は、Ｆ５層で逆台形（54－３・５）、Ｆ６層でやや箱形（54－４）を呈するものがある。両者とも口径は14～14.5cmとほぼ同等である。しかし、Ｆ５層の54－５は器高約４cmで上層のＦ３層（54－１）に近似し、54－３は器高3.7cmとやや低く底径は９cm大とやや大きい。高径指数は27.7（54－５）、25.5（54－３）である。一方、Ｆ６層の54－４は、器高3.5cmを切り、高径指数は24.6で、全体に口径に比して器高が低く底径が大きい特徴がある。これによりＦ５層は、Ｆ３層とＦ６層の中間的様相を示すと考えられ、特に54－３は器高の低下と底径の増大などＦ６層（54－４）に近く、その系譜が窺える。54－５の底部に「若」墨書される。

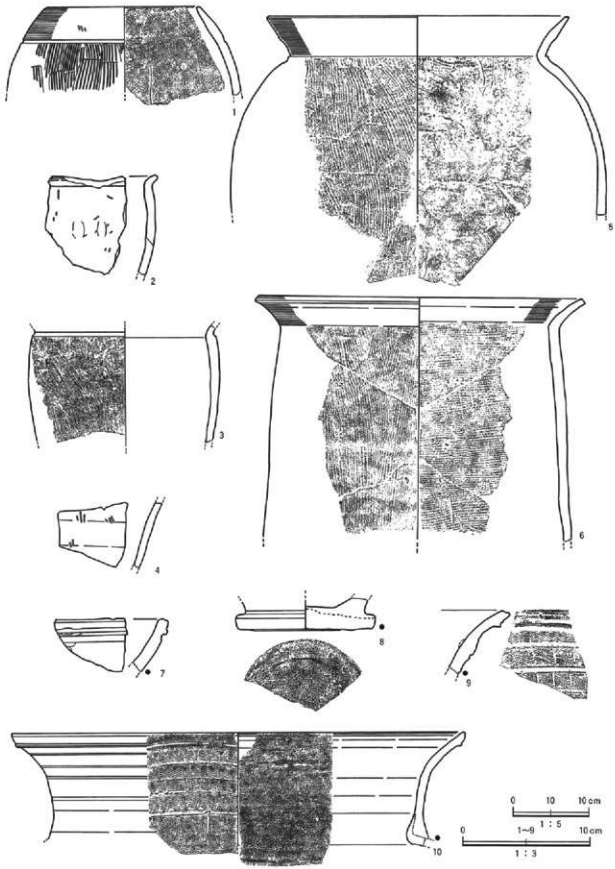
同層の土師器坏類は、前代からの有段丸底で国分寺下層式期の古段階（54－20・21）、無段平底で内外面ミガキを施す新段階（54－22）などがある。54－20は内面に漆が付着する。

Ｆ５層からは、須恵器の甕（55－10、56－１）や土師器の甕（55－５・６）なども出土する。56－１は口径45cmの甕で、口縁部に緩やかで不規則な櫛描波状文を有する。55－10は口径60cm前後の大甕で、口縁部に平行沈線で４段に区画した中に各々櫛描波状文を施す。

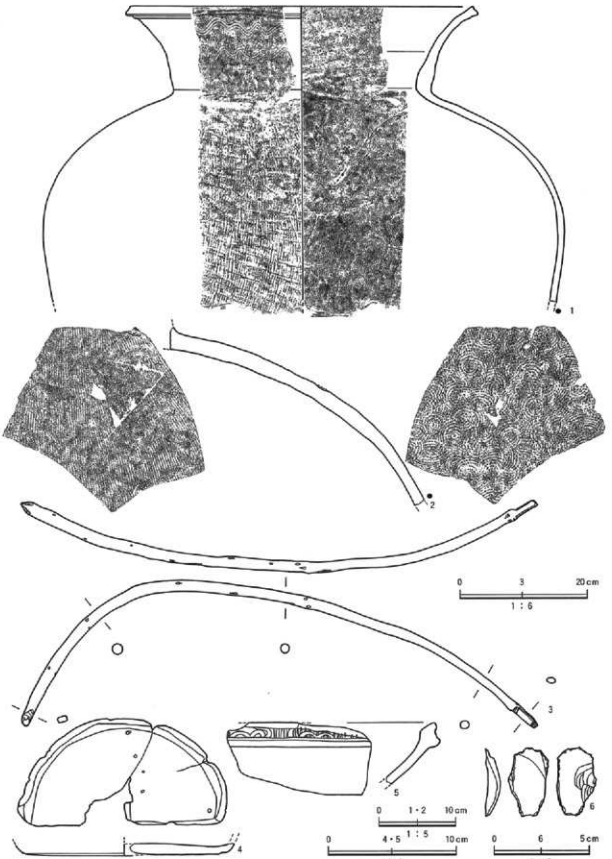
土師器甕の55－６は口径26cm前後の長胴甕で、やや寸胴で胴部下端が膨らむ前代に通有の形態と推測される。外面縦ハケメ、内面横ハケメを施す。55－５はくの字口縁で胴部球形の甕で



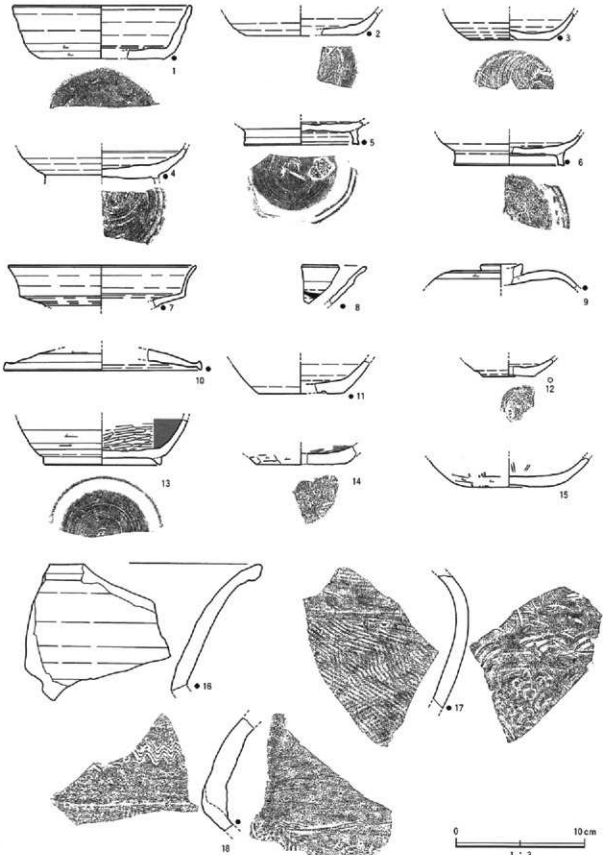
第54図　古代土器（1）



第55図　古代土器（2）



第56図　古代土器（3）



第57図　古代土器（4）

ある。口径23.5cm程で外面横位、内面横位のハケメを施す。他にＦ６層では、両面黒色漆の盤（56－４）や、長さ81cmで両端を凸状に加工する弓状製品（56－３）などの木製品も出土する。時期はＦ５層が８世紀中～後葉、Ｆ６層が８世紀前～中葉頃と判断される。

Ｆ４～６層に切られる、それ以前の小河川Ｆ７上層は、17区東壁際より土師器坏（54－14・16）がほぼ一括して出土する。両者とも有段丸底だが、54－14は口縁部がやや外反し、古相の様相を呈する。外面口縁部は横ナデ、底部はやや幅広のハケメ調整と考えられる。54－16は口縁部が内湾し、国分寺下層の古段階の範疇と捉えられる。外面口縁部は横ナデなどの調整はあまり認められず粘土紐痕が明瞭に残る。底部は54－14と同様のやや目の細かいハケメ調整である。時期的には７世紀末～８世紀前葉頃であろう。

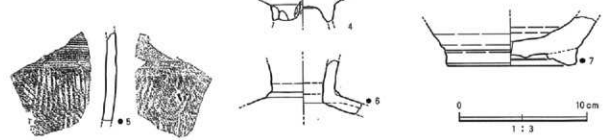
河川の下位層として広がるＦ７層では、須恵器坏（54－２・11）、同有段坏（54－８）や土師器の高坏（54－23）、鉢・甕（55－１・３）などが出土する。54－２の須恵器坏は、口径15cm弱、底径12cm前後、器高が約３cmで、高径指数は22.4である。上層の54－４より高径指数が低下し、口径に比して器高が著しく低く底径が大きい。54－８は有段で体部下位に段を持つ。これらは、近年、本遺跡と同じ高畠町の高安窯跡からも同形態の坏類が出土している。

土師器鉢の55－１は、体部から緩やかに内湾し口縁部に至る。口縁部との境に沈線を設け、口縁部は横ナデ、体部は縦ハケメを施す。55－３はくの字口縁の小形甕と考えられるが55－１と同様に頸部に沈線を設ける。54－23は脚部が太く短く、内面黒色処理される。時期的には、上記の高安窯跡とほぼ同時期として７世紀末～８世紀初頭頃としておきたい。

最後にＦ９層からは、縄文時代中期中葉の大木８ａ式頃の浅鉢（56－５）や図示はしないが石器片が出土した。河川の最下層が縄文時代に遡る可能性がある。

他に５区では、底部小径で回転糸の須恵器坏（57－３・11）や赤焼土器坏（57－12）の新相も認められる。一方、須恵器坏では、全体に逆台形で底部切り離しはヘラ切が主体で、高台付坏では、底径９cm前後の大振りなもの（57－４）がある。土師器高台付坏（57－13）も外面ケズリ調整でやや古相を示す。口縁部付近に段を有する須恵器坏（57－８）も出土した。

河川以外では、調査区の近世水路などから若干出土し、脚部と坏部の境に刺突孔を入れる土師器高坏（58－４）なども出土したが、時期的には17区を外れるものはない。



第58図　古代土器（５）

表5　中～近世陶磁器観察表

挿図	番号	種別	器種	産地	地区	出土地点	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	外面	内面	釉薬外面色調（内面）	遺物番号	図版	備考
35	1	磁器染付	角皿	在地	1	SX410	(80)	(36)	25		見込植物文か・目跡4か	7.5Y8 1灰白	RP408		
	2	磁器染付	小碗	肥前	1	SX410	(68)	(34)	43	文様不明	界線	7.5GY8 1明緑灰 2PB3 5藍色	RP409		
	3	磁器染付	紅皿	肥前	1	SX410	(51)	(48)	21.5	文様不明		5GY8 1灰白 1PB5 4.5サックスブルー	RP407		スス付着
	4	土器	火鉢	瓦質	1	SX410	216	178	175	型押文様（細線）・獣面把手・線刻文・印刻文	ロクロ	2.5Y5 1黄灰	RP462・431・442・443・449・454・459・460		
	5	陶器	鉢	戸長里	1	SX417		68	(38)	灰釉	灰釉・ロクロ	10YR2 2黒褐	RP416	28	
	6	磁器染付	碗	肥前	1	SK418	(78)		(36)	稲束文		2.5GY8 1灰白 1PB5 4.5サックスブルー	RP418		
	7	陶器	碗	唐津	1	SK418		37	(24)	灰釉	灰釉・胎土目	5Y6 2灰オリーブ	RP419	28	
	8	陶器	皿	不明	1	SK418	(118)	(53)	28	灰釉	灰釉	7.5Y6 1灰	RP417		
	9	陶器	碗	唐津	1	SP449		48	(12)		灰釉	2.5Y5 2暗灰黄		28	
	10	陶器	甕	備前	1	SD470			(95)		ケズリ	2.5YR5 2灰赤	RP434	28	
	11	磁器染付	碗	肥前	1	SP476		(46)	(36)	一重網目文		7.5GY8 1明緑灰 2PB3 5藍色	RP455	28	
	12	青磁	皿	中国	1	SP489			(20)	蓮弁文	蓮弁文	7.5GY7 1明緑灰		28	輪花
	13	磁器染付	碗	肥前	1	SP495	(100)		(41)	一重網目文		5GY8 1灰白 1PB5 4.5サックスブルー		28	
	14	陶器	鉢	不明	1	SP907		70	(22)		ロクロ	N3 暗灰	RP455		
	15	陶器	甕	不明	1	SP956		(240)	(49)		ロクロ	5YR5 3にぶい赤褐	RP451	28	
	16	磁器染付		肥前	1	南壁			(7)		植物文	N8 灰白 5PB3 10紺瑠璃	RP470		
	17	磁器染付	皿	中国	1	東壁		(70)	(16)		植物文	5GY8 1灰白 2PB3 5藍色	RP467	28	
	18	磁器染付	碗	肥前	1	西壁	(68)		(41)	菊花文	界線	2.5GY8 1灰白 2PB3 5藍色	RP465		
	19	磁器染付	碗	肥前	1	表土1・II層	(90)		(40)	雪輪文	界線	2.5GY8 1灰白 7.5B2 3褐返し			
	20	陶器	碗	唐津	1	西壁		44	(21)	灰釉	灰釉・胎土目	7.5Y5 2灰オリーブ	RP464	28	
	21	磁器染付	皿	肥前	1	東壁		(48)	(19)		見込蛇ノ目釉剥ぎ	10GY8 1明緑灰	RP471	28	スス付着
	22	陶器	擂鉢	戸長里	1	表土・1・II層		(154)	(63)	灰釉	灰釉・卸目12条	7.5YR4 2灰褐		28	
36	1	土器	火鉢	瓦質	1	東壁			123			5YR6 6橙	RP473		
	2	陶器	擂鉢	戸長里	1	表土	(310)		(71.5)	灰釉	灰釉・卸目	7.5YR4 2灰褐		28	
	3	陶器	擂鉢	戸長里	1	表土		(138)	(45)		卸目8条	5YR3 1黒褐		28	
	4	磁器染付	碗	肥前	2	SX2205F	(64)	(29)	40	草花文		5GY8 1灰白 2PB3 5藍色	RP2220	28	
	5	磁器染付	碗	在地	2	SX2205Y	(105)	44	57	文様不明	界線・目跡4	2.5GY8 1灰白 2.5PB2.5 5インジゴ	RP2217	28	
	6	磁器染付	皿	肥前	2	SX2205	(93)	56	21	蛇の目凹高台（底部）	植物文	2.5GY8 1灰白 2PB5.5 5.5浅縹			
	7	磁器染付	皿	在地	2	SX2205	(77)	(48)	18	蛇の目凹高台（底部）	文様不明　目跡4か	7.5Y8 1灰白 2.5PB2.5 5インジゴ	RP2279 （実測見接合）	28	
	8	磁器染付	碗	肥前	2	SX2205	(87)	37	44	鳥文・文様不明	虫文	5GY8 1灰白 5.5PB6.9 5想思鼠	RP2257	28	
	9	磁器染付	碗	肥前	2	SX2205F		(40)	(31)	草花文・大明年製銘（底部）		7.5B7.5 0.5スカイグレー 5GY8 1灰白（内面）	RP2223	29	くらわんか
	10	磁器染付	碗	在地	2	SX2205Y	(97)	(42)	48.5	割菊花文	見込虫文	2.5GY8 1灰白 5.5PB6.9 5想思鼠	RP2264	29	
	11	磁器染付	碗	在地	2	SX2205		(38)	(26)	界線・文様不明	界線・文様不明 目跡	2.5GY8 1灰白 5PB3 10紺瑠璃	RP2254	29	
	12	磁器染付	碗	肥前	2	SX2205	(74)		(46)	雪輪文	界線	2.5GY8 1灰白 2PB3 5藍色	RP2204	29	
	13	磁器染付	皿	在地	2	SX2205	(122)	(51)	32		花唐草文・目跡4	5Y8 1灰白 5.5PB6.9 5想思鼠	RP2225		
	14	磁器染付	碗	瀬戸美濃	2	SX2205	(82)	(48)	77		雷文	5PB3.5 9ブルシャンブルー 10GY8 1明緑灰（内面）			登窯期
	15	土器	火鉢	瓦質	2	SX2205Y	(184)		(78)		指頭痕、指ナデ	5YR5 3にぶい赤褐	RP2229		
37	1	磁器染付	皿	肥前	2	SX2205F		(80)	(35)	色絵・文様不明	見込文様不明	N8 灰白 10G7 2.5千草色 5PB3 4紺青	RP2268	29	
	2	磁器染付	角皿	在地	2	SX2205	(81)	35.5	25.5		目跡・型打青海波文 他文様不明	7.5Y8 1灰白 2.5PB2.5 5インジゴ			
	3	磁器染付	皿	肥前	2	SX2205		(85)	(15)	蛇の目凹高台（底部）	文様不明	2.5GY8 1灰白 5PB2.5 2藍鉄色			19C前半
	4	磁器染付	徳利	肥前	2	SX2205			(53)	蛸唐草文		10BG7 1明青灰 2.5PB5.5 5.5薄花色	RP2236	29	
	5	陶器	皿	不明	2	SX2205	(106)	(48)	30	灰釉	灰釉・鉄釉・鉄絵・文様不明	5Y7 1灰白			
	6	陶器	皿	不明	2	SX2205		(76)	(12)	灰釉	灰釉・鉄釉・鉄絵	5Y6 2灰オリーブ	RP2216	29	

挿図	番号	種別	器種	産地	地区	出土地点	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	外面	内面	釉薬外面色調（内面）	遺物番号	図版	備考
37	7	陶器	急須	京焼	2	SX2205			(48)	灰釉・色絵（緑色）		2.5Y8 4淡黄		29	
	8	陶器	鉢	不明	2	SX2205Y			(63)	鉄釉	鉄釉	10YR1.7 1黒	RP2249		伝器
	9	陶器	鉢	不明	2	SX2205Y	(312)	(115)	98	灰釉	灰釉・鉄釉・鉄絵	10Y6 1灰	RP2241, 2270	29	
	10	陶器	鉢	成島	2	SX2205Y	(120)		(86)	鉄釉・沈線2条	鉄釉	10YR4 2灰黄褐	RP2217		
	11	陶器	鉢	不明	2	SX2205F	(166)		(41)	灰釉	灰釉	2.5Y5 4黄褐 2.5Y8 1灰白（内面）	RP2219	29	
	12	陶器	灯明皿	成島	2	SX2205	(52)		(21)	鉄釉	鉄釉	7.5YR1.7 1黒			
	13	陶器	灯明皿	不明	2	SX2205	(74)		(26)	鉄釉	鉄釉	5Y2 1黒			
	14	陶器	鉢	不明	2	SX2205	(246)		(39)	灰釉	灰釉	5Y8 1灰白			
	15	陶器	皿	不明	2	SX2205		(116)	(34)	灰釉	灰釉・鉄釉・鉄絵・目跡・山水文	10Y6 1灰	RP2271, 2259	29	
	16	陶器	甕	相馬	2	SX2205	(166)		40	灰釉・鉄釉・飛び鉋	灰釉	7.5Y3 1オリーブ黒 7.5Y7 1灰白（内面）	RP2233・2273接合	29	
38	1	陶器	甕	成島	2	SX2205 北壁	(220)	(145)		鉄釉	鉄釉・目跡	7.5Y2 1黒	RP2269, 2265, 2271, 2218, 2243	29	
	2	陶器	鉢	唐津	2	SX2205Y			(67.5)	灰釉		2.5Y8 2灰白 10R2 1赤黒（内面）	RP2248	29	
	3	陶器	戸車	肥前	2	SX2205	44		9.8			2.5GY8 1灰白		29	
	4	陶器	鉢	不明	2	SX2205Y			(36)	鉄釉	灰釉	5Y5 2灰オリーブ	RP2256		
	5	陶器	灯明皿	成島	2	SX2205Y	48		(31)	鉄釉	鉄釉	10YR1.7 1黒	RP2242	29	
	6	陶器	急須	不明	2N	SX2205			(38)			10Y2 1黒		29	伝器
	7	陶器	瓶	不明	2N	SX2205			(40)	沈線2条		5Y2 1黒			伝器
	8	陶器	擂鉢	成島	2	SX2205			(83)	灰釉	灰釉・卸目	5Y3 2オリーブ黒			
	9	陶器	擂鉢	成島	2	SX2205			(140)	灰釉	灰釉・卸目	5YR3 3暗赤褐	RP2244	30	
	10	磁器染付	碗	肥前	2	SD2271	(100)		(36.5)	二重網目文		2.5GY8 1灰白 2PB3 5藍色		30	
	11	土器	火鉢	瓦質	2	SX2205Y・II層	(184)	(162)	174			5Y3 2オリーブ黒	RP2255	30	筒型
	12	土器	火鉢	瓦質	2	SX2205Y	(141)	(125)	18			7.5Y6 1灰	RP2266	30	盤型
	13	磁器染付	瓶	肥前	2	北壁	18		(65)	蛸唐草文		10GY8 1明緑灰 2.5PB5.5 5.5薄花色		30	
	14	磁器染付	徳利	肥前	2	北壁 SX2205	(34)		(71)	植物文		2.5GY8 1灰白 5PB2.5 2藍鉄色	RP2214	30	
39	1	磁器染付	皿	在地	3	SX4	(96)	(46)	20		型打唐草文・目跡	10Y8 1灰白 5.5PB6.9 5勿忘草			
	2	陶器	火鉢	成島	3	SX6		(100)	(31.5)	鉄釉	鉄釉	5Y2 1黒		30	
	3	磁器染付	皿	肥前	3	SK9		39	(21.5)		見込蛇ノ目釉剥ぎ	2.5GY8 1灰白	RP5	30	
	4	陶器	擂鉢	岸	3	SK9			(52)	鉄釉	鉄釉・卸目	7.5YR3 2黒褐	RP22		
	5	陶器	香炉	瀬戸美濃	3	SK9	(120)	(110)	60	灰釉	灰釉	2.5Y4 4オリーブ褐	RP20	30	底部に墨書あり・登窯6期
	6	磁器染付	皿	在地	3	SX24	(87)	50	20	蛇の目凹高台，口紅	目跡4（見込）	2.5GY8 1灰白	RP8		
	7	磁器染付	徳利	肥前	3	SX24		63	(19)	界線		N8 灰白 3PB4 7.5紺色			近代か
	8	磁器染付	碗	肥前	3	SX24	(90)	(36)	54	雪輪文		5GY8 1灰白 5B3 7マリンブルー	RP19	30	V期
	9	磁器染付	皿	肥前	3	SX25F	(140)	(82)	45	唐草文・大明銘（高台）	見込五弁花・花唐草文	5GY8 1灰白 1PB5 4.5サックスブルー	RP9	30	18C前
	10	磁器染付	碗	肥前	3	SX25			(38)	植物文		7.5GY8 1明緑灰 7.5B2 3褐返し	RP16		18C後
	11	磁器染付	碗	在地	3	SX25F	(104)	(44)	55	植物文	界線・目跡	5Y8 2灰白 2.5PB2.5 5インジゴ	RP10	30	19C～江戸末
	12	磁器染付	蓋	肥前	3	SX25	68		19.5	雨降り文・蝙蝠文		2.5GY8 1灰白 1PB5 4.5サックスブルー	RP11	30	内面スス付着
	13	陶器	皿	志野	3	SX25	112	(66)	17	灰釉・胎土目・輪ドチ痕	灰釉	7.5Y8 1灰白	RP12		大窯期
	14	磁器染付	碗	肥前	3	SK30		(46)	(23)	文様不明		5GY8 1灰白 1PB5 4.5サックスブルー	RP28	30	くらわんか
	15	土器	鍋	瓦質	3	SD31		(95)	(42)			N2 黒	RP33	30	スス付着
	16	磁器染付	皿	肥前	3	X.O.	(138)		(30)		花唐文	N8 灰白 1PB5 4.5サックスブルー			
	17	陶器	皿	瀬戸美濃	3	E半	(116)	(56)	19	灰釉	灰釉	5Y6 2灰オリーブ		30	折縁皿・大窯8期
	18	磁器	皿	肥前	3	南壁	(112)	(60)	24	口紅	色絵・植物文	N8 灰白 3PB4 7.5群青			
	19	磁器染付	碗	肥前	3	南壁		(40)	(23)	雪輪草花文・大明年製（高台）		7.5Y8 1灰白 1.5PB5 6.5露草		30	くらわんか
	20	青磁	香炉	肥前	3	E半			(28)			7.5GY7 1明緑灰		30	

挿図	番号	種別	器種	産地	地区	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	施釉外面色調（内面）	遺物番号	図版	備考
39	21	陶器	擂鉢	瀬戸窯産	4	SX113			(109)	鉄釉	鉄釉	5YR3.4暗赤褐	RP102	31	大窯4期
	22	磁器染付	皿	中国	4	SP112	(136)	(70)	28	花唐草文	見込植物文	5GY8.1灰白 2PB5.5.5灰藍	RP116	31	端反皿
	23	磁器染付	皿	肥前	4	SP114		(80)	(15.5)	雲草文	植物文	7.5GY8.1明緑灰 5PB3.1暗灰緑	RP103	31	
	24	陶器	鉢	不明	4	SP112	(116)		(30)	鉄釉	鉄釉	10YR3.3暗褐	RP101		
	25	陶器	皿	岸小	4	SP127	(116)	(55)	27			10YR6.2灰黄褐	RP105	31	スス付着
40	1	青磁	碗	中国	4	SP113		59	(14)		見込円形沈線1条	2.5GY6.1オリーブ灰	RP106	31	
	2	陶器	向付	志野	4	SX138			(38)	灰釉	灰釉・文様不明	5YR3.1黒褐 2.5Y8.2灰白（内面）	RP117	31	足・脱土跡 ～大窯期
	3	陶器	碗	唐津	4	SP142			(24)	灰釉	灰釉	5Y5.1灰	RP109	31	唐茶碗
	4	陶器	碗	唐津	4	SX170		(40)	(14)	灰釉	灰釉・砂目	10YR5.2灰黄褐	RP119		スス付着
	5	磁器染付	碗	肥前	4	XO		(40)	(17.5)	界線	蛇の目釉剥ぎ	5GY8.1灰白 1.5PB5.6.5藍濃			
	6	陶器	擂鉢	会津本郷	5	SK313	(276)		(36.5)	灰釉	灰釉	10YR1.7.1黒			
	7	陶器	皿	不明	5	SK313	(114)	(43)	23	灰釉	灰釉・鉄絵・鉄錆	5Y6.1灰	RP310		伝器
	8	陶器	瓶	不明	5	SK313		(51)		灰釉	ロクロ	2.5Y8.1灰白			
	9	土器	火鉢	瓦質	5	SK313		(160)	(84)			7.5YR6.4にぶい橙	RP307		内部に煤粘あり
	10	陶器	碗	相馬	5	SK313		42	(28)	灰釉	灰釉	7.5Y7.2灰白	RP306	31	
	11	磁器染付	皿	中国	5	SD338			(21)		口縁櫛文	5GY8.1灰白 2PB3.5藍色	RP320		
	12	陶器	皿	志野	5	SD338		(66)	(15)	灰釉	灰釉	2.5Y7.1灰白	RP319	31	登窯期
	13	陶器	皿	瀬戸美濃	5	SD338	(105)		(21)	灰釉	灰釉	5Y7.3淡黄	RP327	31	大窯期
	14	陶器	碗	唐津	5	SD338		42	(34)	灰釉・砂目	灰釉・砂目	7.5Y4.2灰オリーブ		31	
	15	陶器	擂鉢	産	5	SD338			(50)		卸目	7.5YR6.1褐灰		31	
	16	陶器	鉢	不明	5	SD338	(120)		(58)	鉄釉 口縁沈線3条		7.5YR3.3暗褐	RP321		
	17	磁器染付	碗	中国	5	EP344上層	(103)	(42)	52.5	植物文	見込風景文か	N8.1灰白 3PB4.7.5濃色		31	
	18	陶器	皿	唐津	5	SP349		(34)	(16)		灰釉・胎土目	5Y6.1灰	RP335	31	
	19	陶器	皿	志野	5	SP348	(122)	(70)	28	灰釉	灰釉	2.5Y5.1黄灰	RP334、336と接合	31	大窯4期後半
	20	陶器	皿	瀬戸美濃	5	SG350	(110)		(20)			7.5Y8.1灰白			大窯期
	21	磁器染付	碗	肥前	5	整地層			(52)	植物文		5GY8.1灰白 2PB3.5藍色			
	22	磁器染付	皿	肥前	5	XO		(56)	(12)		山水文	2.5GY8.1灰白 2PB3.5藍色		31	
	23	陶器	鉢	会津本郷	5	XO		(49)	(66)	灰釉		2.5GY7.1明オリーブ灰		31	
	24	陶器	鉢	唐津	5	北端		(50)	(32)	灰釉	灰釉・砂目	2.5Y7.1灰白		32	
	25	陶器	碗	相馬	5	西壁中央		37	(36.5)	灰釉	灰釉	5Y7.3淡黄	RP317	32	18C
	26	陶器	壺	会津本郷	5	北側壁		(120)	(24)		鉄釉・目跡	N1.5 黒			
	27	磁器染付	皿	肥前	5	北端	(130)	(46)	32.5		菊花文	2.5GY8.1灰白 2PB3.5藍色		32	
41	1	磁器染付	皿	肥前	新5	SX801	(173)	(96)	36		色絵・植物文	2.5GY8.1灰白 5GY.1明緑灰 2.5PB2.5.5インジゴ	RP806	32	
	2	磁器染付	皿	肥前	新5	SX801	(138)	(72)	28		花唐草文	10GY8.1明緑灰 2PB3.1藍色	RP827	32	17C後半
	3	陶器	碗	唐津	新5	SX801		36	(21)	灰釉	灰釉	7.5Y4.2灰オリーブ	RP894	32	
	4	陶器	戸車	肥前	新5	SX801	(40)		7			7.5GY8.1明緑灰	RP883		
	5	陶器	皿	肥前	新5	SX802		(44)	(18)		蛇の目釉剥ぎ	2.5GY8.1灰白	RP849	32	
	6	陶器	擂鉢	岸	新5	SX802		106	(116)	鉄釉・櫛状痕	鉄釉・卸目6～8条	2.5YR4.6赤褐	RP897		
	7	陶器	碗	唐津	新5	SP811		50	(26)		灰釉	10YR6.1褐灰	RP826	32	スス付着
	8	陶器	皿	瀬戸美濃	新5	SX805下3炭土ひき	(116)		(22)	灰釉	灰釉	5Y6.4オリーブ黄		32	折接痕・大窯期
	9	陶器	擂鉢	岸	新5	SX803			(136)		卸目	2.5Y2.1黒	RP851、RP811		
	10	磁器染付	碗	肥前	新5	SP808		(42)	(39)	草花文・大明年製銘（底台）		5GY8.1灰白 2PB3.5藍色	RP852（802と接合）		くらわんか
	11	磁器染付	皿	中国	新5	SP831	(80)		(22)		菊花文	5GY8.1灰白 1.5PB5.6.5藍濃	RP857	32	
	12	陶器	擂鉢	岸	新5	SD825			(40)		卸目	5YR4.1褐灰	RP845	32	
	13	陶器	瓶	不明	新5	SD825	(63)		(26)	灰釉	灰釉	7.5Y6.1灰	RP839		

挿図	番号	種別	器種	産地	地区	出土地点	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	外　面	内　面	釉薬外面色調（内面）	遺物番号	図版	備　考
41	14	磁器染付	皿	中国	新5	SP832F3		(74)	(19)	界線	花唐草文	10GY8/1明緑灰 2PB5.5/5.5浅藍	RP860	32	
	15	陶器	皿	不明	新5	表土むき	(104)	(50)	27	灰釉	灰釉・鉄釉・鉄絵・目跡	5Y7/1灰白			
	16	土器	火鉢	瓦質	新5	表土F3	(142)	(104)	62	印花文		5Y5/1灰	RP823	32	
	17	磁器染付	碗	肥前	新5	表土F3		(40)	(24.5)	草花文か・大明年製か		2.5GY8/1灰白 2PB3/5藍色			18C中〜後・くらわんか
	18	陶器	戸車	肥前	新5	表土F2	(40)		8			2.5GY8/1灰白			
	19	磁器染付	皿	肥前	新5	表土F3	(134)	(74)	31.5		唐草文・目跡	10GY8/1明緑灰 2PB3/5藍色		32	
	20	磁器染付	皿	肥前	新5	表土F3	(130)		(23.5)		一重網目文	N7/1灰白 2.5PB5.5/5.5薄花色		32	
	21	磁器染付	皿	肥前	新5	表土F2	(136)	(76)	28.5	唐草文・界線	捻花文・墨弾き	2.5GY8/1灰白 2PB3/5藍色			
	22	陶器	皿	唐津	新5	表土F3	(216)	(80)	(34)	灰釉	灰釉・砂目	7.5Y6/1灰	RP822	32	
	23	磁器染付	皿	肥前	新5	表土F3		(46)	(16)		蛇の目釉剥ぎ・界線	N8/ 灰白 2.5GY5/1オリーブ灰		32	
42	1	陶器	碗	唐津	6,7	SP272		36	(22)	灰釉	灰釉・胎土目	5Y8/1灰白	RP709	32	
	2	陶器	小碗	相馬	8	SX611	(54)	(26)	27.5	灰釉	灰釉	7.5Y7/1灰白			
	3	陶器	甕	不明	8	SP613			(34)	鉄釉	鉄釉	2.5Y2/1黒			
	4	陶器	鉢	相馬	9	SD510	(156)		(59)	飛び鉋		7.5YR5/4にぶい褐 7.5Y7/1灰白（内面）		33	スス付着
	5	陶器	甕	瓷器系	9	SD510		(160)	(58)	ケズリ	アテ	5Y7/1灰白	RP519	33	
	6	陶器	擂鉢	岸か	9	SD510			(60)		卸目	5YR4/2灰褐	RP504		
	7	陶器	碗	相馬か	9	SD510			(26)	灰釉	灰釉	2.5Y8/3淡黄	RP505		
	8	陶器	鉢	会津本郷	9	SD510			(31)	灰釉	灰釉	5Y7/2灰白 5G3/4暗緑（内面）	RP506		
	9	陶器	碗	唐津	9	SP514		52	(21)	灰釉	灰釉	5Y8/2灰白	RP509		
	10	陶器	香炉	瀬戸美濃	9	SP519	(115)		(53)	灰釉	灰釉	2.5Y4/3オリーブ褐	RP523	33	登窯6期
	11	陶器	擂鉢	岸	9	SK522			(32)		卸目	5YR5/3にぶい赤褐	RP530		
	12	陶器	鉢	会津本郷	9	SX539	(151)	66	85	鉄釉	鉄釉・目跡3	N2/ 黒	RP534, 1527(15区)	33	
	13	土器	火鉢	瓦質	9	西壁	(200)		(85)			5YR6/4にぶい橙	RP518		
	14	磁器染付	碗	肥前	9	西壁			(24)	梅松文		7.5GY8/1明緑灰 2PB5.5/5.5浅藍	RP517		
	15	磁器染付	碗	肥前	9	北側西壁	(108)		(38)	雪花文	界線	2.5GY8/1灰白 2PB3/5藍色	RP507		
	16	陶器	甕	備前	9	水路南側西壁			(94)	ケズリ		2.5YR2/1赤黒	RP502	33	
	17	陶器	碗	唐津	9			42	(21)	灰釉	灰釉	5Y6/1灰		33	墨書「二」
	18	磁器染付	皿	肥前	2.9	SX2904		(42)	(28.5)		蛇の目釉剥ぎ・界線	2.5GY7/1明オリーブ灰 10Y4.5/0.8青鈍	RP2909	33	被熱
	19	陶器	碗	不明	2.9	SK2905 井戸枠下		(62)	(13)			5YR5/4にぶい赤褐		33	底部墨書
	20	磁器染付	碗	在地	2.9	SK2905		(66)	(31.5)			7.5Y8/1灰白	RP2919		
	21	陶器	擂鉢	会津本郷か	2.9	SK2904			(94)		卸目	2.5YR5/2灰赤	RP2912		
43	1	磁器染付	皿	肥前	2.9	SK2915	(136)	(48)	31.5	界線	菊花文	5GY7/1明オリーブ灰 5PB2.5/2藍鉄色		33	
	2	陶器	天目碗	瀬戸美濃	2.9	SP2925	(118)		(52)	鉄釉	鉄釉	7.5YR2/1黒		33	大窯4期後半スス付着
	3	陶器	擂鉢	岸か	2.9	SK2954			(25)	鉄釉	卸目	7.5YR4/2灰褐	RP2914		
	4	磁器染付	碗	中国か	2.9	SK2956			(33)		文様不明	10GY8/1明緑灰 2PB3/5藍色	RP2915		
	5	陶器	皿	瀬戸美濃	10	SD62	(110)	(60)	28.5	灰釉	灰釉・見込印花文	7.5Y7/2灰白	RP201	33	大窯3期後半
	6	陶器	碗	唐津	10	SD62		38	(22)	灰釉	灰釉	5Y6/2灰オリーブ	RP207	33	18C
	7	陶器	皿	志野	10	SD234	(117)	68	26	灰釉	灰釉	2.5Y7/2灰黄	RP222	33	登窯1期
	8	陶器	擂鉢	岸	10	SP233			(70)		卸目	2.5YR4/2灰赤	RP202	33	
	9	陶器	甕	珠洲	10	SD234			(110)	タタキ	アテ痕	5Y6/1灰	RP221		
	10	陶器	皿	志野	10	SX238			(7)	灰釉	灰釉	2.5Y8/2灰白			登窯か
	11	陶器	皿	不明	10	SX243	(123)		(26)	灰釉	灰釉・界線	7.5Y8/2灰白 7.5Y5/2灰オリーブ			
	12	陶器	天目碗	瀬戸美濃	11	SP1113	(122)		(40)	鉄釉	鉄釉	N2/ 黒		33	大窯4期前半
	13	磁器染付	皿	中国	10	XO	(88)	(46)	30.5		捻り文？	2.5GY8/1灰白 5PB2.5/2藍鉄色		33	16C末−17C初頭
	14	土器	卸皿	瓦質	10	10区中央		164	(25)		卸目（格子状）	10YR1.7/1黒		33	

挿図	番号	種別	器種	産地	地区	出土地点	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	外面	内面	釉薬外面色調（内面）	遺物番号	図版	備考
43	15	磁器染付	碗	肥前	11	SD1154			(24)	唐草文	草花文	7.5GY8 1明緑灰 2PB3 5藍色			
	16	陶器	灯明皿	不明	11	SD1156	(100)	(48)	28	鉄釉	鉄釉	10YR3 3暗褐			
	17	陶器	皿	志野	11	SK1144	(124)	(74)	24	灰釉	灰釉	2.5Y7 1灰白		34	[illegible]・大窯期
	18	磁器染付	碗	肥前	12	SD1201			(34)	文様不明	文様不明	5G7 1明緑灰 3PB4 7.5瑠色			
	19	陶器	碗	唐津	12	SP1224		(44)	(30.5)	灰釉・砂目	灰釉	5Y6 2灰オリーブ	RP1207	34	
	20	磁器染付	皿	在地	12	SD1201			(22)		型打ち[illegible]形文	7.5GY8 1明緑灰			
	21	陶器	擂鉢	岸か	12	SD1201			(32.5)	鉄釉	鉄釉・卸目	5YR3 2暗赤褐			
	22	陶器	鉢	不明	12	SK1203			(35)			5YR4 1褐灰			体部
	23	陶器	不明	不明	12	SK1203			(28)	鉄釉	鉄釉	10YR3 4暗褐	RP1202		
44	1	陶器	擂鉢	岸	13	SD1301C区			(54)		卸目8条	5YR4 4にぶい赤褐	RP1303		
	2	陶器	土管	不明	13	SD1301			(50)	鉄釉	鉄釉・平行沈線7条	10YR4 3にぶい黄褐		34	
	3	陶器	擂鉢	岸か	13	SD1302A			(42)		卸目	5YR5 2灰褐		34	
	4	陶器	皿	志野	13	SD1302A区	(126)	(74)	18.5	灰釉	灰釉	2.5Y7 2灰黄	RP1301		登窯期
	5	磁器染付	鉢	中国	13	SD1302	(182)		(28)	植物文・色絵（朱・緑）	植物文・色絵（朱・緑）	2.5GY8 1灰白 7.5R3 4暗赤	RP1314	34	
	6	磁器染付	碗	肥前	13	SD1301D区			(29)	界線・文様不明		N8 灰白 2.5PB7 6勿忘草色	RP1307		
	7	磁器染付	碗	瀬戸美濃	13	西壁	(94)	(37)	47.5	花文		2.5GY8 1灰白 2PB3 5藍色	RP1310, 1311	34	登窯10期
	8	陶器	鉢	成島	14	面整理時出土	(242)		(65)	鉄釉・海鼠釉	鉄釉・海鼠釉	5Y4 2灰オリーブ		34	
	9	磁器染付	碗	肥前	15	SG1525西壁	(70)		(44)	菊花文		N8 灰白 2PB3 5藍色	RP1522		
	10	陶器	擂鉢	戸長里	15	SD1570桶内			(49)		卸目	10YR3 1黒褐			
	11	磁器染付	碗	肥前	15	北SD1531 内木樋ジョイント			(16.5)	文様不明		7.5GY8 1明緑灰 3PB4 7.5瑠色	RP1510		
	12	陶器	皿	瀬戸美濃	15	SD1598	(120)	(66)	22	灰釉	灰釉	5Y6 3オリーブ黄	RP1535		折縁皿・大窯期16C末~17C初頭
	13	陶器	天目碗	瀬戸美濃	15	SD1598		46	(26.5)		鉄釉	10YR1.7 1黒	RP1538		登窯期
	14	陶器	擂鉢	岸	15	南側壁 [illegible]		(116)	(70.5)	鉄釉	鉄釉・卸目	7.5YR4 2灰褐	RP1517	34	
	15	磁器染付	碗	肥前	15	北			(24)	文様不明		N8 灰白 1.5PB5 6.5露草	RP1539		
	16	磁器染付	碗	中国か	16	SD1601			(35.5)	花唐草文	界線	10GY8 1明緑灰 2PB3 5藍色	RP1602		
	17	磁器染付	鉢	肥前	16	SD1612	(150)		(46)	文様不明	文様不明	2.5GY8 1灰白 2PB5.5 5.5浅縹	RP1608		
	18	磁器染付	碗	肥前	17	SD1702	(100)	39	50	二重網目文		10Y8 1灰白 1PB5 4.5サックスブルー	RP1714	34	くらわんか
	19	磁器染付	碗	肥前	17	SD1702 木管石組1段目下	(97)	43	48.5	雪輪草花文		5GY8 1灰白 2PB5.5 5.5浅縹		34	くらわんか
	20	磁器染付	碗	肥前	17	SD1702	(110)	63	60	梅文	界線・見込文様不明	5GY8 1灰白 7.5B2 3褐返し		34	広東碗
	21	磁器染付	碗	肥前	17	SD1702東一中層下		41	(53.5)	草花文・大明年製銘（高台）		5GY8 1灰白 1PB5 4.5サックスブルー	RP1791	34	くらわんか
	22	磁器染付	碗	肥前	17	SD1702東部	(72)	34	51.5	花文	斜格子文・見込花文か	7.5GY8 1明緑灰 5PB2.5 2藍鉄色	RP1778	34	
	23	磁器染付	碗	肥前	17	SD1702トレ内	(76)	36	56	雪輪文	見込虫文・界線	5GY8 1灰白 1PB5 4.5サックスブルー	RP1742		
45	1	磁器染付	皿	中国か	17	SD1702石積の下		(78)	(13.5)		花唐草文	7.5GY8 1明緑灰 2.5PB2.5 5インジゴ	RP1955	34	
	2	磁器染付	皿	中国	17	SD1702			(8)	界線	文様不明	5GY8 1灰白 2PB3 5藍色		34	
	3	磁器染付	皿	肥前	17	SD1702東一中~下層		(50)	(11)	砂目か	花唐草文	5GY8 1灰白 N-5.5灰	RP1798		
	4	磁器染付	皿	在地	17	SD1702	(93)	(52)	22.5	蛇の目凹高台（底部）	植物文・目跡	7.5Y8 1灰白 5PB2.5 2藍鉄色	RP1744		
	5	磁器染付	鉢	肥前	17	SD1702 I・II	(156)	82	63	波頭文・花文・唐草文・蛇ノ目凹形高台	波頭文・花文・[illegible]文	7.5GY8 1明緑灰 2.5PB2.5 5インジゴ	RP1711	34	墨書有り
	6	磁器染付	皿	肥前	17	SD1702	(132)	(76)	37.5	唐草文・[illegible]か（高台）	文様不明・見込五弁花・墨弾き	10Y7 1灰白 1PB5 4.5サックスブルー		34	
	7	磁器染付	皿	肥前	17	SD1702東中央撹乱		(134)	(15)	文様不明・界線・高台内目跡	花唐草文・見込草花文	2.5GY8 1灰白 2.5PB2.5 5インジゴ	RP1858	34	
	8	陶器	碗	相馬	17	SD1702	(103)	(43)	59	灰釉・鉄釉・平行沈線	灰釉	5YR2 1黒褐 5Y7 2灰白（内面）	RP1754	35	腰錆碗
	9	陶器	碗	相馬	17	SD1702東壁	(110)	(46)	57	灰釉	灰釉・目跡か	7.5Y7 2灰白		35	
	10	陶器	碗	唐津か	17	SD1702東	(106)		(56)	灰釉	灰釉	5Y7 2灰白	RP1799		
	11	陶器	碗	唐津	17	SD1702中央一中層下		51	(41)	灰釉・砂目（高台）	灰釉	10YR5 2灰黄褐	RP1790	35	17C後半
	12	陶器	碗	唐津	17	SD1702		46	(62.5)	灰釉・砂目（高台）	灰釉	2.5Y5 3黄褐	RP1777		内面スス付着

挿図	番号	種別	器種	産地	地区	出土地点	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	外面	内面	釉薬外面色調（内面）	遺物番号	図版	備考
45	13	陶器	皿	唐津	17	SD1702東		(48)	(29)	灰釉・砂目（高台）	灰釉・砂目	10YR7 1灰白	RP1802	35	
	14	陶器	皿	唐津	17	SD1702	(116)	(40)	33.5	灰釉	灰釉・胎土目	2.5Y5 2暗灰黄		35	
	15	陶器	皿	不明	17	SD1702トレンチ上層	142	47	38	灰釉	灰釉・鉄釉・鉄絵	5Y6 2灰オリーブ	RP1772	35	
	16	陶器	皿	唐津か	17	SD1702東中央壁	(129)	(51)	29	灰釉	灰釉・蛇の目釉剥ぎ	5Y5 2灰オリーブ	RP1854	35	折縁皿
	17	陶器	甕	成島	17	SD1702東南		(148)	(18)	鉄釉	鉄釉・目跡	N1.5 黒			底部墨書
	18	陶器	香炉	岸	17	SD1702	(120)	(76)	62	鉄釉	鉄釉	7.5YR3 2黒褐	RP1804	35	
46	1	陶器	皿	唐津か	17	SD1702石積の下	(241)		(36)	灰釉	灰釉	5Y6 2灰オリーブ	RP1956	35	
	2	陶器	鉢	成島	17	SD1702		(150)	(51.5)	灰釉	灰釉・目跡	5Y4 4暗オリーブ 5Y7 2灰白（内面）	RP1710	35	
	3	陶器	瓶	岸	17	SD1702東F1	54	57	96	灰釉・海鼠釉	灰釉・海鼠釉	10Y6 1灰	RP1850	35	
	4	磁器染付	徳利	肥前	17	SD1702トレ上		77	(58)	雨降文		2.5GY8 1灰白 5PB3 10紺瑠璃	RP1759		
	5	陶器	鉢	不明	17	SD1702トレンチ内	(312)		(90)	灰釉・海鼠釉	灰釉・海鼠釉	5BG2 1青黒	RP1753		
	6	陶器	擂鉢	成島	17	SD1702東中央壁際F1			(40)	鉄釉	鉄釉・卸目	7.5YR3 4暗褐	RP1851		
	7	陶器	擂鉢	不明	17	SD1702東			(76)		卸目	5YR5 4にぶい赤褐	RP1849		
	8	陶器	擂鉢	岸か	17	SD1702トレンチ下層			(36)		卸目	7.5YR3 1黒褐			
	9	陶器	擂鉢	成島	17	SD1702東中央壁際	(248)		(108)		卸目	7.5YR3 3暗褐	RP1857	35	
	10	磁器染付	碗	肥前	17	SE1703横トレンチ	(100)	38	52	二重網目文		5GY8 1灰白 1PB5 4.5サックスブルー	RP1726	35	くらわんか・内面スス付着
	11	磁器染付	碗	肥前	17	SE1703	(93)		(54)	農夫文・笹文	連続小円文	2.5GY8 1灰白 2PB3 5藍色	RP1892		
	12	陶器	碗	不明	17	SE1703内F1上		60	(49)	灰釉		10YR7 1灰白		35	底部に墨書有
	13	磁器染付	皿	肥前	17	SE1703内F' 上	(126)	(78)	33	蛇の目凹高台	蛇の目釉剥ぎ、見込斜格子、格子文	2.5GY8 1灰白 2PB3 5藍色	RP1785	35	
	14	磁器染付	鉢	肥前	17	SE1703 F1,F,Y	(174)	(96)	67	渦巻文か・蛇の目凹高台	文様不明・見込山水文か	5GY8 1灰白 5PB3 10紺瑠璃			
	15	磁器染付	皿	中国	17	SE1703F1オケ内		(78)	(15)	文様不明（高台）・界線	花唐草文	7.5GY8 1明緑灰 5PB2.5 2藍鉄色			16C末～17C初頭
	16	陶器	香炉	岸	17	SE1703南側		(90)	(50)	鉄釉	鉄釉・目跡		RP1930F1	35	
	17	陶器	香炉	岸	17	SE1703南側F1		(96)	(46)	鉄釉	鉄釉・目跡	2.5Y3 2黒褐	RP1935		
	18	陶器	鉢	不明	17	SE1703トレンチ底,館北へ[illegible]			(32.5)	灰釉	灰釉	7.5Y7 1灰白 7.5Y5 2灰オリーブ（内面）	RP1724	35	
47	1	磁器染付	皿	肥前	17	SE1703F	(136)	81	39	唐草文・見込寿か（高台）	見込五弁花・菊花文	2.5GY8 1灰白 2.5PB2.5 5インジゴ			
	2	磁器染付	鉢	肥前	17	SK1709	(131)	(82)	40	唐草文・蛇の目凹高台	草花文・花唐草文・見込花文	7.5GY8 1明緑灰 5PB3 10紺瑠璃		36	
	3	磁器染付	皿	肥前	17	N SK1709	(136)	(79)	44	唐草文・銘款か（高台）	見込五弁花・草花文か	7.5GY8 1明緑灰 2PB3 5藍色		36	
	4	陶器	甕	瓷器系	17	SE1703外			(96)			7.5YR5 1褐灰	RP1927		
	5	磁器染付	皿	肥前	17	SG1772	(100)	(44)	22	流水文	花唐草文	10GY8 1明緑灰 2PB3 5藍色	RP1946	36	
	6	陶器	甕	瓷器系	17	北SE1703 F12		(150)	(55)			N5 灰	RP1817		
	7	陶器	擂鉢	岸か	17	SG1773 w F3			(34)		卸目	5YR5 1褐灰			
	8	陶器	擂鉢	戸長里	17	17区北ES壁			(38)		卸目	10YR4 3にぶい黄褐		36	横位卸目
	9	陶器	碗	相馬	17	N 本管掘出時	(78)	44	62	「相馬」印（高台）貼り付け木金繋馬文	見込貼り付け水金走馬文	10Y7 1灰白		36	
	10	瓦器	内耳鍋	土師質	17	S側 SK1711	(262)		(99)		把手あり	2.5Y3 1黒褐	RP1829,1842,1853,1857,1860	36	
	11	陶器	鉢	成島か	17	N南東カド	(194)	(94)	80	灰釉	灰釉	2.5Y2 1黒		36	
	12	陶器	皿	会津本郷	17	焼土整地層中	96	46	23.5		灰釉	5Y7 2灰白		36	
	13	陶器	碗	相馬	17	17区北 土管 南	(108)	42	59	灰釉・鉄釉	灰釉	2.5YR2 4極暗赤褐 7.5Y7 2灰白（内面）	RP1762	36	腰錆碗

表6　中～近世漆器・木製品観察表

挿図	番号	種類・器種	地区	出土地点	長さ(口径mm)	幅(底径mm)	高さ(厚さmm)	外面	内面	遺物番号(RW)	樹種	図版	備考
48	1	漆器椀	17	SD1702	105	(45)	31	赤漆	赤漆	1840	ブナ属		下地：柿渋・木炭粉／顔料：ベンガラ
	2	漆器椀	2	SK2206		58.5	(55)	黒漆	赤漆	2207	ブナ属	36	
	3	漆器椀	2	SK2206		63	(67)	黒漆	黒漆	2205	ブナ属		
	4	漆器椀	1	SK412	118	(56)	(34)	赤漆	赤漆	428	ブナ属		下地：柿渋・木炭粉／顔料：ベンガラ
	5	漆器椀	1	SK482		(56)	(23)	黒漆・（体部：赤漆三引両文・高台：赤漆文様）	赤漆	456	ブナ属	36	下地：柿渋・木炭粉／顔料：ベンガラ
	6	漆器椀	15	SD1529		63	(19)	黒漆・赤漆文様	黒漆	1518	ブナ属		下地：柿渋・木炭粉／顔料：ベンガラ
	7	漆器碗	3	SD31		70	(15)	黒漆	黒漆	34	ブナ属		
	8	漆器碗	2	SP2253	91	62	22	黒漆（高台内：赤漆植物文・梅文）	黒漆	2285	ブナ属	36	下地：柿渋・木炭粉／顔料：ベンガラ
	9	漆器碗	5	SD338		(66)	(30)	赤漆	赤漆	324	ブナ属	36	下地：漆・砥の粉／顔料：朱
	10	漆器碗	5	SK313		54	(35)	赤漆	赤漆	305	ブナ属		下地：柿渋・木炭粉／顔料：ベンガラ
	11	漆器碗	1	SK412		118	(23)	黒漆	赤漆	429	ブナ属		下地：柿渋・木炭粉／顔料：ベンガラ
	12	漆器碗	1	SK491	90	59	26	赤色漆・口縁部・高台黒漆（高台内：赤漆文様）	赤漆	446	散孔材	36	下地：漆・木炭粉／顔料：朱
	13	下駄	1	SK412A	228	99	36				モクレン	36	
	14	下駄	1	SK412B	164	57	29				モクレン	36	
49	15	下駄	17	SP1784	226.5	98	26				モクレン	36	
	16	下駄	1	SK412	231.5	74	24.5			413	モクレン	36	
	17	下駄	5	北　西壁	(120)	110	42						
	18	橋脚貫板	12	SK1203	663	120	37				スギ	37	
	18	橋脚柱根	12	SK1203	307	128.5					スギ	37	
	19	柱根	17	SP1790	(380)	158	168				アカマツ	37	
	20	柱根	2-9	SP2953	(259)	185	175				スギ	37	
	21	木組遺構	3	SP3西	(492)	145					スギ	37	
50	22	木樋蓋	15	SD1531南1上	(2017)	250	(100)				マツ属	37	
	22	木樋	15	SD1531南1下	2034	266	166				マツ属	37	
	23	木樋蓋	15	SD1531南2上	2014	185	64				アカマツ	37	
	23	木樋	15	SD1531南2下	2000	182	144				マツ属	37	

表7　中～近世金属製品・古銭観察表

挿図	番号	種別	器種・種類	区	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	遺物番号	図版	備考
51	1	銅製品	はけ	1	SX410　曲物	42	60	2		37	
	2	銅製品	はけ	1	SX410　曲物	162	26	2		37	
	3	鉄製品	刀子	2	SX2205	83	17	6	RM2246	37	
	4	銅製品	金具	2	SX2205	64	38	2		37	
	5	銅製品	キセル	2	SX2205	46	12	10		37	
	6	銅製品	キセル	新5	SD807	58	14	9			
	7	銅製品	キセル	17	SD1702	54	15.5	9		37	
	8	銅製品	キセル	17	SD1702	48	10	9		37	
	9	銅銭貨	永楽通寶	1	SP411	24.5	5.5	1.2	RM406		
	10	銅銭貨	至道元寶	1	SK418	24.0	6.5	0.9			初鋳995年
	11	銅銭貨	寛永通寶	2北	SX2205	23.0	6.5	1.4	RM2244		
	12	銅銭貨	寛永通寶	3	SX4	23.5	6.5	1.3	RM23		
	13	銅銭貨	寛永通寶・波	3	SX7	28.0	6.0	1.2	RM4		
	14	銅銭貨	寛永通寶	4	SX165	22.0	6.5	0.9	RM118		
	15	銅銭貨	寛永通寶・文	5	SP340	25.0	6.0	1.4	RM329		
	16	銅銭貨	寛永通寶・文	5	EP311	25.0	5.5	1.2	RM311		
	17	銅銭貨	寛永通寶	新5	SP816のF	24.5	5.5	1.5			
	18	銅銭貨	永楽通寶	新5	SX802	24.0	6.0	1.0	RM861		
	19	銅銭貨	寛永通寶・文	新5	SX802	25.0	6.0	1.2	RM808		
	20	銅銭貨	寛永通寶	新5	F3	24.0	5.0	1.2	RM833		
	21	銅銭貨	寛永通寶・文	新5	F3	25.0	5.5	1.3	RM833		
	22	銅銭貨	元豊通寶	新5	SX802	24.5	6.5	1.1	RM846		初鋳1078年

挿図	番号	種別	器種・種類	区	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	遺物番号	図版	備考
51	23	銅銭貨	寛永通寳	9南	S K537	23.5	6.0	1.0	R M532		
	24	銅銭貨	寛永通寳	10	S P284	24.0	5.5	1.1	R M230		
	25	銅銭貨	寛永通寳・文	10	東中②	24.5	6.0	1.4	R M205		
	26	銅銭貨	寛永通寳	10	上③	25.0	5.5	1.0	R M205		
	27	銅銭貨	聖宋元寳	10	西中②	24.0	6.0	1.4	R M205		初鋳1101年
	28	銅銭貨	寛永通寳	10	東上①	24.0	5.5	1.2	R M205		
	29	銅銭貨	寛永通寳・文	10	東上①	25.0	5.5	1.2	R M205		
	30	銅銭貨	寛永通寳・文	10	東上①	25.0	6.0	1.3	R M205		
	31	銅銭貨	寛永通寳・文	10	西上①	25.0	5.5	1.0	R M205		
	32	銅銭貨	寛永通寳	10	西上①	23.5	5.5	1.1	R M205		
	33	銅銭貨	判読不能	11	S X1155	24.5	5.5	1.1	R M1108		
	34	銅銭貨	文久永寳	14	S K1402	26.0	6.5	0.8			初鋳1863年
	35	銅銭貨	寛永通寳	14	S X1403	24.5	6.5	1.0			
	36	銅銭貨	元豊通寳	17	S K1775内	23.5	6.0	1.1	R M1906		初鋳1078年
	37	銅銭貨	紹聖元寳	17	S K1775	23.5	6.5	1.0	R M1905		初鋳1094年
	38	銅銭貨	天聖元寳	17	S P1774	24.0	7.0	1.1	R M1908		初鋳1023年
	39	銅銭貨	寛永通寳・文	17北	S X1704	25.0	5.5	1.1	R M1707		
	40	銅銭貨	寛永通寳・文	17北	S X1704	24.5	6.0	1.0	R M1707		
	41	銅銭貨	寛永通寳	17北	S X1704	24.0	5.5	1.2	R M1717		
	42	銅銭貨	寛永通寳	17北	S K1709	23.5	5.5	1.2			
	43	銅銭貨	寛永通寳・文	17北	S D1702西中層	25.0	6.0	1.2	R M1788		
	44	銅銭貨	寛永通寳	17北	S D1702	22.5	6.0	1.4	R M1837		
	45	銅銭貨	寛永通寳・文	17北	S D1702F 2東	25.0	6.0	1.1			
	46	銅銭貨	寛永通寳	17北	S D1702　F 1	23.5	6.0	1.0			
	47	銅銭貨	紹聖元寳	17北	S D1702	22.5	6.0	1.1			初鋳1094年
	48	銅銭貨	寛永通寳・文	17北	S D1702中央中～下層	25.0	5.5	1.1			
	49	銅銭貨	一銭	17北	S D1702管掘出時ＸＯ	22.5	−	0.9			
	50	銅銭貨	寛永通寳	17北	S E1703　桶トレンチ	22.5	6.5	0.8	R M1729		
	51	銅銭貨	寛永通寳	17北	S E1703　北側トレンチ	23.5	6.5	1.1			
	52	銅銭貨	寛永通寳	17北	S E1703　北側トレンチ	23.5	5.5	1.2			
	53	銅銭貨	寛永通寳	17北	S E1703　桶旧水路東側盤下	24.0	9.0	1.1			
	54	銅銭貨	寛永通寳	17北	S X1704	23.5	6.0	1.1			
	55	銅銭貨	寛永通寳	17北	S K1717	22.0	6.5	1.0	R M1821		
	56	銅銭貨	寛永通寳	17南	S D1744	21.0	6.5	1.0	R M1875		
	57	銅銭貨	寛永通寳	新5	S D825	24.5	5.5	1.0	R M895		

表8　中～近世石製品・板碑

挿図	番号	種別	器種	区	出土地点	遺物番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	石材	図版	備考
52	1	石製品	砥石	新5	トレンチF 6～F 9		73	28	24	流紋岩		
	2	石製品	砥石	1	S K422		(68)	55		泥岩		
	3	石製品	砥石	新5	S P810	R Q820	42	40		泥岩		
	4	石製品	砥石	8	S P620		(66)	30	10	泥岩		
	5	石製品		5	N端N壁	R Q342	78	18.5	15	流紋岩		
	6	石製品	砥石	5	S X318		(87)	(38)	27	安山岩	37	
	7	石製品	砥石	9	S P507	R Q525	98	45	11	砂岩		
	8	石製品	硯	1	S P409	R Q405	(22)	(36)	27	泥岩		
	9	石製品	石臼	2	北壁S P2271	R Q2290	300	310	78	凝灰岩	37	
	10	石製品	石鉢	9	S P507	R Q524	127	105		砂岩		
	11	石製品	石臼	水路	西側水路		260	260	125	凝灰岩	37	
	12	石製品	石鉢	5	西壁		110	206		凝灰岩	37	
	13	石製品	石鉢	17	S D1702		(71)	122	56	凝灰岩	37	
	14	石製品	戸車	17	S D1702	R Q1800	50	50.5	18	砂岩	37	
53	1	石製品	板碑	17	S D1702		(1150)	680	215	凝灰岩		上部欠損。梵字キリーク・弘安七季（1284年）・□□（中央）／右志者為□（右側）／過去□□□也（左側）
	2	石製品	板碑	17	S D1702		1110	400	200	凝灰岩		銘不明
	3	石製品	板碑	15	中央水路		(460)	270	120	凝灰岩		銘不明

表 9　縄文時代・古代の遺物観察表

図版	番号	種別	器種	地区	出土地点	層位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外面	内面	底部	遺物登録番号 (R P)	図版	備考
54	1	須恵器	坏	17	S G1773	F 3	(150)	(85)	40	ロクロ	ロクロ	ヘラケズリ	R P 1968	38	
	2	須恵器	坏	17	S G1773		(148)	(110)	30.5	ロクロ	ロクロ	ヘラ切	R P 2010	38	
	3	須恵器	坏	17	S G1773断	F 5	(145)	(90)	37	ロクロ	ロクロ	ヘラ切			
	4	須恵器	坏	17	S G1773	F 6 上	(140)	(82)	34.5	ロクロ・ヘラケズリ	ロクロ	ヘラケズリ	R P 1976		墨痕有
	5	須恵器	坏	17	S G1773		(144)	(82)	40	ロクロ	ロクロ	ヘラ切	R P 1987	38	「吉」墨書有
	6	須恵器	坏	17	S D1702西			(90)	(35.5)	ロクロ	ロクロ	ヘラ切	R P 1825		
	7	須恵器	有段坏	17	東トレンチ		(112)	(70)	43	ロクロ	ロクロ	ヘラ切		38	
	8	須恵器	有段坏	17	西トレンチ	F 6		(62)	(25)	ロクロ	ロクロ	ヘラケズリ	R P 1914・1915下層	38	
	9	須恵器	高台付坏	17	西南トレンチ				(20)	ロクロ	ロクロ	ヘラケズリ			
	10	須恵器	高台付坏	17	水路西			(139)	(14.5)	ロクロ	ロクロ	ヘラ切	R P 1839		
	11	須恵器	坏	17	S E1709 S	F 7		(54)	(12)	ロクロ	ロクロ	糸切	R P 1936		
	12	赤地土器	坏	17	S G1773			(40)	(8)	ロクロ	ロクロ		R P 1942		
	13	須恵器	蓋	17	S D1702 S				(20)	ロクロ・ケズリ	ロクロ				石組み内
	14	土師器	有段坏	17	S G1773		(136)	(110)	30.5	ハケメ・ナデ	ナデ	ハケメ	R P 2001・2002	38	
	15	土師器	有段坏	17	17E N		(164)	(128)	43	精土組痕		ヘラ削り		38	掛付帯
	16	土師器	有段坏	17	S G1773 E	F 3	157	115	43	ハケメ・ナデ	ミガキ・黒色処理	ハケメ	R P 2000・2001下・2003	38	
	17	土師器	有段坏	17	S G1773 W整N	F 7 上		(110)	16	ケズリ・ハケメ・ナデ	ミガキ・黒色処理	ハケメ・ケズリ		38	
	18	土師器	坏	17	S G1773底	F 3 下	128	(37)	41	精土組痕・ケズリ・ナデ	ナデ	ミヤエ・ケズリ	R P 1999	38	
	19	土師器	坏	17	S D1702			(72)	(23)	ケズリ	ミガキ	ケズリ	R P 1819		
	20	土師器	坏	17	S G1773	下層			(19)	ケズリ・ナデ	ミガキ		R P 1880		掛付帯
	21	土師器	有段坏	17	S G1773	F 6			(38)	ハケ・ナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理		R P 1879・1896		
	22	土師器	坏	17	S G1773		(162)		(64)	ミガキ・ハケメ・ナデ	ミガキ・黒色処理		R P 1879	38	
	23	土師器	高坏	17	S G1773			(97)	(62)	ミガキ・ハケメ・ナデ	ミガキ・黒色処理		R P 1921	38	
	24	土師器	坏	17	S G1773	F 3		(82)	(13.5)	ミガキ	ミガキ・黒色処理	ミガキ	R P 1891	38	
55	1	土師器	鉢	17	S G1773		(115)		(68)	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ		R P 1922	38	黒斑状痕
	2	土師器	甕	17	E トレンチ				(80)	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ			38	
	3	土師器	甕	17	S E1773				(94)	ハケメ	ヨコナデ		R P 1920	38	黒斑比較
	4	土師器	甕	水路	東区	(F 5)上層			(59)	ハケメ	ヨコナデ				
	5	土師器	甕	17	S G1773		(235)		(157)	ハケメ	ハケメ		R P 1899・1912・1913	38	
	6	土師器	甕	17	S G1773	F 5	(260)		(182)	ハケメ	ハケメ		R P 1975	38	
	7	瓦質器	鉢	17	S G1773W				(41)	ロクロ・磨擦	ロクロ			38	
	8	瓦質器	摺鉢	17	S G1773	F 3	(110)		(25)	ロクロ	ロクロ	ヘラ切	R P 1969	39	
	9	瓦質器	甕	17	S D1702東				(59)	ロクロ・箆描波状文	ロクロ			39	石組下
	10	瓦質器	甕	17	S G1773	F 5	(602)		(159)	ロクロ・箆描波状文	ロクロ		R P 1974 B	39	
56	1	瓦器器	鉢	17	S G1773		(450)		(395)	ロクロ・タタキ 線描波状文	ロクロ・アテ		R P 1882・1927・1929・1974	39	台盤輪
	2	瓦器器	鉢	17	S D1702西				(230)	ロクロ・タタキ	ロクロ・アテ		R P 1905	39	
	3	木製品	弓	17	S G1773東端		814	15		両先端凸加工				39	イチイ
	4	木製品	盤	17	S G1773西			160		ロクロ	ロクロ		R W1979	39	ケヤキ縁
	5	縄文土器	浅鉢	17	S G1773	F 7			(49)				R P 1989	39	大木8a式
	6	石器	二次加工	1	S K410		36	21							縄文
57	1	須恵器	坏	新5	トレンチ	F 6～F 9	(142)	(95)	43	ロクロ・ヘラ削り	ロクロ	ヘラケズリ		39	
	2	須恵器	坏	新5	トレンチ	F 6～F 9		(86)	(18.5)	ロクロ	ロクロ	ヘラ切			
	3	須恵器	坏	新5	東壁トレンチ	F 6		(62)	(21)	ロクロ	ロクロ	回転糸切・ヘラケズリ		39	
	4	須恵器	高台付坏	新5	東壁	F 6'		(90)	(24)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	R P 1102	39	銀用板
	5	須恵器	高台付坏	新5				(90)	(16)	ロクロ	ロクロ	ヘラケズリ	R P 875		
	6	須恵器	高台付坏	新5	北壁	F 6		(84)	(24)	ロクロ	ロクロ	ヘラ切	R P 898		
	7	須恵器	鉢鉢	新5	トレンチ	F 6～F 9	(148)		(32)	ロクロ	ロクロ				
	8	須恵器	坏	新5	東壁トレンチ	F 6			(30)	ロクロ	ロクロ			39	墨書有(外面)
	9	須恵器	蓋	新5	トレンチ	F 6～F 9			(19)	ロクロ・ケズリ	ロクロ			39	
	10	須恵器	蓋	新5	東壁トレンチ	F 6	(156)		(16)	ロクロ・ケズリ	ロクロ				
	11	須恵器	坏	新5	S X803			(65)	(25.5)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	R P 894		
	12	赤地土器	坏	新5	トレンチ	F 6～F 9		(40)	(14.5)	ロクロ	ロクロ	回転糸切			
	13	土師器	高台付坏	新5	X O	F 6		(92.5)	(36)	ロクロ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	ヘラケズリ		39	
	14	土師器	坏	新5	トレンチ	F 6～F 9		(70)	(14)	ケズリ	ミガキ・黒色処理				
	15	土師器	坏	新5	東壁トレンチ X O	F 6、F 7		(66)	(22)	ケズリ・ハケメ	ミガキ				
	16	須恵器	甕	新5	トレンチ	F 6～F 9			(100)	ロクロ	ロクロ				
	17	須恵器	壺	新5					(105)	ロクロ・タタキ	ロクロ・アテ		R P 1101	39	
	18	須恵器	甕	新5					(90)	ロクロ・タタキ・箆描波状文	ロクロ・アテ		R P 871	39	
58	1	土師器	鉢	5	北壁				(34)	ケズリ・ミガキ	ミガキ・黒色処理				
	2	土師器	坏	8	西壁			(80)	(16)	ケズリ	ミガキ・黒色処理	ケズリ	R P 601		有段か
	3	須恵器	蓋	3	S D31				(21)	ロクロ・ケズリ	ロクロ		R P 37	39	
	4	土師器	高坏	1	S D402				(23)	ケズリ	ミガキ・黒色処理		R P 402	39	脚部に刺目有
	5	須恵器	甕	6, 7	S D704				(70)	ロクロ・タタキ	ロクロ・アテ		R P 704		
	6	須恵器	壺	10	S D234				(42.5)	ロクロ	ロクロ		R P 210	39	
	7	須恵器	壺	9	水路南側西壁			(102)	(36)	ロクロ	ロクロ		R P 501		

Ⅵ まとめ

大在家遺跡の二次に渡る調査では、主に古代の飛鳥・奈良・平安時代の河川跡、中～近世の集落跡（屋敷跡）などの複合遺跡である事が分かった。以下に分けて整理してまとめる。

1 古代 古代では、調査区北端に東西方向に走行する幅約25m、確認面からの深さは約2.5mの河川跡が検出された。本遺跡北側を西流する旧屋代川やその支流が推測される。地山の高さなどからは、河川南側～中央が自然堤防、徐々に調査区南側に向い後背湿地状の低地となる。

古代河川跡

河川の堆積状況が全体に明らかな17区を概観すれば、覆土は大別9層に分層される。遺物が出土する当初の河川は、川幅約20m前後で、最下層（F 9層）の縄文時代中期中葉頃に形成され、その後も洪水層を主体とし、下層（F 7層）の飛鳥～奈良時代頃に徐々に河川が埋没する。中層では、奈良～平安時代頃に流路が、北側（F 7上層）→南側（F 6～4）と変わり、小河川の様相を呈する。覆土は薄い粗砂層とシルト層の互層で、洪水と安定を繰り返す。F 4層は有機質層で、河川埋没による浅い湿地状で、隣接する5区でも明瞭で鍵層になる。上層のF 3～2層は遺物が単発的で判然としないが、最上層のF 1は、出土遺物や層準などから近世初頭頃の河川を平坦化した整地層と判断される。しかし、河川の岐部は、その後も近世初頭の石積水路などに利用され、現在の一ノ堰もその一つであろう。

他に、調査区の古代の遺構は、散発的で小ピットや風倒木などで全体に希薄である。洪水層を主とする河川に隣接するため、集落などを営むには適さなかったのかもしれない。

飛鳥様式の土器群

一方、遺物相では、河川下～中層から出土した奈良時代以前と考えられる一群が注目される。須恵器の有段坏や、口・底径が大きく器高が低い坏類などで、近年調査された飛鳥様式を含む高安窯跡の資料と類似し、概ね7世紀末～8世紀初頭頃の年代が比定される。これらと供伴する土師器の供膳器は、有段丸底の坏類だが、前代の系譜を引く口縁部外反と、それより後出の口縁部内湾のものがある。この中には底部を一般的なケズリではなくハケメ調整する特徴的なものもあり、鉢や甕類でも形態的に前代の系譜を引くものが多い。

2 中～近世 中～近世では、現存する真泉寺などの寺院の位置関係から調査区が、江戸時代中葉の『高畠城絵図』に描かれる「横町」通り周辺である事が分かり、その町並みや規模、変遷などが概観できた。遺構では、中～近世の建物跡、水路跡2条、側溝状の溝跡、木樋、溝跡、井戸跡、土坑、木組遺構、多数の柱穴などが確認された。

近世絵図との対応

これらの中には、覆土に焼土や炭を含むものが多く、文献にある近世末～明治初頭（幕末）頃の大火によるものと推測された。これは、調査区の基本層序の焼土層（Ⅱ層）やその後の整地層（Ⅱ上層）に関わるもので、上記の遺構は、概ねこれらと同時期かそれ以降の新しい時期が考えられた。一方、遺構覆土には焼土を含まず、整地層下のものもあり、これらは大火以前の時期が推測されたが、明確に中世に遡る遺構は判然としなかった。

中～近世の遺構

さて、調査区全体を概観すれば、絵図に描かれる東西方向の水路が、調査区中央部（SD31）と北端部（SD1702）の現水路のほぼ直下で確認された。前者は幅約5mを測り、改修や北岸で橋脚跡も確認された。後者は石積みの水路で幅は約1.5m前後と狭い。

これら水路と直交する南北方向では、絵図にはない横町通りの旧道路関連の２条のＳＤ1201・1570側溝跡が長さ40mほど確認された。両溝の間隔は、約５mで両溝内側は遺構が希薄で、当時の道幅と捉えられた。溝跡は、部分的に途切れ、調査区南端部でクランク状に屈曲する。集内では希少な近世末頃のＳＤ1573木樋も、ＳＤ1570側溝に切られほぼ南北に併走する。

一方、東西方向のＳＤ205・234側溝が、この南北側溝の北端で直交して検出される。現町道付近にあたり、近世には町道が現在よりやや北側にあった可能性もある。他に同方向の大形の溝跡は、調査区南端（ＳＤ470）や、調査区中央部の水路南側（ＳＤ538）で確認され、前者は大町通りの側溝、後者は水路に関連する施設と推測された。

しかし、これら側溝跡や溝跡は、重複関係や出土遺物などから一定の時期差が認められる。古い順に、ＳＤ31（幅広）中央水路・橋脚（近世前半）→ＳＤ31（幅狭）中央水路・木樋・ＳＤ1201南北側溝東側（近世後半）→ＳＤ1570南北側溝西側（覆土上位に焼土：幕末大火層）となる。また、東西側溝との新旧は、ＳＤ1201南北側溝東側→ＳＤ205東西溝南側→ＳＤ1531木樋になる。

さて、旧道路に面していた建物跡は、調査区が限定的で、建物跡全体を把握できるのは少なく、柱穴に焼土を含むなど新相の３～４棟に留まる。しかし、柱根や礎盤・根固石を持つ柱穴群の分布からは、概ね梁が２～３間程度の明治初期の「高畠町絵図」にある短冊状の建物配置と同様の状況が窺え、これら建物の周囲からは石組の井戸、土坑などが単発的に検出された。

建物では、特に５区のＳＢ362礎盤建物は、柱穴や礎盤の石が大形で、他区の柱穴群と比べ重複が少なく、建て替えが少ない建物として特徴的で、地元民によればこの地区に当時の名主屋敷の伝承があるとの事であった。

その他に調査区南東部で古相の小判型の土坑が２基検出され、底面から漆器椀が各々出土し、形態などから墓坑の可能性もある。また、大町通りや現町道と交差する旧道路両端に、旗指し状の木組遺構が一定間隔で検出され、近世以降の道路幅を知る一端となる。

中～近世の遺物

遺物相では、中～近世陶磁器が主体で、近世後半の遺物量が多い。中世の陶器としては、珠洲系陶器や瀬戸・美濃系の大窯期の資料、中国産磁器、伊達氏の領内で一般的な内耳土鍋の土師質土器などがある。他に「弘安七季」(1284年）紀年銘がある板碑も出土した。

近世では、碗・皿類の供膳器として肥前系の陶器や染付磁器が中心となるが、擂鉢や鉢、香炉、甕などは東北諸窯の在地産が多い。特に近世前半では県内の米沢市戸長里窯、福島市岸窯産がある。他に碗・皿類で瀬戸・美濃系（志野産）の登窯期のものもある。近世後半では、会津若松市会津本郷窯、浪岡町大堀相馬窯、米沢市成島窯産などが多く、染付磁器も詳細な産地は不明ながら肥前や瀬戸美濃ではない在地産が出現する。

伊達氏との関連

他に中国銭や近世初頭鋳造の古相の寛永通寛などが一定量を占める点や、前述小判型の土坑から伊達氏家紋の三引両文の漆器椀が出土し、遺跡の性格を考える上で特徴的である。

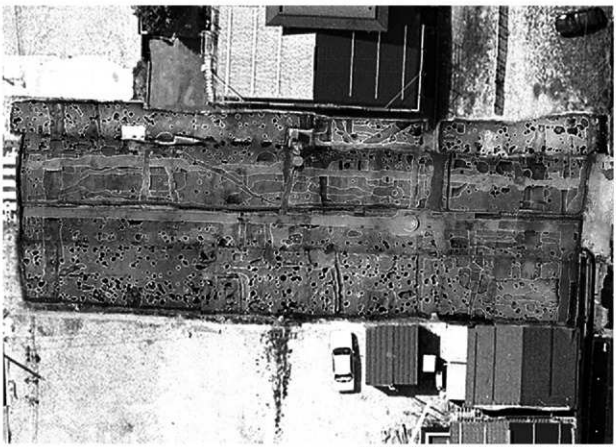
横町通りの開発

最後に上記の遺構・遺物をまとめれば、本遺跡は、飛鳥時代頃から今調査検出の河川周辺に古代の集落が形成され、中世には伊達氏の拠点である高畠城の城下として散発的に開発される。近世には、高畠城の城下町として、古代河川の整地や道路関連遺構（側溝）、木樋などの本格的な整備が行われ、集落（屋敷跡）が発展する。その後、幕末期の大火後に横町通りは再編され、近代の明治14年以降の「高畠町絵図」に至ったと考えられる。

写真図版

上：遺跡近景（１Ｗ）

下：遺跡上空から
※実線が調査区



調査区南半部　完掘状況（上空から：合成写真）

調査前風景

調査風景

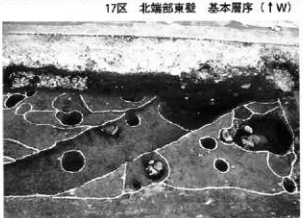
平成17年水道管工事立会い調査

平成16年現水路工事立会い調査（木組み出土状況：↑N）

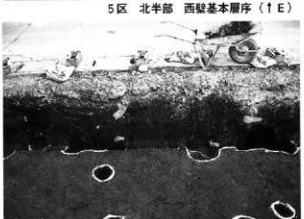
17区中央部　完掘状況（上空から：合成写真）

17区　北端部東壁　基本層序（↑W）

5区　北半部　西壁基本層序（↑E）



8区　中央部西壁（SD601）（↑E）



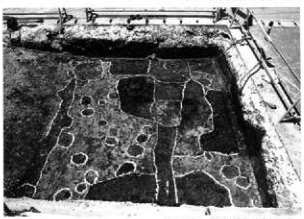
6・7区　南端部東壁基本層序（↑W）

調査区南半部　上層完掘状況（上空から：合成写真）

同上　下層完掘状況（上空から：合成写真）

1区　検出状況（↑S）

1区　完掘状況（↑S）



2区南　検出状況（↑S）

2区北　完掘状況（↑S）

3区上層　完掘状況（↑SW）

3区下層　完掘状況（↑E）

4区南半　完掘状況（↑S）

4区北半　完掘状況（↑N）

5区　検出状況（↑N）

5区　完掘状況（↑N）

新5区　検出状況（↑W）

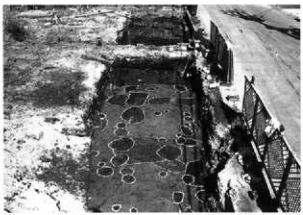
新5区　完掘状況（↑S）

6・7区　検出状況（↑S）

6・7区　完掘状況（↑S）

8区　検出状況（↑S）

8区　完掘状況（↑S）

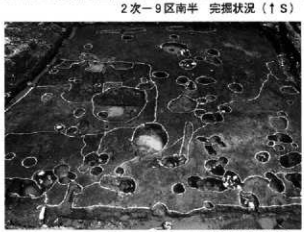


9区　検出状況（↑S）

9区　完掘状況（↑S）

2次－9区南半　完掘状況（↑S）

2次－9区北半　完掘状況（↑W）



10区　上層完掘状況（↑S）

10区　下層完掘状況（↑SW）

11区南半　検出状況（↑N）

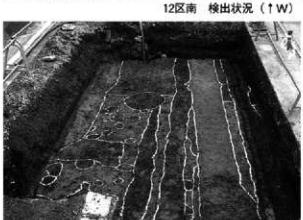
11区南半　精査状況（↑S）

11区北半　検出状況（↑S）

11区北半　精査状況（↑N）

12区南　検出状況（↑W）

12区南　完掘状況（↑S）



12区北　検出状況（↑N）

12区北　完掘状況（↑S）

12区北　検出状況（↑N）

12区北　完掘状況（↑N）

13区南　検出状況（↑S）

13区南　精査状況（↑S）

14区　検出状況（↑N）

14区　完掘状況（↑N）

15区南　検出状況（↑N）

15区南　完掘状況（↑N）

15区北　検出状況（↑S）

15区北　完掘状況（↑S）

15区北端　検出状況（↑N）

15区北端　完掘状況（↑E）

16区　検出状況（↑S）

16区　完掘状況（↑S）

17区南上層　検出状況（↑S）

17区南上層　精査状況（↑S）

17区北上層　検出状況（↑N）

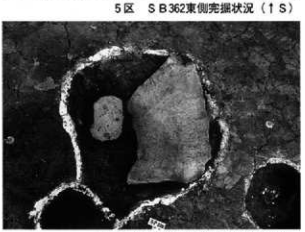
17区北上層　完掘状況（↑SE）

5区　SB362完掘状況（↑W）

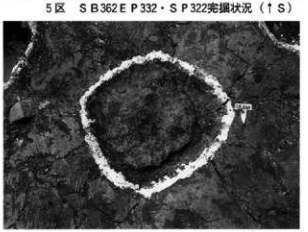
5区　SB362検出状況（↑S）

5区　SB362東側完掘状況（↑S）

5区　SB362EP332・SP322完掘状況（↑S）

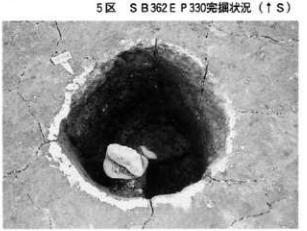


5区　SB362EP334完掘状況（↑S）



5区　SB362EP330完掘状況（↑S）

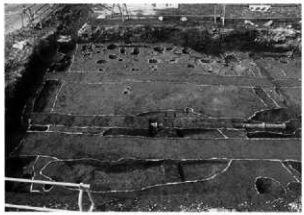
5区　SB362EP336完掘状況（↑S）



5区　SP304完掘状況（↑S）

10区　S B286・287完掘状況（↑E）

10区　S B286・287精査状況（↑E）



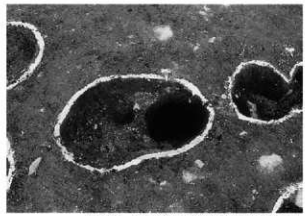
17区　S B287前方部完掘状況（↑E）

17区　S B286・287完掘状況（↑S）

10区　柱列完掘状況（↑W）

10区　S B286 E P203完掘状況（↑W）

新5区　S B833完掘状況（↑W）

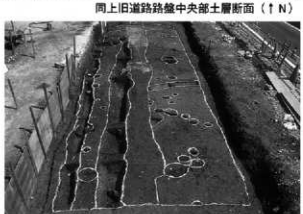


新5区　S B833 E P812完掘状況（↑E）

17区南壁　旧道路路盤土層断面（↑N）

同上旧道路路盤中央部土層断面（↑N）

同上旧道路路盤東側土層断面（↑N）

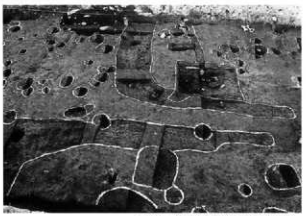


16区　SD1601西精査状況（↑S）

13区　SD1302精査状況（↑S）

1区　SD497完掘状況（↑W）

1区　SD497土層断面（↑N）



1区　SD407精査状況（↑W）

12区　SD1201杭列土層断面（↑N）

13区南壁　SD1302土層断面（↑N）

13区　SD1302（RP1301）遺物出土状況（↑W）

13区北壁　SD1301土層断面（↑S）

16区　SD1601土層断面（↑S）

17区　ＳＤ1744・1753完掘状況（↑Ｗ）

17区　ＳＤ1744完掘状況（↑Ｗ）

17区　ＳＤ1744木質部土層断面（↑Ｗ）

17区東壁　ＳＤ1744土層断面（↑Ｗ）

17区　ＳＤ1744杭列土層断面（↑Ｓ）

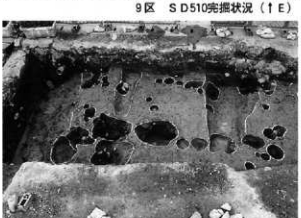
17区　ＳＤ205・234完掘状況（↑Ｅ）

10区　ＳＤ234土層断面（↑ＮＥ）

10区　ＳＤ234遺物出土状況（↑ＳＷ）

9区　SD510完掘状況（↑E）

9区　SD510北側完掘状況（↑W）



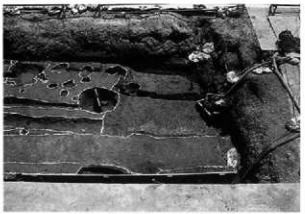
9区　SD510南側完掘状況（↑W）

9区　SD510北側西壁土層断面（↑E）

9区　SD510南側土留杭検出状況（↑SW）

9区　SD510遺物出土状況（↑W）

15区　SD1525完掘状況（↑S）



12区　SD1246・SP1203完掘状況（↑W）

3区　SD31完掘状況（↑E）

12区　SP1203完掘状況（↑S）

12区　SP1203土層断面（↑E）

15区　SP1595・SD1525完掘状況（↑N）

15区　SP1595土層断面（↑W）

17区　ＳＤ1702完掘状況（↑Ｅ）

17区　ＳＤ1702完掘状況（↑Ｗ）

17区　ＳＤ1702精査状況（↑Ｗ）

17区　ＳＤ1702中央部土層断面（↑Ｅ）

17区　ＳＤ1702東壁土層断面（↑Ｗ）

写真図版 18　　北嬬旧石積水路

17区　ＳＤ1702石積み外し土層断面（↑Ｅ）

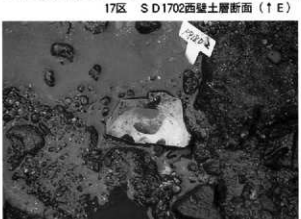
17区　ＳＤ1702北側石積み状況（中央が中世板碑）（↑Ｗ）

17区　ＳＤ1702南側石積み状況（↑Ｎ）

17区　ＳＤ1702石積み外し状況（↑Ｗ）

17区　ＳＤ1702西壁土層断面（↑Ｅ）

17区　ＳＤ1702遺物出土状況（ＲＰ1763～1768）（↑Ｓ）



17区　ＳＤ1702遺物出土状況（ＲＰ1802）（↑Ｓ）

17区　ＳＤ1702石積内遺物出土状況（ＲＰ1804）（↑Ｓ）

15区北　ＳＥ1577桶・ＳＤ1531木樋完掘状況（↑ＳＥ）

15区北　ＳＥ1577桶・ＳＤ1531木樋完掘状況（↑Ｅ）

15区北　ＳＥ1577桶・ＳＤ1531木樋蓋外し状況（↑ＳＥ）

15区北　ＳＤ1531木樋外し状況（↑Ｓ）

15区北端　ＳＤ1597木樋完掘状況（↑Ｓ）

15区北　ＳＥ1577桶の導水部木樋出土状況（↑Ｅ）

15区北　ＳＥ1577桶完掘状況（↑Ｎ）

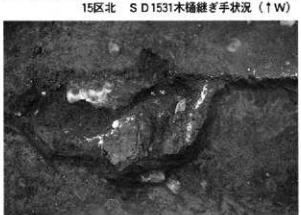
15区北　ＳＤ1531木樋出土状況（↑ＮＥ）

15区北　ＳＥ1577桶・ＳＤ1531木樋継ぎ手精査状況（↑Ｓ）

15区北　ＳＤ1531木樋蓋外し状況（↑Ｎ）

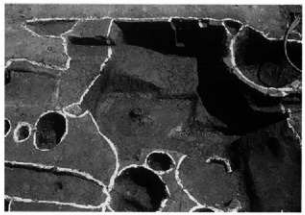
15区北　ＳＤ1531木樋継ぎ手状況（↑Ｗ）

15区北　ＳＤ1531木樋・ＳＤ1570北壁土層断面（↑Ｓ）



17区南　ＳＤ1744内の木樋表皮出土状況（↑Ｅ）

9区　SD523・SD538溝完掘状況（↑W）



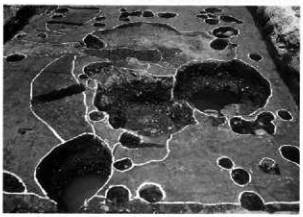
15区　SD1529遺物出土状況（RW1518）（↑S）

2区　SD2258土層断面（↑S）

6・7区　SD704完掘状況（↑E）

6・7区　SD704土層断面（↑W）

1区　SD470・497土層断面（↑W）



4区　SE134・135・136完掘状況（↑S）

4区　SE136完掘状況（↑N）

4区　SE136土層断面（↑S）

4区　SE135土層断面（↑E）

11区　SE110石外し状況（↑S）

2－9区　SE2910完掘状況（↑NE）

1区　SK412遺物出土状況（↑W）

2区　SK2206土層断面（↑W）

2区　SX2205遺物出土状況（↑SE）

5区　SD338・SK345精査状況（↑W）

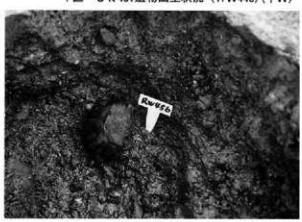
新５区　ＳＸ801遺物出土状況（↑Ｅ）

５区　ＳＫ313遺物出土状況（↑Ｎ）

17区　ＳＫ1711土層断面（↑Ｎ）

１区　ＳＫ491遺物出土状況（ＲＷ446）（↑Ｗ）

１区　ＳＫ482完掘状況（↑Ｅ）



１区　ＳＫ482遺物出土状況（ＲＷ456）（↑Ｅ）

１区　ＳＸ410完掘状況（↑Ｗ）

17区　ＳＰ1723土層断面（↑Ｅ）

17区南下層　ＳＧ1773トレンチ完掘状況（↑Ｓ）

17区北下層　ＳＧ1773東トレンチ完掘状況（↑Ｅ）

17区北下層　ＳＧ1773西トレンチ遺物出土状況（↑Ｅ）

17区北下層　ＳＧ1773西トレンチ遺物出土状況（↑Ｅ）

17区北下層　ＳＧ1773東トレンチ完掘状況（↑Ｎ）

17区南・北下層　ＳＧ1773西壁土層断面（↑Ｅ）

17区北下層　ＳＧ1773西壁北半土層断面（↑Ｅ）

17区南下層　ＳＧ1773西壁土層断面（↑Ｅ）

17区北下層　ＳＧ1773西壁中央土層断面（↑Ｅ）

17区北下層　ＳＧ1773トレンチ完掘状況（↑Ｗ）

同左東壁土層断面（↑Ｗ）

17区下層　ＳＧ1773東壁北端部遺物出土状況（↑Ｗ）

17区北下層　ＳＧ1773西側拡張Ｆ３層遺物出土状況（↑ＥＮ）

17区北下層　西側拡張ＳＧ1773Ｆ６遺物出土状況（↑Ｅ）

同左Ｆ６下遺物出土状況（↑Ｅ）

同上Ｆ６下層・Ｆ７上層完掘状況（↑Ｅ）

同左Ｆ７・８層完掘状況（↑Ｅ）

17区北下層　西側拡張西壁土層断面（↑Ｅ）

新５区下層　河川跡トレンチ精査状況（↑Ｗ）

新５区下層　河川跡トレンチ東壁土層断面（↑Ｗ）

同左トレンチ遺物(ＲＰ888･889)出土状況(↑ＳＥ)

35-5

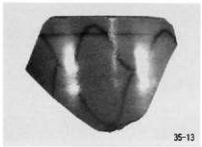
35-7

35-9

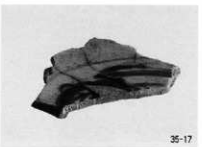
35-10

35-11

35-12


35-13

35-15


35-17

35-20

35-21

35-22

36-2

36-3

36-4

36-5

36-7

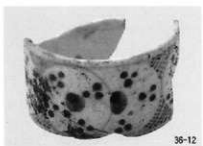
36-8

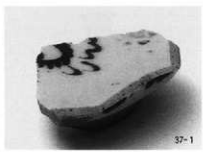
中～近世遺物（1）

36-9

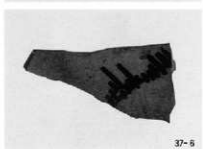
36-10

36-11

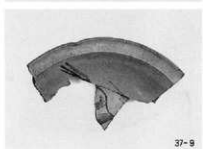

36-12


37-1

37-4


37-6

37-7


37-9

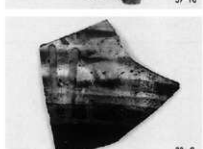
37-11

37-15

37-16

38-1

38-1


38-2

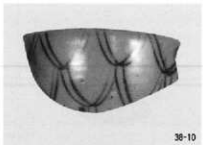
38-3

38-5

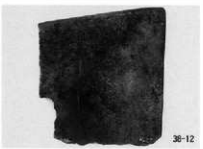
38-6

中～近世遺物（2）

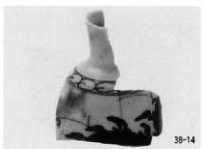
38-9


38-10

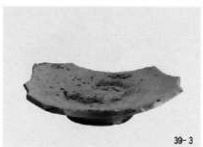
38-11


38-12

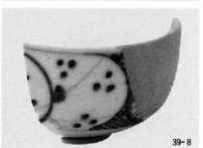
38-13

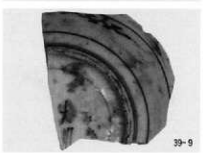

38-14

39-2


39-3

39-5


39-8


39-9

39-11

39-12

39-14

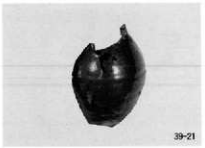
39-15

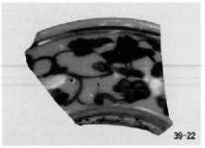
39-17

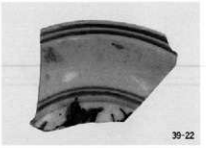
39-19

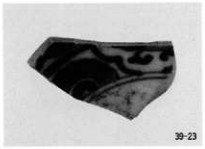
39-20

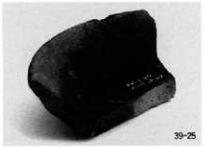
中～近世遺物（3）


39-21

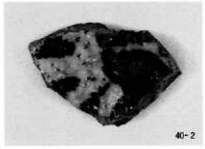

39-22


39-22


39-23


39-25

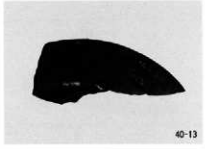
40-1


40-2

40-3

40-10

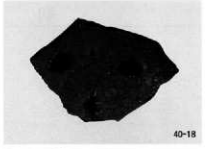
40-12


40-13

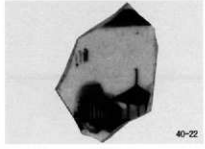
40-14

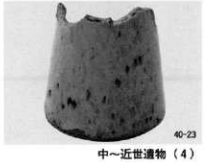
40-15

40-17


40-18

40-19

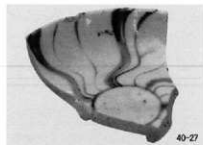

40-22


40-23

中～近世遺物（4）

40-24

40-25


40-27

41-1

41-2

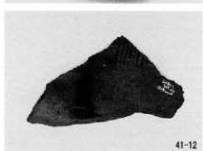
41-3

41-5

41-7

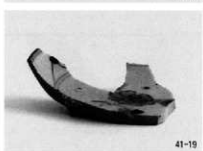
41-8

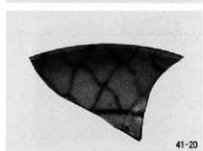
41-11

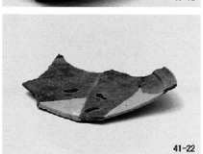

41-12

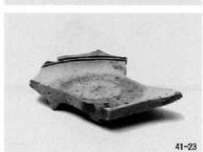
41-14

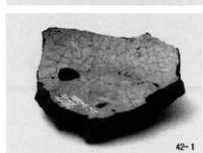
41-16


41-19

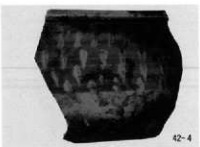

41-20


41-22


41-23


42-1

中～近世遺物（5）

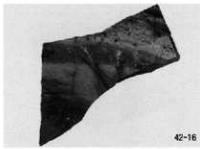

42-4

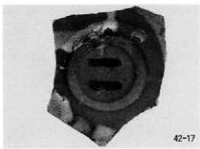
42-5

42-10

42-12

58-7


42-16


42-17

42-18

42-19

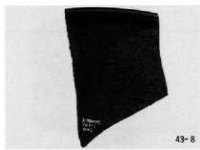
43-1

43-2

43-5

43-6

43-7


43-8

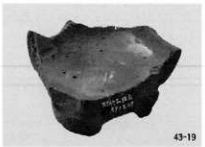
43-12

43-13

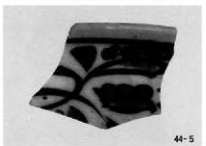
43-14

中～近世遺物（6）

43-17


43-19

44-2


44-5

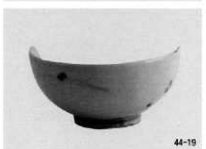
44-7

44-8

44-13

44-14

44-18

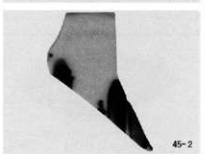

44-19

44-20

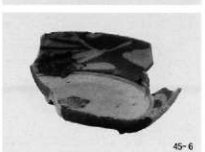
44-21

44-22

45-1


45-2

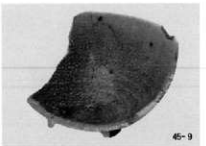
45-5


45-6

45-7

中～近世遺物（7）

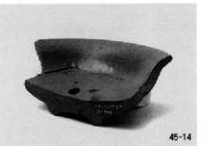
45-8


45-9

45-11

45-12

45-13

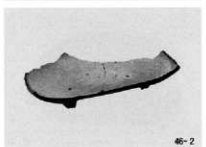

45-14

45-15

45-16

45-18

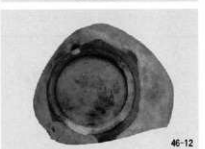
46-1


46-2

46-3

46-9

46-10


46-12

46-13

46-16

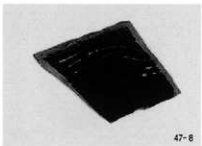
46-18

中～近世遺物（8）

47-2

47-3

47-5


47-8

47-9

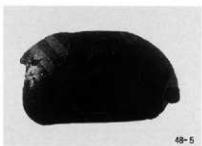
47-10

47-11

47-12

47-13

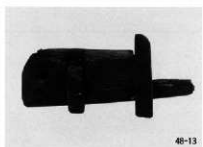
48-2

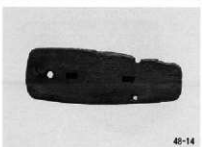

48-5

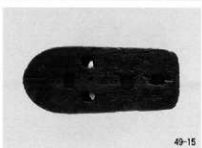
48-9

48-8

48-12

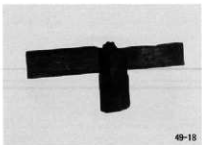

48-13

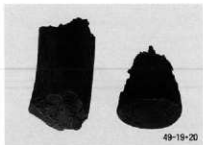

48-14


49-15

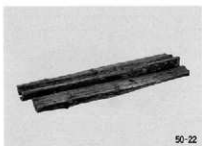
49-16

中～近世遺物（9）


49-18


49-19・20

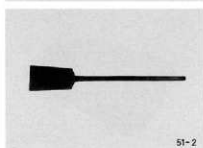
49-21


50-22

50-23

50-23

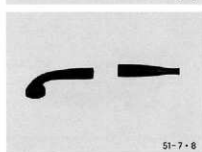
51-1


51-2

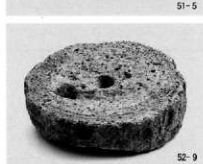
51-3

51-4

51-5


51-7・8

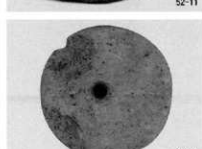
52-6


52-9

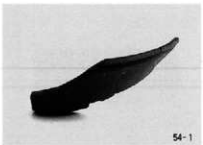
52-11

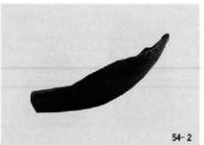
52-12

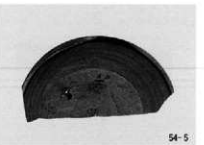
52-13


52-14

中～近世遺物（10）


54-1

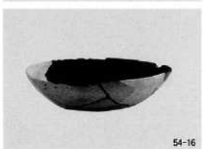

54-2

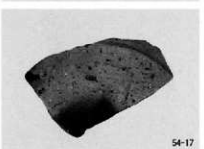

54-5

54-7

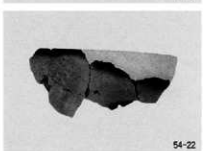
54-14

54-15

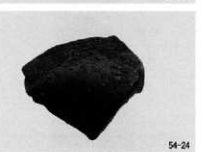

54-16


54-17

54-18


54-22

54-23


54-24

55-1

55-2

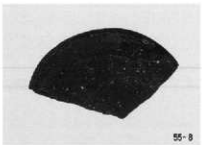
55-3

55-5

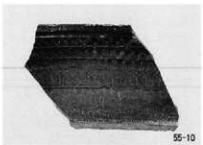
55-6

55-7

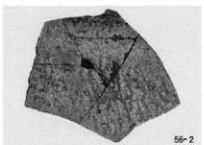
古代遺物（1）

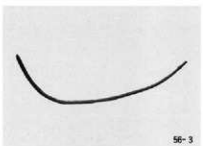

55-8

55-9


55-10

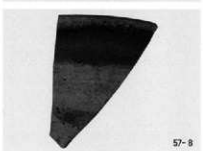
56-1

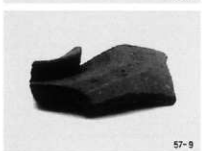

56-2


56-3

57-1

57-4


57-8


57-9

57-13

57-17

57-18

58-3

58-4

58-6

56-4

56-5

古代遺物（2）

付　編

大在家遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

大在家遺跡(高畠町大字高畠字大在家所在)は、屋代川やこれに合流する小河川によって形成された低地に立地する。発掘調査の結果、飛鳥時代～近世の遺構、遺物が検出されており、中心となるのは中・近世で、高畠城跡と重複している。

本遺跡における自然科学分析調査は、平成16年度および平成17年度にそれぞれ実施した。本報告では二年度分をまとめて報告する。調査では、古代河川の堆積環境および当時の植生、近世水路の用途・環境および植生を調べることを目的として、微化石分析(珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析)を実施する。また、古代および中近世の木材利用を調べるために、出土した木製品の樹種同定を実施する。

1.試料

(1)微化石分析

平成16年度調査では、近世水路の9区SD510北の試料番号3、5、11と5区西壁の試料番号10(SDF2)、試料番号11(SD F4)の計5点について、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を実施する。また、基本土層では古代の遺物包含層の可能性があるとされる5区西壁の試料番号12(Ⅲ層)について、珪藻分析と植物珪酸体分析を行い、堆積層の形成や当時の環境について検討する。さらに、中世頃の整地層の可能性がある6・7区東壁のⅡ'層に関して珪藻分析を行い、堆積物の由来に関する検討を行う。

平成17年度調査では、古代の河川跡である17区北の西壁から採取された土壌試料を対象とする。6点採取された中から、堆積物が細粒で微化石の検出が期待される5点(F3、F4、F6、F6'、F7上)を選択し、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を実施する。

(2)樹種同定

平成17年度調査として、古代の木製品・自然木と、中近世の木製品について実施する。古代の木製品は弓1点で、自然木は2点ある。中近世の木製品は26点あり、下駄の台と歯など部位別の試料も含めると合計34点ある。34点の中から選択された17点について同定を実施する。したがって、古代と中近世を合わせた点数は20点となる。

2.分析方法

(1)珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する(化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、原口ほか(1998)、Krammer(1992)、Krammer & Lange-Bertalot(1986, 1988, 1991a, 1991b)などを参照する。

同定結果は、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種はその内容を示す。産出個体数100個体以上の試料は、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性

かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたって、淡水生種は安藤(1990)、陸生珪藻は伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性は、Asai & Watanabe(1995)の環境指標種を参考とする。

(2)花粉分析

試料約10ｇについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛:比重2.3)よる有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸９,濃硫酸１の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉、草本花粉、シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数を基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(3)植物珪酸体分析

湿重５ｇ前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム,比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)、およびこれらを含む珪化組織片を近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の産状を図化する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

(4)樹種同定

各試料について木取等を観察した上で、板状で３断面(木口・柾目・板目)の切片作製が可能な場合には、剃刀を用いて遺物から直接切片を採取する。切片の採取が困難な場合は、接合部品がある場合には接合部内、接合部品が無い場合には破損部等を利用して木片を採取する。木片は、剃刀を用いて３断面の徒手切片を作製する。

切片は、実体顕微鏡で観察しながら拾い出し、ガム・クロラール(抱水クロラール，アラビアゴム粉末,グリセリン，蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東(1982)およびWheeler他(1998)を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林(1991)、伊東(1995,1996,1997,1998,1999)や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

3.結果

(1)珪藻分析

結果を表１、図１に示す。珪藻化石の産出頻度は、５区西壁の試料番号２－12が少なかった他は豊富に産出する。完形殻の出現率は、50－90%まで変化するが70%前後の試料が多く、化石の保存が良い。産出分類群数は、合計で33属185分類群である。以下に各地点の珪藻化石群集の特徴を述べる。

・９区西ＳＤ510

珪藻化石群集は試料番号11、５と試料番号３で違いが見られる。試料番号11、５は、淡水域に生育する水生珪藻(以下、水生珪藻と言う)が陸生珪藻(陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的

表1　珪藻分析結果（1）

種類	生態性			環境指標種	9区 S D510北			5区西壁			6・7区東壁Ⅱ'	17区				
	塩分	pH	流水		3	5	11	2-10	2-11	2-12		F3	F4	F6	F6'	F7上
Cyclotella meneghiniana Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	l-ph	L,S	1	–	2	–	–	–	–	–	–	–	1	–
Gomphonema pseudoaugur Lange-Bertalot	Ogh-Meh	al-il	ind	S	–	–	–	–	4	–	–	–	–	–	–	–
Navicula capitata Ehrenberg	Ogh-Meh	al-il	r-ph	U	–	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Navicula capitata var.hungarica(Grun.)Ross	Ogh-Meh	al-il	r-ph	U	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Navicula cincta(Ehr.)Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind		–	–	–	–	–	–	2	–	–	–	–	–
Navicula goeppertiana(Bleisch)H.L.Smith	Ogh-Meh	al-il	ind	S	–	–	–	6	–	–	1	–	–	–	–	–
Navicula integra(W.Smith)Ralfs	Ogh-Meh	al-il	unk		–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Navicula veneta Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	S	2	–	–	10	–	–	1	–	–	–	–	–
Nitzschia palea(Kuetz.)W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	6	–	–	47	1	–	1	–	–	–	–	–
Rhopalodia gibberula(Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		3	25	–	1	–	–	5	–	–	1	–	1
Achnanthes clevei Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	T	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Achnanthes convergens H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	r-ph	T	1	1	2	–	–	–	–	3	–	–	3	–
Achnanthes exigua Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	S	–	–	–	1	–	–	–	1	–	–	–	–
Achnanthes hungarica Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	–	3	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Achnanthes laterostrata Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	T	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Achnanthes lanceolata(Breb.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	3	–	4	1	14	–	–	5	7	1	–	–
Achnanthes lanceolata var.abbreviata Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph		–	–	–	–	–	–	–	–	–	3	–	–
Achnanthes minutissima Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	1	–	–	–	–	–	–	–	3	–	–
Achnanthes oestrupii(Cl.)Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		–	–	–	–	–	–	–	–	3	–	–	–
Achnanthes rostrata Oestrup	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Achnanthes silvabercynia Lange-Beltalot	Ogh-ind	ac-il	ind		–	–	–	–	–	–	–	2	–	–	–	–
Achnanthes subhudsonis Hustedt var.subhudsonis	Ogh-ind	ind	r-ph	T	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Amphora affinis Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	1	1	4	1	–	–	–	2	3	1	3
Amphora inariensis Krammer	Ogh-ind	al-il	ind	T	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
Amphora montana Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	25	–	4	9	2	–	31	–	–	–	–	–
Amphora pediculus(Kuetz.)Grunow var.pediculus	Ogh-ind	al-bi	ind	T	–	–	–	–	–	–	–	2	2	2	2	–
Aulacoseira alpigena(Grun.)Krammer	Ogh-hob	ac-il	l-bi	N,U	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Aulacoseira ambigua(Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N,U	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Caloneis angustivalva Petit	Ogh-unk	unk	unk	RI	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Caloneis bacillum(Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	–	2	–	1	–	1	1	1	2	–	–
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	–	–	–	–	–	–	–	–	3	–	–	–
Caloneis silicula(Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		–	–	–	–	–	–	2	–	–	–	–	–
Ceratoneis arcus Kuetzing	Ogh-hob	ind	r-bi	K,T	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Ceratoneis arcus var.hattoriana Meister	Ogh-ind	ind	r-bi	T,I	–	–	1	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Ceratoneis arcus var.recta(Cl.)Krasske	Ogh-ind	ind	r-bi	T	–	1	3	–	–	–	–	4	1	4	2	8
Cocconeis placentula(Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	1	1	1	–	–	–	9	6	2	1	1
Cocconeis placentula var.euglypta(Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	–	1	–	–	–	–	–	2	–	1	3	–
Cocconeis placentula var.lineata(Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	–	–	–	–	–	–	–	7	2	6	1	2
Cocconeis pseudothumensis Reichardt	Ogh-ind	al-il	l-ph		–	–	–	–	–	–	–	–	–	2	1	1
Cymbella aspera(Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	O,T	–	–	–	–	–	–	–	–	–	3	–	–
Cymbella cuspidata Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind		–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	5
Cymbella gracilis(Ehr.)Kuetzing	Ogh-ind	ind	l-ph	T	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
Cymbella japonica Reichelt	Ogh-unk	unk	r-ph	T	–	–	–	–	–	–	–	4	–	–	–	–
Cymbella mesiana Cholnoky	Ogh-ind	al-bi	l-bi	O	–	2	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–

表1　珪藻分析結果（2）

種類	生態性			環境指標種	9区 S D510北			5区西壁			6・7区東壁II'	17区				
	塩分	由	流水		3	5	11	2-10	2-11	2-12		F3	F4	F6	F6'	F7上
Cymbella minuta Hilse ex Rabh.	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	1	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Cymbella naviculiformis Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	O	–	2	–	1	1	–	–	–	2	3	–	4
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	3	22	12	2	3	–	1	3	4	7	3	19
Cymbella sinuata Gregory	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	4	5	7	2	3	–	–	28	17	21	28	29
Cymbella tumida(Brebn.ex Kuetz.)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	–	3	1	1	–	–	–	1	–	1	1	1
Cymbella turgidula Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	–	–	–	–	–	–	–	1	2	1	–	1
Cymbella turgidula var.nipponica Skvortzow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	–	2	3	–	–	–	1	7	2	4	7	11
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	3	–
Diploneis marginestriata Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Dintoma mesodon(Ehr.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	–	2	1	–	–	–	–	27	7	5	5	6
Diploneis parma Cleve	Ogh-ind	ind	ind		–	1	2	–	1	–	1	–	1	–	–	–
Epithemia adnata(Kuetz.)Brebisson	Ogh-ind	al-bi	ind		–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
Eunotia bilunaris(Ehr.)Mills	Ogh-hob	ac-il	ind		–	1	–	–	1	–	1	–	–	1	–	–
Eunotia duplicoraphis H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	l-ph		–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
Eunotia incisa W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O	–	–	–	–	–	–	–	–	3	1	–	–
Eunotia pectinalis var.minor(Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O,T	1	3	1	–	1	–	–	13	8	8	19	12
Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
Fragilaria bicapitata A.Mayer	Ogh-hob	ind	l-bi		–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	3	–
Fragilaria capitellatat(Grun.)J.B.Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	–	–	–	–	–	–	–	–	2	–	–	–
Fragilaria capucina var.gracilis(Oestr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	–	–	–	–	9	–	–	–	–	1	3	3
Fragilaria capucina var.rumpens(Kuetz.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	–	–	–	–	5	–	–	3	–	2	2	–
Fragilaria construens fo.venter(Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	–	–	–	–	–	–	–	2	4	–	–	–
Fragilaria lapponica Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		–	–	–	–	–	–	–	–	2	–	–	–
Fragilaria leptostauron(Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	–	–	–	–	–	–	–	3	6	–	–	1
Fragilaria pinnata Ehrenberg var.pinnata	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Fragilaria pinnata var.lancettula(Schum.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	–	1	–	–	–	–	–	3	14	1	1	1
Fragilaria vaucheriae(Kuetz.)Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	7	13	13	1	2	–	–	10	11	8	19	11
Fragilaria vaucheriae var.capitellata(Grun.)Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	9	2	12	–	4	–	–	–	–	–	–	–
Frustulia rhomboides(Ehr.)De Toni var.rhomboides	Ogh-hob	ac-il	l-ph	P	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
Frustulia vulgaris(Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	–	2	–	2	–	–	–	1	1	2	1
Gomphonema affine Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Gomphonema angustatum(Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	4	1	1	6	–	–	–	1	–	–	–
Gomphonema angustum Agardh	Ogh-ind	al-il	ind		–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	2	–
Gomphonema clevei Fricke	Ogh-ind	al-bi	r-ph	T	–	4	2	–	–	–	–	6	1	–	–	–
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	–	–	–	–	6	–	–	–	–	1	–	1
Gomphonema helveticum Brun	Ogh-unk	ind	r-ph	T	–	5	–	–	–	–	–	–	1	1	–	–
Gomphonema olivaceum var.minutissimum Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		–	–	–	–	–	–	–	3	–	3	–	1
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	4	24	12	4	86	–	4	10	9	16	7	7
Gomphonema parvulum var.lagenula(Kuetzing)Frenguelli	Ogh-ind	ind	r-ph	S	3	2	2	–	1	–	–	–	–	–	–	1
Gomphonema productum(Grun.)hange-B.&Reichardt	Ogh-ind	al-il	ind		1	1	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–
Gomphonema pumilum(Grun.)Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		–	–	–	–	–	–	–	7	5	8	5	–
Gomphonema quadripunctatum(Oestrup.)Wislouch	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	1	1	–	–	–	–	–	1	–	1	2	4
Gomphonema subclavatum(Grun.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Gomphonema vastum Hustedt	Ogh-unk	unk	ind		–	–	–	–	–	–	–	1	1	3	1	1

表1　珪藻分析結果（3）

種類	生態性			環境指標種	9区 S D510北			5区西壁			6・7区東壁 II'	17区				
	塩分	pH	流水		3	5	11	2-10	2-11	2-12		F3	F4	F6	F6'	F7上
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	–	2	–	–	–	–	–	–	–
Hantzschia amphioxys(Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	31	11	31	14	6	–	58	3	7	9	6	1
Martyana martyi(Heribaud)Round	Ogh-ind	al-il	ind		–	–	–	–	–	–	–	–	5	1	–	–
Mastogloia smithii Thwaites	Ogh-ind	ind	l-bi		–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Melosira varians Agardh	Ogh-hil	al-bi	r-ph	K,T	2	2	16	1	1	–	–	–	–	–	–	–
Meridion circulae var.constrictum(Ralfs)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	1	2	–	–	–	–	–	4	4	4	3	9
Navicula cocconeiformis Gregory	Ogh-hob	ac-il	r-ph		–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Navicula confervacea(Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RB,S	–	2	2	1	1	–	6	–	–	–	–	–
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	6	3	1	4	1	–	2	–	2	1	–	–
Navicula contenta fo.biceps(Arnott)Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	4	1	1	1	1	–	3	2	1	–	1	–
Navicula cryptocephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	–	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Navicula decussis Oestrup	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	–	–	3	–	–	–	–	–	–	3	–	1
Navicula elginensis(Greg.)Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	2	–	–	1	–	–	1	–	5	5	1	–
Navicula elginensis var.neglecta(Krass.)Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	2	3	6	2	–	6	–	3	4	1	–
Navicula kotschyi Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Navicula lanceolata(Agardh)Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	T	–	1	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Navicula lapidosa Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RI	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–
Navicula mobiliensis var.minor Patrick	Ogh-ind	al-il	ind		–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	14	3	6	20	4	–	15	3	6	8	4	–
Navicula mutica var.ventricosa(Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	RI	–	–	1	1	–	–	3	–	–	–	–	–
Navicula notanda Pantocsek	Ogh-ind	al-il	ind		–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Navicula paramutica Bock	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Navicula placenta Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	RI	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Navicula protracta(Grun.)Cleve	Ogh-hil	ind	ind	U	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Navicula pseudolanceolata Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	2	1
Navicula radiosa Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	–	1	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
Navicula radiosa fo.nipponica Skvortzow	Ogh-ind	al-il	ind	T	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	1	1
Navicula rhynchocephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Navicula seminulum Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RB,S	3	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Navicula subcostulata Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Navicula symmetrica Patrick	Ogh-ind	al-il	ind	T	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Navicula tenelloides Hustedt	Ogh-unk	unk	r-ph	J,U,RI	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Navicula ventralis Krasske	Ogh-ind	ind	ind	U	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Navicula viridula(Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	1	2	–	2	–	–	–	–	–	–	–	–
Navicula viridula var.rostellata(Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	1	–	4	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	–	–	1	1	–	–	–	–	–
Neidium affine(Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ind	l-bi		–	–	–	–	2	–	–	–	–	–	–	–
Neidium affine var.longiceps(Greg.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	ind		–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	4	1	1	2	1	–	2	–	–	–	–	–
Neidium amphiatum(Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		–	1	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Neidium bisulcatum(Lagerst.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	RI	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	1	–
Neidium dubium(Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ind	ind		–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Neidium iridis(Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi	O	–	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Neidium productum(W.Smith)Cleve	Ogh-ind	ind	ind		–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–

表1　珪藻分析結果（4）

種類	生態性			環境指標種	9区 S D510北			5区西壁			6・7区東壁 II'	17区				
	塩分	pH	流水		3	5	11	2-10	2-11	2-12		F3	F4	F6	F6'	F7上
Neidium tokyoensis H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	ind		–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	2	–	1	–	–	1	–	–	–	–	–	–
Nitzschia dissipata(Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	–	1	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–
Nitzschia palustris Hustedt	Ogh-ind	ind	unk		–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Nitzschia perminuta(Grun.)Peragallo	Ogh-ind	ind	ind	RI	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–
Orthoseira roeseana(Rabh.)O'Meara	Ogh-ind	ind	ind	RA	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	–	1	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	6	1	–	3	–	3	–	–	2	1	–
Pinnularia brauniana(Grun.)Mills	Ogh-hob	ac-bi	l-ph		–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–
Pinnularia brebissonii(Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Pinnularia divergens W.Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph		–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	1
Pinnularia esoxiformis Fusey	Ogh-hob	ac-il	ind		–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Pinnularia esoxiformis var.eifeliana Krammer	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	–	–	1	–	–	–	–	–	–	1	2	3
Pinnularia gibba var.linearis Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		–	1	1	–	1	–	1	–	–	–	–	–
Pinnularia karelica Cleve	Ogh-ind	ind	l-ph		–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Pinnularia lata(Breb.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	RB	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–
Pinnularia lundii Hustedt	Ogh-ind	ind	l-ph		–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Pinnularia mesolepta(Ehr.)W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	1	1	–	–	–	–	2	–	–	–	–	–
Pinnularia microstauron(Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	–	–	–	–	–	–	–	–	3	–	–	–
Pinnularia neomajor Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-bi	T	–	–	–	–	1	–	–	–	1	–	–	1
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	–	–	1	–	–	–	–	–	1	–	1	–
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind		–	–	1	–	1	–	–	–	2	1	–	–
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	2	–	1	–	–	–	3	1	2	5	–	–
Pinnularia schroederii(Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Pinnularia silvatica Petersen	Ogh-ind	ind	ind	RI	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Pinnularia similis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Pinnularia stomatophora(Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	2
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	9	1	4	6	3	–	7	–	2	–	–	–
Pinnularia subcapitata var.paucistriata(Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,O,U,	21	2	6	49	4	–	16	1	–	–	–	–
Pinnularia viridis(Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	1	2	2	–	–	–	–	–	–	–	–	2
Pinnularia viridis var.diminuta A.Mayer	Ogh-ind	ind	ind		1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	–	–	2	–	–	1	–	–	1
Plagiotropis lepidoptera var.proboscidea(Cleve)Reim.	Ogh-ind	al-il	ind		–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
Rhoicosphenia abbreviata(C.Agardh)Lange－B.	Ogh-hil	al-il	r-ph	K,T	–	–	–	–	–	–	–	5	2	2	1	–
Sellaphora bacillum(Ehr.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
Sellaphora laevissima(Kuetz.)Mann	Ogh-ind	ind	ind		–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–
Sellaphora pupula(Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	U	1	–	1	1	3	–	1	–	–	1	2	–
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Stauroneis borrichii(Pet.)Lund	Ogh-ind	ind	ind	RI	2	–	–	–	1	–	3	–	–	2	–	–
Stauroneis kriegeri Patrick	Ogh-ind	ind	ind	T	–	–	–	–	1	–	3	–	–	–	–	–
Stauroneis lauenburgiana Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Stauroneis legumen var.nipponica(Skv.)H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–

表1　珪藻分析結果（5）

種類	生態性			環境指標種	9区 S D510北			5区西壁			6-7区東壁 II'	17区				
	塩分	pH	流水		3	5	11	2-10	2-11	2-12		F3	F4	F6	F6'	F7上
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	2	1	−	−	1	−	8	−	1	−	−	−
Stauroneis phoenicenteron fo.hattorii Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	−	1	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
Stauroneis smithii Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1
Stauroneis tenera Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
Stauroneis undata Hustedt	Ogh-ind	ind	unk		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	6
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	1	−	4	4	1	−	1	−	−	−	−	−
Surirella ovata var.pinnata(W.Smith)Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	6	1	2	1	1	−	6	−	−	1	−	−
Surirella robusta Ehrenberg	Ogh-hob	ind	l-bi		−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
Synedra inacqualis H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-bi	J,K,T	−	−	1	−	−	−	−	−	−	1	−	−
Synedra ulna(Kuetz.)Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	−	4	5	−	2	−	−	2	6	12	8	2
Tabellaria fenestrata(Lyngb.)Kuetzing	Ogh-ind	ac-il	l-bi	O,T	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−
Tabellaria flocculosa(Roth)Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	T	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	2	24
Tabellaria ventricosa Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-ph		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	2
海水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
淡水～汽水生種					12	27	3	64	5	0	10	0	0	2	1	1
淡水生種					191	174	200	144	200	5	195	200	205	204	172	199
珪藻化石総数					203	201	203	208	205	5	205	200	205	206	173	200

凡例

H. R. : 塩分濃度に対する適応性
Ogh－Meh　：淡水－汽水生種
Ogh－hil　：貧塩好塩性種
Ogh－ind　：貧塩不定性種
Ogh－hob　：貧塩嫌塩性種
Ogh－unk　：貧塩不明種

pH：水素イオン濃度に対する適応性
al－bi　：真アルカリ性種
al－il　：好アルカリ性種
ind　：pH不定性種
ac－il　：好酸性種
ac－bi　：真酸性種
unk　：pH不明種

C. R. : 流水に対する適応性
l－bi　：真止水性種
l－ph　：好止水性種
ind　：流水不定性種
r－ph　：好流水性種
r－bi　：真流水性種
unk　：流水不明種

環境指標種群

J：上流性河川指標種，K：中～下流性河川指標種，L：最下流性河川指標種，O：沼沢湿地付着生種，P：高層湿原指標種群（以上は安藤，1990）
S：好汚濁性種，U：広域適応性種，T：好清水性種（以上はAsai and Watanabe，1995）
R：陸生珪藻（RA：A群，RB：B群，RI：未区分、伊藤・堀内，1991）

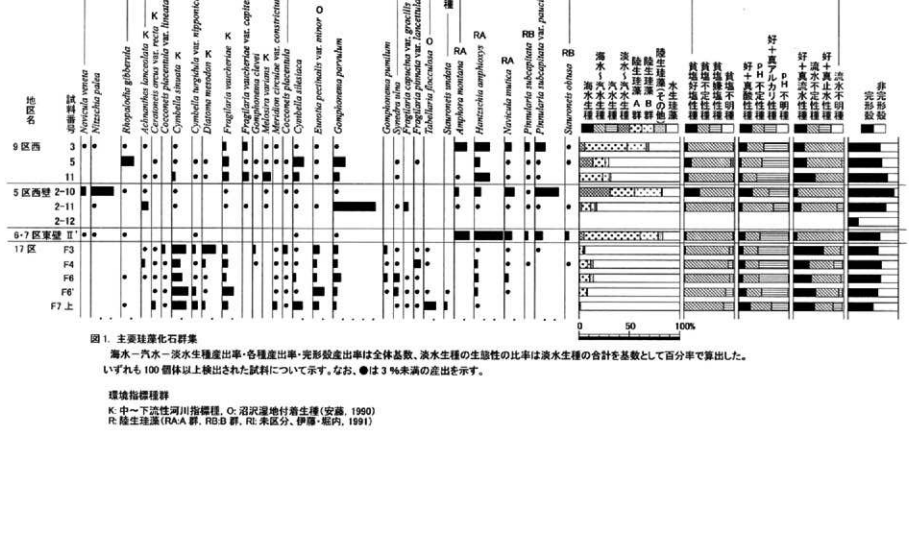


図 1. 主要珪藻化石群集

海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。
いずれも 100 個体以上検出された試料について示す。なお、●は 3 %未満の産出を示す。

環境指標種群

K: 中～下流性河川指標種, O: 沼沢湿地付着生種(安藤, 1990)
R: 陸生珪藻(RA:A 群, RB:B 群, RI: 未区分、伊藤・堀内, 1991)

環境に耐性のある珪藻)に比べて多いが、試料番号3は陸生珪藻の方が水生珪藻より多い。

試料番号11、5の淡水性種の生態性(塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能)の特徴は、貧塩不定性種(少量の塩分には耐えられる種)、真+好アルカリ性種(pH7.0以上のアルカリ性水域に最もよく生育する種)、真+好流水性種(流水域に最もよく生育する種)と流水不定性種(流水域にも止水域にも普通に生育する種)が多産する。主要種は、流水性で中~下流性河川指標種群のFragilaria vaucheriae、Melosira varians、Cymbella sinuata、流水不定性のCymbella silesiaca、Gomphonema parvulum、それに耐乾性の高い陸生珪藻A群のHantzschia amphioxys等が10%前後産出する。なお、試料番号5からは、塩分や塩類を含む水域に生育する淡水~汽水生種のRhopalodia gibberulaも約10%産出する。中~下流性河川指標種群は、河川中~下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現する種群である(安藤, 1990)。

試料番号3は、陸生珪藻A群のAmphora montana、Hantzschia amphioxysが15%前後と多産し、同じくA群のNavicula mutica、水域にも陸域にも生育する陸生珪藻B群のPinnularia subcapitata、その変種のPinnularia subcapitata var. paucistriata等を伴う。また、低率ながら中~下流性河川指標種群のFragilaria vaucheriae等が産出する。

・5区西壁

珪藻化石が産出した試料番号10と試料番号11とでは、珪藻化石群集が異なる。

試料番号11は、水生珪藻が優占し、貧塩不定性種、pH不定性種(pH7.0付近の中性水域に最もよく生育する種)、流水不定性種が優占する。主要種は、流水不定性のGomphonema parvulumが約40%と優占し、中~下流性河川指標種群のAchnanthes lanceolata等を伴う。

試料番号10は、淡水~汽水性種、陸生珪藻、水生珪藻とが高い割合で混在する。主要種は、有機汚濁の進んだ腐水域に多産する好汚濁性種のNitzschia paleaと同じ様な水域に耐性のある陸生珪藻B群のPinnularia subcapitata var. paucistriataが約25%産出する。これに付随して淡水~汽水性種のNavicula goeppertiana、Navicula veneta、陸生珪藻A群のAmphora montana、Hantzschia amphioxys、Navicula mutica等を伴う。なお、珪藻化石の少なかった試料番号12は、Pinnularia lata、Nitzschia brevissima等の陸生珪藻が少量ながら産出する。

・6・7区東壁

Ⅱ'層は、陸生珪藻が約80%と優占する。主要種は、陸生珪藻A群のHantzschia amphioxysが約30%と優占し、同じくA群のAmphora montana、Navicula mutica、陸生珪藻B群のPinnularia subcapitata var. paucistriata等を伴う。

・17区

F3からF7上の5試料は、水生珪藻が全体の約85%を占め優占する。淡水生種の生態性の特徴は、貧塩不定性種、真+好アルカリ性種、真+好流水性種と流水不定性種が優占あるいは多産する。主要種も互いに近似しており、流水性で中~下流性河川指標種群のCymbella sinuataが15%前後と多産し、同じく中~下流性河川指標種群のDiatoma mesodon、Fragilaria vaucheriae、流水不定性で沼沢湿地付着生種群のEunotia pectinalis var. minor、流水不定性のGomphonema parvulum等を伴う。沼沢湿地付着生種群とは、沼よりも浅く水深が1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の浅い湿地で優勢な出現が見られることから、そのような水域を指標することができる種群のことである(安藤, 1990)。

(2)花粉分析

結果を表2、図2に示す。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なも

表 2　花粉分析結果

種類	試料番号	5区 西壁 2－ 10	11	9区 SD510北 3	5	11	17区北 西壁 F3	F4	F6	F6′	F7上
木本花粉											
モミ属		－	－	－	－	1	2	1	2	－	1
ツガ属		－	－	－	－	－	1	－	1	1	2
トウヒ属		－	－	－	－	－	1	－	－	－	－
マツ属単維管束亜属		－	1	－	－	－	6	17	9	3	7
マツ属複維管束亜属		6	15	－	10	22	12	13	8	9	5
マツ属（不明）		18	13	10	25	20	48	9	13	11	14
コウヤマキ属		－	－	－	－	－	3	－	1	－	－
スギ属		4	2	1	6	4	14	9	22	24	21
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科		－	－	－	－	－	1	1	－	6	2
ヤナギ属		3	－	－	－	3	1	55	7	16	－
ヤマモモ属		1	－	－	1	2	－	－	－	－	－
サワグルミ属		2	1	－	2	3	1	2	1	1	1
クルミ属		1	1	－	－	3	14	15	16	14	15
クマシデ属－アサダ属		4	2	－	－	3	3	6	17	9	4
ハシバミ属		1	－	－	－	－	－	－	－	2	－
カバノキ属		3	4	1	－	3	－	2	1	2	2
ハンノキ属		22	2	1	8	2	35	12	14	38	45
ブナ属		30	22	1	34	30	24	15	15	12	18
コナラ属コナラ亜属		16	12	5	19	13	20	31	34	20	50
コナラ属アカガシ亜属		－	－	－	－	－	2	4	2	5	－
クリ属		4	7	－	－	－	12	9	13	9	5
シイノキ属		－	－	－	－	－	2	－	－	－	－
ニレ属－ケヤキ属		4	1	1	5	3	16	11	24	13	9
エノキ属－ムクノキ属		－	－	－	－	－	1	1	1	1	1
カツラ属		－	－	－	－	－	－	－	1	－	－
コクサギ属		－	－	－	－	－	－	－	1	1	－
キハダ属		1	1	－	－	1	－	1	－	－	－
ウルシ属		1	5	－	－	－	3	7	6	5	－
モチノキ属		－	－	－	1	－	2	－	－	1	－
カエデ属		－	1	－	3	1	1	2	6	2	29
トチノキ属		－	－	－	－	－	1	－	2	2	－
アワブキ属		－	15	－	－	－	－	－	－	－	－
ノブドウ属		－	－	－	－	－	1	－	1	－	－
シナノキ属		－	－	－	－	－	－	－	－	1	－
ウコギ科		－	－	－	－	－	2	－	1	2	13
ツツジ科		1	－	－	－	－	－	－	1	－	－
カキ属		－	－	－	－	－	－	－	－	1	－
エゴノキ属		－	－	－	－	－	－	1	2	1	－
トネリコ属		－	1	－	－	1	1	－	2	1	1
ガマズミ属		－	1	－	－	1	－	－	1	1	－
タニウツギ属		－	－	－	－	－	－	－	－	－	1
スイカズラ属		－	1	－	－	－	－	－	－	－	－
草本花粉											
ガマ属		1	－	－	2	1	－	1	－	－	－
サジオモダカ属		1	1	－	2	－	－	－	－	－	－
オモダカ属		1	2	－	3	－	－	－	－	－	－
イネ科		367	155	126	398	356	50	56	60	53	34
カヤツリグサ科		12	13	13	24	24	14	15	19	19	8
ホシクサ属		－	－	－	1	－	－	－	－	－	－
イボクサ属		－	－	－	2	2	1	－	－	－	－
ミズアオイ属		5	4	－	5	1	－	－	－	－	－
ユリ属		－	－	－	－	1	－	－	－	－	－
クワ科		26	27	4	4	49	3	41	33	76	49
ギシギシ属		1	－	－	－	1	－	－	4	－	－
イブキトラノオ節		－	1	－	－	－	－	－	－	－	－
サナエタデ節－ウナギツカミ節		5	3	8	12	6	2	7	1	9	1
タデ属		1	30	1	3	7	－	1	－	－	－
ソバ属		30	5	2	6	21	－	－	－	－	－
アカザ科－ヒユ科		92	16	34	13	45	1	14	17	6	5
サデコボ科		20	4	－	6	20	－	1	2	－	－
カラマツソウ属		1	－	－	－	1	1	1	－	－	－
キンポウゲ科		－	－	1	－	1	3	4	2	3	－
アブラナ科		2	1	－	－	1	－	2	2	2	－
ワレモコウ属		1	－	2	－	－	－	－	－	－	－
バラ科		1	1	1	2	1	－	5	4	4	13
カタバミ属近似種		－	3	－	－	－	－	－	－	2	－
フリフネソウ属		－	－	－	－	－	－	－	－	－	2
ミソハギ属		－	－	－	－	－	－	－	－	－	1
ミズタマソウ属		－	－	－	－	－	1	－	－	－	－
アリノトウグサ科		2	－	－	－	－	－	－	－	－	－
セリ科		6	1	－	1	－	－	4	1	1	－
ヒルガオ科		－	－	－	－	1	－	－	－	－	－
ネジキカズラ属		1	2	－	－	－	－	－	－	－	－
シソ科		－	－	－	－	－	－	－	－	－	1
オオバコ属		－	－	－	－	1	－	－	6	5	－
ツリガネニンジン属－ホタルブクロ属		1	3	－	－	－	－	－	2	－	－
ヨモギ属		45	12	13	41	31	52	58	31	112	83
オナモミ属		－	－	－	－	－	－	－	2	－	－
キク亜科		－	1	4	15	1	3	1	－	4	1
タンポポ亜科		2	－	2	3	－	1	1	－	1	－
不明花粉		6	6	8	13	15	7	16	25	21	13
シダ類胞子											
ヒカゲノカズラ属		－	－	－	－	－	－	－	－	1	－
ゼンマイ属		10	－	2	1	2	16	－	4	3	5
他のシダ類胞子		64	56	43	64	90	193	48	79	61	36
合　計											
木本花粉		123	109	20	114	103	234	225	223	216	246
草本花粉		634	280	208	529	589	128	212	184	297	198
不明花粉		6	6	8	13	15	7	16	25	21	13
シダ類胞子		74	56	45	65	92	209	48	83	65	41
総計（不明を除く）		821	445	273	708	784	571	485	490	578	485

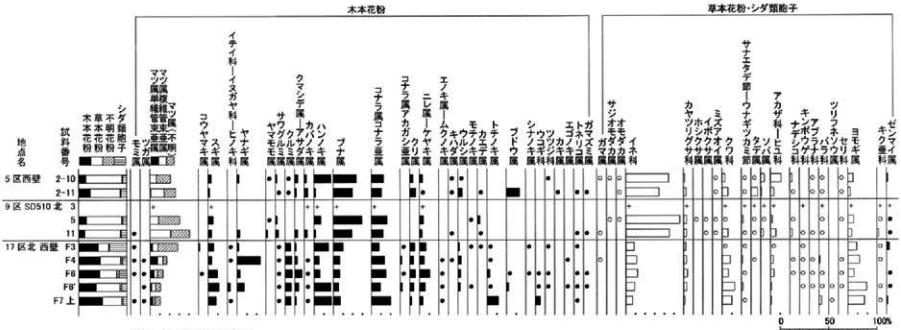


図 2. 主要花粉化石群集

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。
なお、●○は1%未満、＋は木本花粉 100 個体未満の試料について検出した種類を示す。

のを示す。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を＋で表示するにとどめておく。以下、地点ごとに述べる。

・5区西壁

いずれの試料も花粉化石群集は類似しており、草本花粉の占める割合が高い。その多くはイネ科により占められており、その他ではカヤツリグサ科、クワ科、タデ属、アカザ科－ヒユ科、ヨモギ属などが認められる。また、わずかではあるが、ガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属などの水湿地生植物に由来する花粉も検出される。栽培種ではソバ属が検出されるほか、イネ科の中にはイネ属に類する花粉が産出する。

木本花粉をみると、マツ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属などが多く認められ、スギ属、クマシデ属－アサダ属、ハンノキ属、クリ属などを伴う。なお、試料番号2－11ではブドウ属が、試料番号2－10ではハンノキ属が、やや多く認められる。

・9区ＳＤ510北

試料番号11，5の花粉化石群集は、いずれも5区西壁の試料に類似する。多産する草本花粉ではイネ科の占める割合が高く、カヤツリグサ科、クワ科、アカザ科－ヒユ科、ヨモギ属などを伴う。また、水湿地生植物のガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ホシクサ属、イボクサ属、ミズアオイ属や、栽培種であるソバ属に由来する花粉も認められる。なお、イネ科の中にはイネ属に類する花粉が、キク亜科の中にはベニバナ属に類する花粉も検出される。

木本花粉では、マツ属、ブナ属、コナラ亜属が多く検出し、スギ属、サワグルミ属、ハンノキ属、ニレ属－ケヤキ属などを伴う。

なお、試料番号3では木本花粉の産出状況が悪く、定量解析を実施することができなかったが、試料番号11，5同様草本花粉の割合が高く、イネ科により占められる傾向がある。木本花粉でもマツ属、コナラ亜属など、試料番号11，5で多産した種類が認められることから、基本的に花粉化石群集は類似していると考えられる。

・17区北　西壁

本地点の試料は、前述の2地点と異なり、木本花粉と草本花粉がほぼ同率で検出される。群集組成も前述の2地点とは異なる。草本花粉ではイネ科、クワ科、ヨモギ属が多く産出し、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、バラ科などを伴う。

木本花粉では、マツ属、スギ属、ハンノキ属、コナラ亜属などが多く産出し、クルミ属、ブナ属クリ属、ニレ属－ケヤキ属などを伴う。また、ヤナギ属やトチノキ属の割合が高い試料も認められる。

(3)植物珪酸体分析

結果を表3、図3に示す。5区西壁と9区西ＳＤ510北では、保存状態が良好な植物珪酸体が検出される。しかし、17区北の西壁では保存状態が悪く、検出個数も少ない。以下に、各地点での産状を述べる。

・5区西壁

古代の遺物包含層の可能性があるとされるⅢ層から採取された試料番号12でクマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属などを含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科が認められ、クマザサ属やヨシ属の産出が目立つ。ＳＤ　Ｆ3の試料番号10、ＳＤ　Ｆ4の試料番号11ではクマザサ属とともにイネ属の産出が目立ち、籾殻に形成される穎珪酸体や葉部に形成される短細胞列も認められる。この他に検出される種類は試料番号12と同様である。

・9区西ＳＤ510北

試料番号3（泥炭様の中層）と11（最も新しい掘り込み層とされる泥炭層）で栽培植物であるイネ属の産出が目立ち、籾殻に形成される穎珪酸体や葉部に形成される短細胞列も認められる。この他には、クマザサ

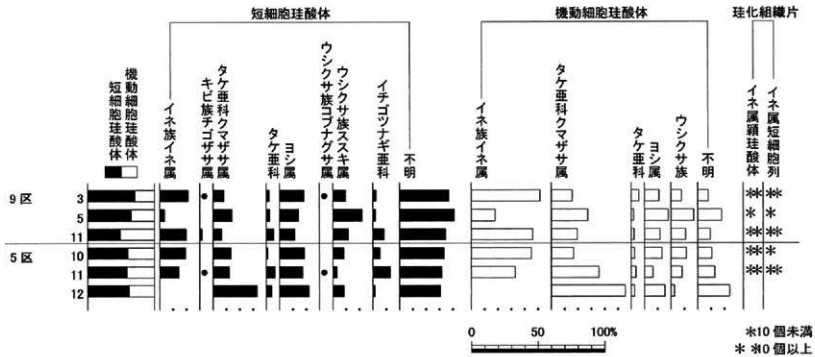


図 3. 植物珪酸体群集と珪化組織片の産状

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。

なお、●は1%未満の種類を示す。また、珪化組織片の産状を＊で示す。

表3　植物珪酸体分析結果

種類 / 試料番号	5区 西壁2－ 10	11	12	9区 S D510北 3	5	11	17区北 西壁 F3	F4	F6	F6'	F7上
イネ科葉部短細胞珪酸体											
イネ族イネ属	33	22	－	51	7	24	－	2	－	－	－
キビ族チゴザサ属	－	1	－	1	－	2	－	－	－	－	－
タケ亜科クマザサ属	23	19	63	20	28	8	2	5	4	3	－
タケ亜科	2	10	8	5	5	7	3	1	2	1	1
ヨシ属	32	27	42	44	28	14	－	3	3	1	－
ウシクサ族コブナグサ属	－	1	－	1	－	－	－	－	－	－	－
ウシクサ族ススキ属	14	5	16	23	43	14	－	－	－	－	－
イチゴツナギ亜科	9	20	3	6	4	10	－	－	－	－	－
不明キビ型	34	21	34	64	42	23	－	－	－	1	－
不明ヒゲシバ型	9	5	8	12	13	4	－	－	－	1	－
不明ダンチク型	14	23	17	14	26	15	2	－	－	2	1
イネ科葉身機動細胞珪酸体											
イネ族イネ属	51	36	－	52	19	59	1	2	－	－	－
タケ亜科クマザサ属	19	39	65	16	29	25	11	8	8	1	4
タケ亜科	3	4	3	6	2	3	－	－	－	－	－
ヨシ属	15	7	18	11	19	15	7	4	6	1	－
ウシクサ族	13	9	3	8	18	14	－	－	－	－	－
不明	12	14	28	8	19	12	8	16	5	3	3
合　計											
イネ科葉部短細胞珪酸体	170	154	191	241	196	121	7	11	9	9	2
イネ科葉身機動細胞珪酸体	113	109	117	101	106	128	27	30	19	5	7
総　計	283	263	308	342	302	249	34	41	28	14	9
珪化組織片											
イネ属籾珪酸体	31	18	－	23	4	50	－	－	－	－	－
イネ属短細胞列	10	11	－	37	4	17	2	－	1	－	－

属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属などを含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科も認められる。試料番号5（砂混じり粘土）でも同様な種類が見られるが、イネ属よりもクマザサ属やヨシ属の産出が目立つ。

・17区北の西壁

試料5点では、クマザサ属を含むタケ亜科あるいはヨシ属がわずかに認められるに過ぎない。また、試料F3とF4でイネ属がわずかに検出される。

(4)樹種同定

樹種同定結果を表4に示す。木製品および自然木は、針葉樹4種類（アカマツ・マツ属複維管束亜属・スギ・イチイ）と広葉樹4種類（ブナ属・ニレ属・モクレン属・トチノキ）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・アカマツ（Pinus densiflora Sieb. et Zucc.）　マツ科マツ属

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、柔組織、仮道管、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1－15細胞高。

・マツ属複維管束亜属（Pinus subgen. Diploxylon）　マツ科

上記アカマツとほぼ同じ特徴を有するが、放射仮道管内壁の鋸歯がアカマツに比較して小さいものを複維管束亜属とした。複維管束亜属には、アカマツの他に本州ではクロマツが含まれる。クロマツは、アカマツよりも鋸歯が緩やかになる傾向があるが、今回の試料ではアカマツとクロマツの中間的な特徴もみられ、アカマツかクロマツかの区別ができなかった。

・スギ（Cryptomeria japonica（L. f.）D. Don）　スギ科スギ属

表４　樹種同定結果

番号	ＲＰNo.	地区	遺構	位置	遺物名	部位	時期	樹種
1		北12区	ＳＫ1203		橋脚	－	中近世	スギ
2		北12区	ＳＫ1203		橋脚板	－	中近世	スギ
8		15区	ＳＫ1577	11	橋板		中近世	マツ属複維管束亜属
10		17区北	河跡	東壁	弓		古代	イチイ
11		17区	ＳＰ３西（水路東）		木組	板１	中近世	スギ
12	ＲＷ1818	17区	北西トレンチ		自然木		古代	ニレ属
13	ＲＷ18189	17区	北西トレンチ		自然木		古代	トチノキ
14		17区	ＳＰ1790		木柱		中近世	アカマツ
15		９区	ＳＰ2953		木柱		中近世	スギ
16		14区	ＳＰ1437		木柱		中近世	マツ属複維管束亜属
17	ＲＷ2205	９区	ＳＫ2206		漆器椀		中近世	ブナ属
18	ＲＷ2207	９区	ＳＫ2206		漆器椀		中近世	ブナ属
19	ＲＷ34	３区			漆器椀		中近世	ブナ属
23		１区	ＳＫ412		下駄		中近世	モクレン属
24	ＲＷ43	１区	ＳＫ412		下駄		中近世	モクレン属
25		17区	ＳＰ1784		下駄	台	中近世	モクレン属
26		15区	ＳＤ1531	２面	木樋	蓋	中近世	アカマツ
27		15区	ＳＤ1531	２本体	木樋	本体	中近世	マツ属複維管束亜属
28		15区	ＳＤ1531	南１の蓋	木樋	蓋	中近世	マツ属複維管束亜属
29		15区	ＳＤ1531	南１の本体	木樋	本体	中近世	マツ属複維管束亜属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、１分野に２－４個。放射組織は単列、１－15細胞高。

・イチイ（Taxus cuspidata Sieb. et Zucc.）　イチイ科イチイ属

試料は、芯持丸木で破損部がほとんど無いため、柾目面の切片が採取できなかった。軸方向組織は仮道管のみで構成され、観察した範囲では樹脂道および樹脂細胞は認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。仮道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型で、１分野に１－２個。放射組織は単列、１－５細胞高。

・ブナ属（Fagus）　ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に２－３個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は同性～異性、単列、数細胞高のものから複合放射組織までである。

・ニレ属（Ulmus）　ニレ科

環孔材で、孔圏部は１－２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、多数が塊状に複合して接線・斜方向に紋様状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、１－６細胞幅、１－40細胞高。

・モクレン属（Magnolia）　モクレン科

散孔材で、管壁厚は中庸～薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独および２－４個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性、１－２細胞幅、１－40細胞高。

・トチノキ（Aesculus turbinata Blume）　トチノキ科トチノキ属

散孔材で、管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または２－４個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、１－20細胞高。

トチノキの特徴である放射組織の階層状配列が明確ではないが、道管内壁にらせん肥厚を有し、放射組織が同性、単列となる樹種で該当するのがトチノキのみであるため、トチノキとした。

4.基本土層の成因と環境

古代の遺物包含層の可能性があるとされるⅢ層(試料番号12)は、珪藻化石が少なかったことから堆積環境について検討することは困難である。ただし、産出する種が陸生珪藻であることを考慮すると、離水後の好気的環境下で形成したことが示唆される。

一方、植物珪酸体をみると、クマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属などを含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科が認められ、クマザサ属やヨシ属の産出が目立った。この傾向は、イネを欠くものの、前述した水路の組成と大きく変化していないことから、周辺植生は近世と同様に開けた草地のような景観が示唆される。本層準の形成年代については本遺跡周辺の地形変遷や遺跡の形成時期に関わる課題となるため、今後出土遺物や自然科学分析例を蓄積し、さらに検討することが望まれる。

6・7区東壁のⅡ'層は、耐乾性の高い陸生珪藻A群を多く含む陸生珪藻が約80%と優占することで特徴付けられた。このことから、堆積物自体は氾濫堆積物が母材になっていると考えられるが、その後好気的環境下にさらされていたことが示唆される。

5.近世水路の堆積環境と古植生

(1)近世水路の堆積環境

9区西SD510は、珪藻化石群集の違いから、試料番号3と試料番号5、11に2区分された。これらの試料は、水路の新旧関係により、古い時期から試料番号5、試料番号3、試料番号11と変遷している。したがって、最も古い時期(試料番号5)と、最も新しい時期(試料番号11)では、中～下流性河川指標種群を含む流水性種が多産することによって特徴付けられ、止水環境を指標する種類は殆ど産出しなかった。よって、水路内は流水域であったと考えられる。また、試料番号5からは、塩類や塩分を含む水域に生育する珪藻化石も多産したことから、水質的には試料番号11と比較して富栄養な水域であったと考えられる。

一方、両時期の中間の時期(試料番号3)では、陸生珪藻が多産するようになることから、しばしば水の流れない状態が存在したと考えられる。

5区西壁基本土層にみられる水路では、珪藻化石群集に違いが認められる。試料番号11は、流水不定性種が優占し、中～下流性河川指標種群を含む流水性種や止水性種を伴うことから、流水域で堆積したことが考えられる。一方、新しい時期の試料番号10は好汚濁性種や塩分や塩類を豊富に含む水域に生育する淡水～汽水性種が多産することで特徴付けられた。よって、富栄養化による塩類の蓄積が推定され、流れの影響も少なくなったと考えられる。

(2)近世の周辺植生

近世の水路から検出された植物珪酸体は、いずれの試料もイネ属の産出が目立ち、籾殻や葉部に形成される珪化組織片も認められた。これは、当時周辺で行われていた稲作に由来すると考えられる。さらに、花粉化石でもイネ属花粉を含むイネ科が多量に検出されることとも調和的である。また、稲藁や稲籾は、古くから燃料材や建築部材などとしても利用されており、このような生活資材に由来する可能性もある。その他の栽培植物に関しては、ソバ属とベニバナの花粉化石が検出されており、これらの栽培が示唆される。今回は、検出されたキク亜科花粉の一部に、金原(1993)で示されているベニバナ花粉類似の花粉化石が含まれていることから、ベニバナ栽培が行われているとしたが、ベニバナを含めキク科花粉化石の形態

分類に関しては不明な部分も多く、今後の課題である。また、ベニバナ栽培の事例との照合も望まれる。

草本花粉をみると、イネ科が多く、カヤツリグサ科、クワ科、アカザ科－ヒユ科、ヨモギなどが検出される。また、植物珪酸体ではススキ属などを含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出される。これらはいずれも人里など開けた草地を好む種類を多く含むことから、遺跡周辺はこれらが生育する草地であったと考えられる。また、植物珪酸体、花粉化石をみると水生植物が検出されており、ガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ヨシ属、ミズアオイ属が水路内やその周辺に生育していたものとみられる。これらの種類は水田雑草として普通にみられることから（最近は農薬の影響で激減したが）、一部は当時の水田に生育していたと考えられる。

木本花粉化石は、割合が低いことから、後背山地など比較的遠い場所の植生を反映していると考えられる。マツ属は、人為的な森林破壊のために生じたマツの二次林や植林に由来すると考えられる。また、コナラ亜属やブナ属は深山に安定した森林を作る種類であることから、山地を中心に分布していたと考えられる。なお、植物珪酸体では、クマザサ属を含むタケ亜科が多く検出される。クマザサ属は、ナラ林やブナ林の林床に分布するほか、切り開かれた場所に先駆的に進入し、ササ群落をつくることもある。検出された植物珪酸体は、このような場所に生育していたササ類に由来すると考えられる。

6. 古代河川の堆積環境と古植生

⑴古代河川の堆積環境

河川跡から採取されたＦ３、Ｆ４、Ｆ６、Ｆ６'、Ｆ７上の５試料は、試料によって産出種や量比が若干異なるが、ほぼ同様の珪藻化石群集が認められる。これらの試料からは、中～下流性河川指標種群を含む流水性種や沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種等がみられるが、特に多産する種がなく、いずれの種もほぼ同様の産出率となる。このような群集は、混合群集と呼ばれ、氾濫堆積部等の一過性の堆積物によくみられる（堀内ほか，1996）。このことは、堆積物が砂混じりで氾濫堆積物と考えられることとも調和的であり、上流部の様々な環境に生育していた珪藻が混在していることが推定される。

⑵古代の古植生

17区北から検出された奈良時代～平安時代の河川跡の堆積物には、比較的広域の植生を反映する木本類としてマツ属、スギ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属などが多く産出し、クルミ属、ブナ属クリ属、ニレ属－ケヤキ属などを伴う。また、河川内から出土した自然木は、落葉広葉樹のニレ属とトチノキであった。植物珪酸体分析では、ヨシ属やクマザサ属が僅かに検出されたが、全体的に産出状況は悪い。

ブナ属、コナラ亜属などは冷温帯性落葉広葉樹林の主要構成要素であり、植物珪酸体で認められたクマザサ属にはこれらの落葉広葉樹林の林床に生育する種を含む。後背の山地や丘陵部には、ブナ属、コナラ亜属などからなる落葉広葉樹林が成立しており、部分的にモミ属、ツガ属、マツ属、スギ属などの針葉樹も生育していたことが推定される。また、落葉広葉樹林の林床にはクマザサ属が生育していたと考えられる。

一方、ハンノキ属は河畔や低湿地などの適湿地を好む種を含む分類群である。供伴するヤナギ属、クルミ属、クマシデ属－アサダ属、ニレ属－ケヤキ属なども、ハンノキ属同様、河畔や低湿地に生育する種を含む。したがって、自然木に認められたトチノキを含めたこれらの落葉広葉樹が、河川周辺の低地に生育していたことが推定される。また、部分的にヨシ属の生育する湿地等も見られた可能性がある。

本地域の潜在自然植生（人間の影響を一切停止したときに、現在の気候、地形、土壌条件下で成立すると考えられる自然植生）をみると、栗子山などの後背山地・丘陵ではチシマザサ－ブナ群団であり、低地や河畔沿いなどはハルニレ群集、エゾエノキ－ケヤキ群集、ハンノキ－ヤチダモ群集とされている（宮脇，1987）。これらの植生は、今回認められた化石群集から推定される古植生とも矛盾しない。

遺跡周辺の植生を反映する草本類をみると、イネ科、クワ科、ヨモギ属が多く産出し、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、バラ科などを伴う。これらの多くは、開けた明るい場所を好む「人里植物」を含む分類群であることから、遺跡内あるいはその周囲の草地に生育していたものに由来すると考えられる。なお。植物珪酸体分析では、栽培種であるイネ属が僅かに検出されており、周辺で栽培されたイネに由来する可能性がある。

7.木製品の木材利用

(1)古代の木製品

古代の木製品は、河川跡から出土した弓１点で、針葉樹のイチイに同定された。イチイは、針葉樹としては重硬な部類に入り、加工は困難で極めて強固であり、耐水性は高い。山形県内では類例がほとんどないが、遺跡から出土する弓には芯持丸木を使った白木の弓、芯を外して加工した漆塗りの弓等がある。芯持丸木の白木弓は多くの場合針葉樹が利用され、イヌガヤやカヤなどが多いが、ヒノキなども希に見られる。一方、漆塗り弓では、ニシキギ属やカバノキ属等の広葉樹材が多い。今回の弓は、芯持丸木で白木の弓であり、針葉樹のイチイが利用されていることから、既存の調査例とも調和的といえる。

(2)中近世の木製品

中近世の木製品は、橋脚、木柱、木樋、木組、桶等の建築・土木材、下駄、漆器等の生活道具がある。器種別種類構成を表５に示す。建築・土木材は全て針葉樹材であり、アカマツ、複維管束亜属、スギの３種類が認められた。このうち、複維管束亜属は、アカマツを含む分類群であり、他にクロマツが含まれるが、今回の調査ではアカマツのみが認められたことから、複維管束亜属とした試料もアカマツの可能性がある。スギは木理が通直で割裂性が高く、加工は容易である。複維管束亜属(アカマツを含む)は、針葉樹としては重硬な部類に入り、加工は容易で保存性が高い。これらは、中近世の建築・土木材として重要な木材であり、多くの出土例が知られている。

表５　器種別種類構成

時期	遺物名	部位	アカマツ	複維管束亜属	スギ	イチイ	ブナ属	ニレ属	モクレン属	トチノキ	合計
古代	弓					1					1
古代	自然木							1		1	2
中近世	橋脚				1						1
中近世	橋脚板				1						1
中近世	木組				1						1
中近世	木柱		1	1	1						3
中近世	木樋	フタ	1	1							1
中近世	木樋	本体		2							2
中近世	桶板			1							1
中近世	漆器椀						3				3
中近世	下駄								3		3
合　計			2	5	4	1	3	1	3	1	20

建築・土木材を器種別に見ると、橋脚および橋脚板、木組はいずれもスギであった。また、木樋は、一木を刳って蓋と本体に分けたのち、本体の内部を刳り貫いたものであり、いずれも複維管束亜属(アカマツを含む)であった。また、上水施設の桶板も複維管束亜属であった。これらのことから、建築・土木材の中でも、用途により特定の木材が選択された可能性がある。一方、木柱はスギと複維管束亜属が混在する組成であった。同じ柱材でも用途・部位などで樹種が使い分けられていた可能性もあるが、それについては今後出土状況等も含めた検討が望まれる。

木製品は、全て広葉樹材で、下駄は３点ともモクレン属、漆器は３点ともブナ属であり、器種別に樹種が異なる結果となった。モクレン属は散孔材で、比較的加工は容易であるが丈夫であり、民俗事例で下駄によく利用されるホオノキも含まれている。なお、試料番号25は差歯下駄で、台の他に２本の歯も残っていた。試料採取時の観察では、歯には環孔材が用いられていた。このことから、台と歯では、使用された木材が異なっていた可能性がある。今後、歯についても樹種同定を実施して、台と歯の組合せについても

明らかにしたい。一方、ブナ属は、現在も漆器の木地等に利用される木材であり、民俗事例ではトチノキ等と共に乾燥が難しく変形しやすいが加工が容易であり、利用量も多いとされる（檜本，1979）。遺跡からの出土例をみると、漆器にはブナ属、トチノキ、ケヤキが多くみられ、民俗事例の木材利用とも矛盾しない。

引用文献

安藤　一男，1990，淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，73－88．

Asai,K.&Watanabe,T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2)Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,35－47.

原口　和夫・三友　清史・小林　弘，1998，埼玉の藻類　珪藻類．埼玉県植物誌，埼玉県教育委員会，527－600．

橋本　鉄男，1979，ろくろ．法政大学出版局，444p．

林　昭三，1991，日本産木材　顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所．

堀内　誠示・高橋　敦・橋本　真紀夫，1996，珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について　－混合群集の認定と堆積環境の解釈－．日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨集，62－63．

伊東　隆夫，1995，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料31，京都大学木質科学研究所，81－181．

伊東　隆夫，1996，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料32，京都大学木質科学研究所，66－176．

伊東　隆夫，1997，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料33，京都大学木質科学研究所，83－201．

伊東　隆夫，1998，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料34，京都大学木質科学研究所，30－166．

伊東　隆夫，1999，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ．木材研究・資料35，京都大学木質科学研究所，47－216．

伊藤　良永・堀内　誠示，1991，陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6，23－45．

金原　正明，1993，遺跡から出るペニバナ花粉．新版　古代の日本10　古代資料研究の方法，角川書店，262．

近藤　錬三・佐瀬　隆，1986，植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，31－64．

小杉　正人，1988，珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，1－20．

Krammer,K.,1992,PINNULARIA.eine Monographie der europaischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26.J.CRAMER,353p.

Krammer,K.&Lange－Bertalot,H.,1986,Bacillariophyceae.1.Teil：Naviculaceae.In：Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/1.Gustav Fischer Verlag.876p.

Krammer,K.&Lange－Bertalot,H.,1988,Bacillariophyceae.2.Teil：　Epithemiaceae,Bacillariaceae,Surirellaceae.In：Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2.Gustav Fischer Verlag,536p.

Krammer,K.&Lange－Bertalot,H.,1991a,Bacillariophyceae.3.Teil：　Centrales,Fragilariaceae,Eunotiaceae.In：Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3.Gustav Fischer Verlag,230p.

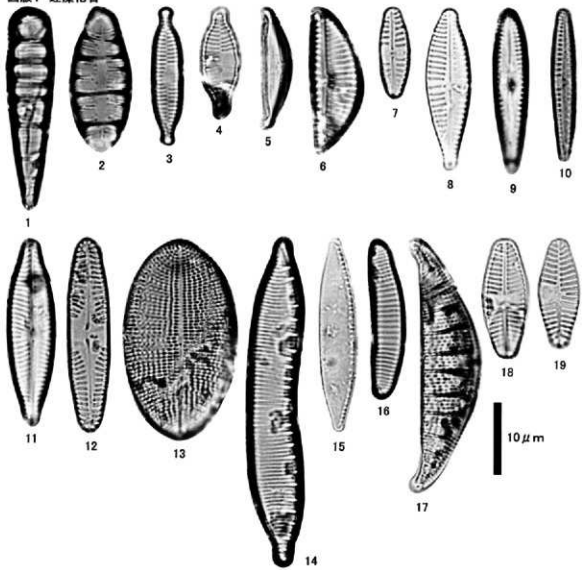
Krammer,K.&Lange－Bertalot,H.,1991b,Bacillariophyceae.4.Teil：Achnanthaceae,Kritsche Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae)und Gomphonema.In：Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/4.Gustav Fischer Verlag,248p.

宮脇　昭（編著），1987，日本植生誌　東北．至文堂，605p．

島地　謙・伊東　隆夫，1982，図説木材組織．地球社，176p．

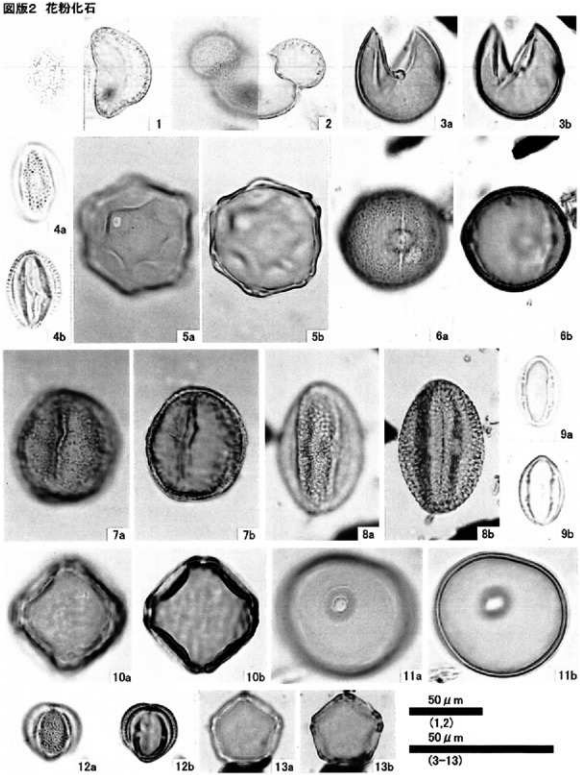
Wheeler E.A.,Bass P.and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p.[Wheeler E.A.,Bass P.and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

図版1 珪藻化石



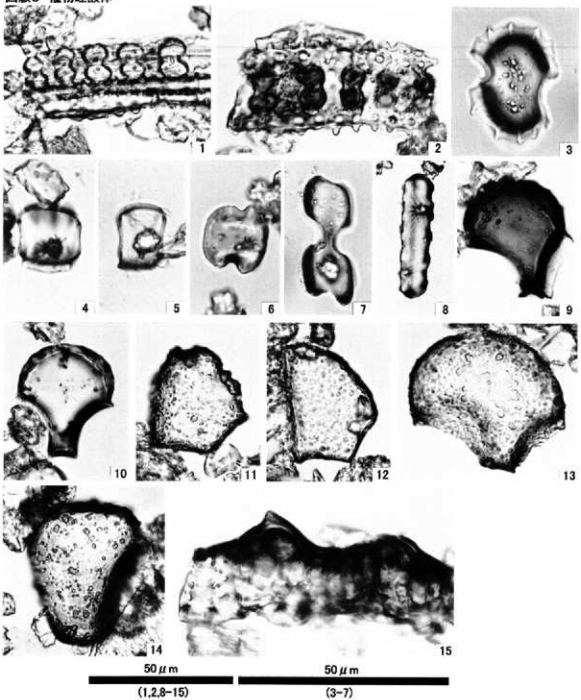
1．*Meridion circulae* var. *constrictum* (Ralfs)V.Heurck(9区西;5)
2．*Diatoma mesodon* (Ehren.)Kuetzing(17区;F3)
3．*Fragilaria vaucheriae* var. *capitellata* (Grun.)Patrick(9区西;3)
4．*Fragilaria vaucheriae* (Kuetz.)Petersen(9区西;3)
5．*Amphora montana* Krasske(9区西;3)
6．*Cymbella silesiaca* Bleisch(9区西;5)
7．*Cymbella sinuata* Gregory(9区西;5)
8．*Gomphonema parvulum* Kuetzing(9区西;11)
9．*Gomphonema clevei* Fricke(9区西;5)
10．*Gomphonema pumilum* (Grun.)Reichardt & Lange-Bertalot(17区;F6)
11．*Navicula veneta* Kuetzing(5区西壁;2-10)
12．*Pinnularia subcapitata* var. *paucistriata* (Grun.)Cleve(9区西;3)
13．*Cocconeis placentula* var. *lineata* (Ehren.)Cleve(17区;F4)
14．*Hantzschia amphioxys* (Ehr.)Grunow(9区西;3)
15．*Nitzschia palea* (Kuetz.)W.Smith(5区西壁;2-10)
16．*Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kuetz.)Rabenhorst(17区;F3)
17．*Rhopalodia gibberula* (Ehr.)O.Muller(9区西;5)
18．*Achnanthes lanceolata* (Breb.)Grunow(9区西;11)
19．*Achnanthes lanceolata* (Breb.)Grunow(17区;F4)

図版2 花粉化石



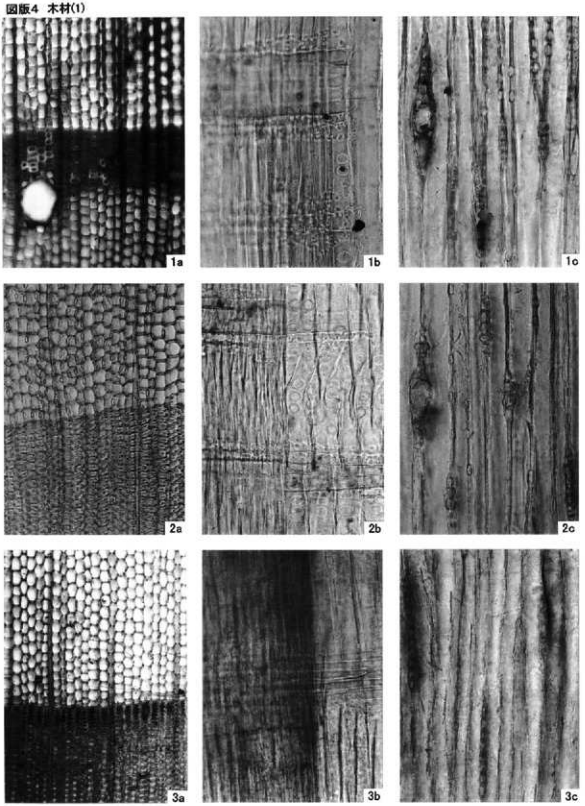
1．マツ属単維管束亜属(17区北;F4)
2．マツ属複維管束亜属(17区北;F4)
3．スギ属(17区北;F7上)
4．ヤナギ属(17区北;F4)
5．クルミ属(17区北;F4)
6．ブナ属(17区北;F7上)
7．コナラ亜属(17区北;F4)
8．ソバ属(5区西壁;2-10)
9．トチノキ属(17区北;F7上)
10．ニレ属-ケヤキ属(17区北;F4)
11．イネ科(17区北;F4)
12．ヨモギ属(17区北;F7上)
13．ハンノキ属(9区西 SD510北;11)

図版3　植物珪酸体



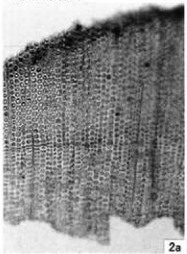
1．イネ属短細胞列(9区西 SD510北;3)
2．イネ属短細胞列(5区西壁;2-10)
3．チゴザサ属短細胞珪酸体(9区西 SD510北;11)
4．クマザサ属短細胞珪酸体(9区西 SD510北;5)
5．クマザサ属短細胞珪酸体(5区西壁;2-12)
6．ヨシ属短細胞珪酸体(9区西 SD510北;5)
7．ススキ属短細胞珪酸体(9区西 SD510北;5)
8．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(9区西 SD510北;11)
9．イネ属機動細胞珪酸体(9区西 SD510北;3)
10．イネ属機動細胞珪酸体(5区西壁;2-10)
11．クマザサ属機動細胞珪酸体(9区西 SD510北;5)
12．クマザサ属機動細胞珪酸体(5区西壁;2-12)
13．ヨシ属機動細胞珪酸体(9区西 SD510北;5)
14．ウシクサ族機動細胞珪酸体(5区西壁;2-12)
15．イネ属頴珪酸体(9区西 SD510北;3)

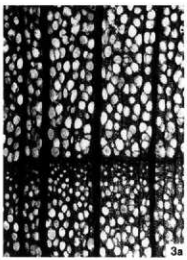
図版4　木材(1)

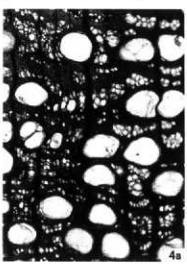


1. アカマツ(試料番号16)
2. マツ属複維管束亜属(試料番号27)
3. スギ(試料番号15)
   a:木口, b:柾目, c:板目

図版5　木材(2)



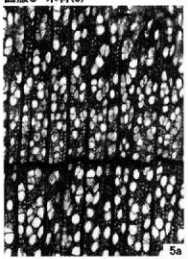


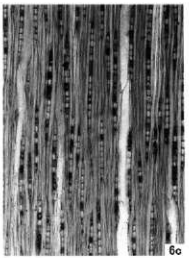


4. イチイ(試料番号10)
5. ブナ属(試料番号18)
6. ニレ属(試料番号12)
a:木口, b:柾目, c:板目

200 μm:3-4a
200 μm:2a-3-4b,c
100 μm:2c

図版6　木材(3)





200 μm : a
200 μm : b,c

7. モクレン属(試料番号23)
8. トチノキ(試料番号13)
a：木口，b：柾目，c：板目

報告書抄録

ふりがな	だいざいけいせきだいいちじ・にじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	大在家遺跡第１次・２次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第153集
編著者名	植松暁彦・槙　綾・渡辺淳一
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999－3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号　ＴＥＬ　023－672－5301
発行年月日	平成18年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
だいざいけいせき 大在家遺跡	やまがたけん 山形県 たかはたまち 高畠町 おおあざたかはた 大字高畠 あざだいざいけ 字大在家	6381	Ａ－17 (町遺跡番号)	38度 00分 06秒	140度 11分 50秒	第１次 2004.6.7 ～ 2004.10.22	997	主要地方道米沢高畠線（高畠都市計画道路中央通り線）街路整備事業
						第２次 2005.5.16 ～ 2005.10.21	1,000	

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	飛鳥・奈良・平安時代	河川跡	須恵器・土師器 木製品	古代では県内で希少な飛鳥様式の土器が出土。中近世では高畠城下の町屋を調査。江戸時代中期の絵図と整合する水路跡を検出。他に県内では検出例の少ない伊達家紋の漆器や江戸時代末期の木樋が出土。(総出土遺物数：272箱)
	中世～近世	掘立柱建物跡 井戸跡 水路跡 溝跡 土坑	中世陶磁器 近世陶磁器 木製品 金属製品	

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第153集

大在家遺跡発掘調査報告書

2006年3月31日発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999－3161　山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話　023－672－5301
印刷　大場印刷株式会社
〒990－2251　山形県山形市立谷川二丁目485－2
電話　023－686－6155（代）